

吹  
田  
操  
車  
場  
遺  
跡  
13

公益財團法人 大阪府文化財センター調査報告書 第274集

吹田市

## 吹田操車場遺跡13

吹田操車場跡地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一六年一二月

2016年12月

公益財團法人 大阪府文化財センター

吹田市

# 吹田操車場遺跡13

吹田操車場跡地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年12月

公益財団法人 大阪府文化財センター



吹田市

# 吹田操車場遺跡13

吹田操車場跡地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年12月

公益財団法人 大阪府文化財センター



吹田市

# 吹田操車場遺跡13

吹田操車場跡地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター





1.2区掘立柱建物群全景（西から）



2.2区掘立柱建物2・3（南から）

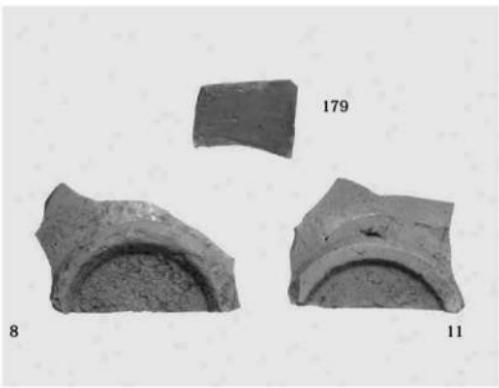




1. 208 土坑土器出土状況（西から）

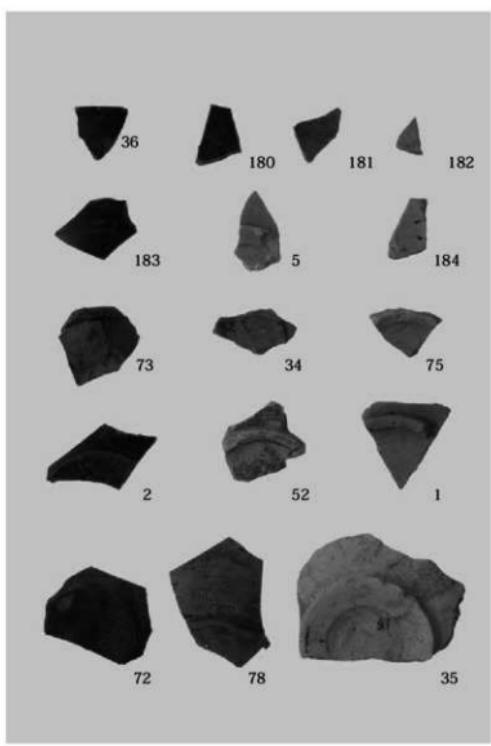


2. 捜立柱建物群周辺から出土した輸入陶磁器





掘立柱建物群周辺から出土した縁釉陶器



36

180

181

182

183

5

184

73

34

75

2

52

1

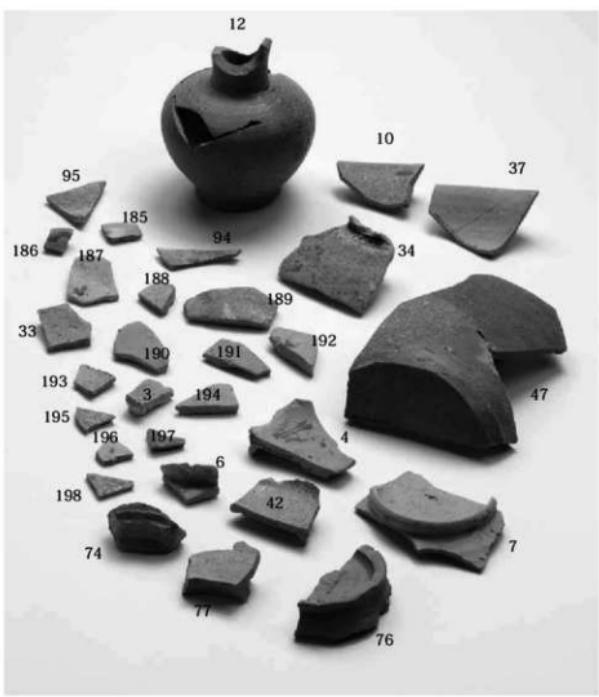
72

78

35



据立柱建物群周辺から出土した灰釉陶器



## 序 文

吹田操車場内に遺跡があることが判明したのは昭和42年にさかのぼります。その後、吹田操車場は貨物駅や操車場の統合化により信号場となりました。昭和63年と平成10年には、操車場の跡地全域で試掘調査がおこなわれ、目的ではありながらも吹田操車場遺跡内の遺構と遺物の遺存状況が判明しました。以降、当センターでは、旧操車場内での開発に伴い数々の発掘調査に携わってきました。昭和の終わりごろから平成10年代にかけての吹田操車場跡地といえば、スキが生い茂る広大な敷地、場内を行き来するにはどれだけ遠くても山田川近くの踏切を渡る、調査地の真横を貨物列車が行きかう、といった印象が懐かしく偲ばれます。しかしこのような印象も平成28年現在ではがらりと一変しています。JR岸辺駅の北側には大きな駅前広場とバス停ができ、その東に国立循環器病研究センター、その西に吹田市新市民病院が建設予定です。今回調査をおこなった場所は駅前広場と新市民病院の間にあたり、ここには医療複合商業施設が予定されています。かつて大正12年にハンプ（阪阜）式操車場として息吹をあげ、「東洋一の操車場」と呼ばれた吹田操車場の跡地は、いまあらたな街へと変貌しようとしています。

このように変貌してゆく吹田操車場の跡地を考えるとき、今回の調査で発見された成果はまさにその変貌の出発点といっても過言ではありません。そこでみつかったのは1200年前の大型掘立柱建物で、その建築構造から一般的な建物よりも格式が高いものと考えられます。建物の詳細な性格は本報告書中に委ねるとしますが、今回の調査成果は、吹田操車場遺跡だけではなく吹田市における古代史上の重要発見といえます。本報告書が当地域の古代史を考えるうえでの一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました西日本旅客鉄道株式会社、JR西日本不動産開発株式会社、吹田市教育委員会、大阪府教育庁をはじめとする関係各位に深く謝意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年12月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 田邊征夫



## 例　　言

1. 本書は大阪府吹田市岸部新町に所在する吹田操車場遺跡の発掘調査報告書である。本調査は公益財団法人大阪府文化財センターが管理する調査番号では吹田操車場遺跡15-1にあたる。

2. 調査は、JR西日本不動産開発株式会社の委託を受け、吹田市教育委員会の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。JR西日本不動産開発株式会社と、公益財団法人大阪府文化財センターの間で交わされた委託契約の名称は、「吹田操車場跡地開発 埋蔵文化財調査業務」である。

委託契約期間は、平成27（2015）年8月3日～平成28（2016）年12月28日である。現地における発掘調査は平成27（2015）年8月3日～平成28（2016）年3月23日の間におこなった。遺物整理作業は平成28（2016）年3月24日～同年9月30日の間におこない、平成28（2016）年12月28日に本書の刊行を以って完了した。

3. 調査及び整理作業は以下の体制で実施した。

〔平成27（2015）年度〕

吹田市教育委員会 地域教育部 生涯学習推進室 文化財保護課（文化財保護担当）

課長 増田真木、主幹 西本安秀、主査 田中充徳、主査 賀納章雄、中岡宏美、堀口健二（非常勤職員）

公益財団法人 大阪府文化財センター

事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 金光正裕  
副主査 奥村茂輝

〔平成28（2016）年度〕

吹田市教育委員会 地域教育部 文化財保護課（文化財保護担当）

課長 増田真木、主幹 西本安秀、主査 田中充徳、主査 賀納章雄、安藤大介、堀口健二（非常勤職員）

公益財団法人 大阪府文化財センター

事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 三好孝一  
副主査 奥村茂輝、専門員 片山彰一（写真室）、山口誠一（保存室）

4. 遺物写真撮影は中部調査事務所写真室がおこなった。

5. 発掘調査及び整理作業の過程で以下の諸氏ならびに機間にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

青木敬（国学院大学）、海野聰・小田裕樹・鈴木智大（以上、奈良文化財研究所）、

金田章裕（京都大学）、高橋照彦（大阪大学）、藤田勝也（関西大学）、大阪府教育庁

6. 本書の執筆・編集は奥村が担当した。

7. 本書に関わる遺物・写真・実測図などの資料類は吹田市教育委員会において保管しており、広く活用されることを希望する。

## 凡　　例

1. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用しT.P.+を全てT.P.で表記している。
2. 座標値は世界測地系（測地成果2000）で表示し、単位はmである。
3. 全体図及び遺構実測図の方位は座標北を示す。
4. 現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』平成22（2010）年に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2015年度・38版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・一般財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6. 遺構は、アラビア数字を用いて通し番号で名称を付けており、アラビア数字の後ろに遺構の形態・種類を表す文字を付している。　例）01流路
7. 遺構番号は調査時に付した番号をそのまま用いている。したがって報告書中の本文・遺構挿図・遺構写真中の遺構番号は、調査時に作成した遺構図面、遺物ラベル、写真・遺物・図面台帳に記されている遺構番号と同一である。
8. 遺構の断面図・平面図は、対象により適宜縮尺を変えて掲載しており、図ごとにスケールバーと縮尺を表示している。
9. 遺物実測図の縮尺は4分の1を基本とし図ごとにスケールバーを表示している。ただし図中に4分の1以外の縮小のものが掲載されている場合は、遺物の下にスケールバーを表示している。写真図版の遺物はスケールを統一していない。
10. 出土遺物の断面表現については、黒塗りが須恵器、白塗りが弥生土器・土師器・瓦器・陶磁器である。陶磁器については施釉部分にグレーの網掛けをし、挿図中に緑釉・灰釉・白磁の別を表示した。
11. 掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
12. 遺跡分布図や調査位置図で用いた地図は、平成10（1998）年12月国土地理院発行1/25,000地図「大阪東北部」、吹田市都市整備室が作成した1/2,500の都市計画図、もしくは大阪府地図情報システムから得た地図データを使用している。なお個々の挿図に原図の出典を記している。

## 本文目次

序文

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 調査の方法	5
第1節 発掘調査	5
第2節 整理作業	5
第3章 地理的・歴史的環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境—周辺の遺跡—	6
第3節 調査地周辺の既往の調査	10
第4章 調査成果	10
第1節 基本層序	10
第2節 検出遺構	23
第5章 総括	90
第6章 古代の掘立柱建物群について	92

## 挿図目次

図1 遺跡の位置	2
図2 調査地の位置	2
図3 調査区割	3
図4 地区割りの方法	3
図5 現地説明会・テレビ取材	4
図6 周辺の遺跡	8
図7 1区北壁断面図	11・12
図8 2区東壁断面図	13・14
図9 2区南壁断面図	15・16
図10 1区西壁断面図	17・18
図11 2区落ち込み断面図	19
図12 第2層出土遺物	21
図13 第3層出土遺物	22
図14 第4層出土遺物	22
図15 1区中世遺構配置図	24

図16	1・2区中世遺構配置図	25
図17	454溝平面・断面図	26
図18	244井戸平面・断面図	26
図19	5・58・259・292土坑平面・断面図	27
図20	9溝平面・断面図	28
図21	中世遺構出土遺物	29
図22	9溝出土遺物	30
図23	1区古代遺構配置図	31
図24	掘立柱建物1平面・断面図	32
図25	2区古代遺構配置図	34
図26	掘立柱建物1平面・断面図	35
図27	掘立柱建物2平面・断面図	37・38
図28	掘立柱建物3平面・断面図	39・40
図29	掘立柱建物2・3間の柱穴列	43
図30	掘立柱建物2・3および関連遺構	44
図31	掘立柱建物2・3の柱間寸法	45
図32	掘立柱建物4平面・断面図	48
図33	掘立柱建物5平面・断面図	49
図34	掘立柱建物6平面・断面図	50
図35	掘立柱建物8平面・断面図	51・52
図36	掘立柱建物7平面・断面図	53
図37	掘立柱建物9平面・断面図	54
図38	掘立柱建物10平面・断面図	55
図39	掘立柱建物2・3・4出土遺物	56
図40	掘立柱建物5出土遺物	56
図41	掘立柱建物6・7・9出土遺物	56
図42	515土坑平面・断面図	58
図43	208土坑平面・断面図	59
図44	208土坑出土遺物	59
図45	230・397・422・334・335土坑平面・断面図	60
図46	349溝平面図(断面図は図11)	61
図47	349溝出土遺物	62
図48	441溝平面・断面図	62
図49	その他の古代遺構出土遺物	63
図50	群集土坑全体配置図	64
図51	群集土坑遺構配置図1	65
図52	群集土坑遺構配置図2	66
図53	群集土坑遺構配置図3	67

図54	群集土坑断面分類図	68
図55	466・478土坑平面・断面図	68
図56	445土坑平面・断面図	69
図57	506土坑平面・断面図	70
図58	507土坑平面・断面図	71
図59	514土坑平面・断面図	72
図60	516土坑平面・断面図	73
図61	523土坑平面・断面図	74
図62	525土坑平面・断面図	75
図63	529土坑平面・断面図	76
図64	535・536土坑平面・断面図	77
図65	556土坑平面・断面図	78
図66	404土坑平面・断面図	79
図67	405土坑平面・断面図	80
図68	423土坑平面・断面図	80
図69	424土坑平面・断面図	81
図70	群集土坑出土遺物 1	82
図71	群集土坑出土遺物 2	83
図72	群集土坑出土遺物 3	84
図73	弥生時代遺構配置図	85
図74	1 土坑平面・断面図	86
図75	425溝平面・断面図	87
図76	弥生時代の遺構出土遺物	89
図77	9溝の延長部分	91
図78	1012井戸位置図・出土遺物（センター2014より）	95
図79	建物間を繋ぐ連結施設の具体例	97

## 表目次

表1	掘立柱建物2柱穴寸法一覧表	36
表2	掘立柱建物3柱穴寸法一覧表	46
表3	群集土坑一覧表1	104
表4	群集土坑一覧表2	105
表5	群集土坑一覧表3	106
表6	群集土坑一覧表4	107
表7	群集土坑一覧表5	108
表8	群集土坑一覧表6	109
表9	遺物觀察表1	110

表10 遺物観察表2	111
表11 遺物観察表3	112
表12 遺物観察表4	113
表13 遺物観察表5	114
表14 遺物観察表6	115

## カラー図版目次

### 巻頭カラー 1

1 2区掘立柱建物群全景（西から） 2 2区掘立柱建物2・3（南から）

### 巻頭カラー 2

1 土坑208土器出土状況（西から） 2 掘立柱建物群周辺から出土した輸入陶磁器

### 裏面

巻頭カラー 2 遺物番号

### 巻頭カラー 3

掘立柱建物群周辺から出土した緑釉陶器

### 裏面

巻頭カラー 3 遺物番号

### 巻頭カラー 4

掘立柱建物群周辺から出土した灰釉陶器

### 裏面

巻頭カラー 4 遺物番号

## 写真図版目次

### 図版 1

1 2区西半弥生時代～古代遺構面全景（北西から） 2 2区東半古墳時代～古代遺構面全景（北西から）

### 図版 2

1 2区東半古墳時代～古代遺構面全景（北から） 2 1区東半古墳時代～古代遺構面全景（北西から）

### 図版 3

1 1区 西壁断面（東から）

2 1区 北壁断面（東から）

3 1区 東壁断面（北東から）

### 図版 4

1 2区 南壁断面①（244戸付近、西から） 2 2区 南壁断面②（東端、西から）

3 2区 東端落ち込み断面（西から）

### 図版 5

1 1区 9溝完掘状況（西から）

2 2区東端中世遺構面（東から）

図版6

- 1 1区東側中世遺構検出状況（南から） 2 1区東端中世遺構面（南から）

図版7

- 1 2区 58土坑土器出土状況（東から） 2 2区 5土坑断面（北西から）  
3 2区 292土坑断面（西から）

図版8

- 1 2区 244井戸断面（北東から） 2 1区 9溝完掘状況（南から）  
3 1区 9溝南北断面（南から）

図版9

- 1 2区 9溝断面（東から） 2区 9溝内土器出土状況（南から）  
3 1区 454溝（西から）

図版10

- 2区 建物群全景写真（上が北東）

図版11

- 1 2区 建物1全景（南から） 2 199柱穴断面（西から）  
3 200柱穴断面（西から） 4 201柱穴断面（西から）  
5 202柱穴断面（西から）

図版12

- 1 2区 掘立柱建物2（南から） 2 87柱穴断面（西から）  
3 88柱穴断面（西から） 4 89柱穴断面（東から）  
5 90柱穴断面（東から）

図版13

- 1 91柱穴断面（西から） 2 92柱穴断面（東から）  
3 89柱穴断面（東から） 4 94柱穴断面（西から）  
5 95柱穴断面（西から） 6 96柱穴断面（西から）  
7 69柱穴断面（西から） 8 70柱穴断面（西から）

図版14

- 1 71柱穴断面（西から） 2 72柱穴断面（東から）  
3 73柱穴断面（東から） 4 74柱穴断面（東から）  
5 75柱穴断面（東から） 6 77柱穴断面（東から）  
7 78柱穴断面（東から） 8 79柱穴断面（東から）

図版15

- 1 245柱穴断面（東から） 2 81柱穴断面（西から）  
3 82柱穴断面（西から） 4 83柱穴断面（西から）  
5 84柱穴断面（西から） 6 85柱穴断面（西から）  
7 86柱穴断面（西から） 8 39柱穴断面（西から）

図版16

- 1 2区 掘立柱建物3（奥）と連結敷設（手前）（南から）

2 101柱穴断面（西から）

4 119柱穴断面（西から）

3 120柱穴断面（北から）

5 118柱穴断面（西から）

図版17

1 117柱穴断面（東から）

3 115柱穴断面（北東隅柱・東から）

5 113柱穴断面（東から）

7 111柱穴断面（東から）

2 116柱穴断面（東から）

4 114柱穴断面（東から）

6 112柱穴断面（東から）

8 110柱穴断面（東から）

図版18

1 109柱穴断面（西から）

3 106柱穴断面（西から）

5 103柱穴断面（西から）

7 121柱穴断面（西から）

2 108柱穴断面（西から）

4 105柱穴断面（西から）

6 102柱穴断面（西から）

8 122柱穴断面（西から）

図版19

1 123柱穴断面（西から）

3 125柱穴断面（東から）

5 128柱穴断面（西から）

7 133柱穴断面（東から）

2 124柱穴断面（東から）

4 127柱穴断面（西から）

6 130柱穴断面（東から）

8 104柱穴断面（西から）

図版20

1 掘立建物2・3間の柱穴列（西から）

3 98柱穴断面（西から）

5 2区 掘立柱建物4（奥）

2 100柱穴断面（西から）

4 97柱穴断面（西から）

7（手前）（東から）

図版21

1 428柱穴断面（掘立柱建物4、北から）

3 409柱穴断面（掘立柱建物4、西から）

5 413柱穴断面（掘立柱建物7、北から）

7 426柱穴断面（掘立柱建物7、西から）

2 429柱穴断面（掘立柱建物4、北から）

4 410柱穴断面（掘立柱建物4、西から）

6 434柱穴断面（掘立柱建物7、北から）

8 427柱穴断面（掘立柱建物7、西から）

図版22

1 2区 掘立柱建物5（奥）

2 174柱穴断面（西から）

4 176柱穴断面（東から）

6（手前）（南から）

3 175柱穴断面（北から）

5 177柱穴断面（東から）

図版23

1 178柱穴断面（東から）

3 181柱穴断面（東から）

5 183柱穴断面（西から）

7 186柱穴断面（西から）

2 180柱穴断面（東から）

4 182柱穴断面（北から）

6 185柱穴断面（西から）

8 187柱穴断面（西から）

図版24

1 169柱穴断面（掘立柱建物6、西から）

3 171柱穴断面（掘立柱建物4、西から）

2 170柱穴断面（掘立柱建物6、西から）

4 172柱穴断面（掘立柱建物6、北から）

5 134柱穴断面（掘立柱建物8、西から） 6 135柱穴断面（掘立柱建物8、西から）

7 136柱穴断面（掘立柱建物8、西から） 8 138柱穴断面（掘立柱建物8、東から）

図版25

- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 143柱穴断面（掘立柱建物8、西から）        | 2 146柱穴断面（掘立柱建物8、西から）        |
| 3 147柱穴断面（掘立柱建物8、西から）        | 4 141・162柱穴断面（掘立柱建物8・10、東から） |
| 5 151柱穴断面（掘立柱建物9、北から）        | 6 152柱穴断面（掘立柱建物9、東から）        |
| 7 153・164柱穴断面（掘立柱建物9・10、東から） | 8 154・165柱穴断面（掘立柱建物9・10、東から） |

図版26

- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 155・166柱穴断面（掘立柱建物9・10、東から） | 2 159・160柱穴断面（掘立柱建物9・10、西から） |
| 3 167柱穴断面（掘立柱建物10、東から）       | 4 76柱穴断面（掘立柱建物10、西から）        |
| 5 典型的な柱穴の重複関係                | 6 208土坑断面（西から）               |
| 7 230土坑断面（南から）               | 8 563柱穴断面（掘立柱建物11、南から）       |

図版27

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 1 1区 掘立柱建物11（西から） | 2 560柱穴断面（東から） |
| 3 561柱穴断面（南東から）   | 4 562柱穴断面（南から） |
| 5 452柱穴断面（南から）    |                |

図版28

- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 2区東半 古墳時代～古代の遺構面（東から） | 2 2区 441溝内土器出土状況（西から） |
| 3 1区 515土坑 土器出土状況（北西から） |                       |

図版29

- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 1区西側 古墳時代～古代の遺構面（西から） | 2 1区東側 古墳時代～古代の遺構面（西から） |
|-------------------------|-------------------------|

図版30

- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 1区東側 古墳時代～古代の遺構面（南から） | 2 2区東側 古墳時代～古代の遺構面（北から） |
|-------------------------|-------------------------|

図版31

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 2区 404土器出土状況（東から）   | 2 2区 405土坑土器出土状況（西から） |
| 3 2区 423土坑土器出土状況（南から） |                       |

図版32

- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 1 1区 445土坑土器出土状況①（北から） | 2 1区 445土坑土器出土状況②（北から） |
| 3 1区 478土坑土器出土状況（南から）  |                        |

図版33

- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 1区 506土坑土器出土状況（東から） | 2 1区 525土坑土器出土状況（西から） |
| 3 1区 535土坑土器出土状況（北から） |                       |

図版34

- |                           |                          |
|---------------------------|--------------------------|
| 1 2区 477土坑断面（南東から）        | 2 1区 442土坑断面（東から）        |
| 3 1区 507土坑断面・土器出土状況（東から）  | 4 1区 514土坑断面・土器出土状況（北から） |
| 5 1区 516土坑断面・土器出土状況（北東から） | 6 1区 524土坑断面（南東から）       |
| 7 1区 525土坑断面・土器出土状況（西から）  | 8 1区 556土坑断面・土器出土状況（北から） |

図版35

- 1 2区 1 土坑土器出土状況（南西から） 2 2区 425溝完掘状況（北西から）  
3 2区 425溝堤状遺構断面（北西から）
- 図版36 包含層・中世遺構出土遺物  
図版37 包含層出土遺物  
図版38 古代遺構出土遺物  
図版39 古代遺構出土遺物  
図版40 古代遺構・群集土坑出土遺物  
図版41 包含層・群集土坑出土遺物  
図版42 群集土坑出土遺物  
図版43 群集土坑出土遺物  
図版44 群集土坑出土遺物  
図版45 包含層・群集土坑出土遺物

## 第1章 調査に至る経緯と経過

吹田市と摂津市（図1）にまたがる吹田操車場は、大正12（1923）年に操業を開始し、かつて「東洋一の操車場」と称されるほどの面積と操業規模を誇った。しかしその後、物流の中心が貨車輸送からトラック輸送にシフトしたのを背景に、昭和59（1984）年に操車場は信号場となりその役割を終えた。平成25（2013）年時点で操車場の一部はJR貨物の吹田貨物ターミナル駅となっているが、残りの部分は平成21（2009）年から「北部大阪都市計画事業吹田操車場跡地土地区画整理事業」として独立行政法人都市再生機構西日本支社による土地区画整理事業がすすめられた。これに伴う事前の発掘調査を、平成21年から平成24年までの4か年にわたり公益財団法人大阪府文化財センター（以下センターと略記、引用文献も同様）が実施した（センター2014）。

今回の発掘調査は、上記の土地区画整理事業終了後に実施される西日本旅客鉄道株式会社による操車場跡地開発に伴うものである。調査地はJR岸辺駅北側の駅前広場隣接地で、大阪府吹田市岸部新町（旧芝田町）地内にあたる。この調査にさきだって当センターでは、平成27年7月23日付けで跡地開発における施工を担うJR西日本不動産開発株式会社との間で「吹田操車場跡地開発 埋蔵文化財調査業務」として受託契約を結んだ。この契約を受けて、吹田市教育委員会文化財保護課、地元連合自治会、独立行政法人都市再生機構西日本支社などとの協議をおこない、平成27年8月3日から準備工に着手した。

今回の調査では、対象地を1区と2区の2つに分割しており（図3）、まず8月17日より2区の機械掘削を開始した。その後8月24日から人力掘削をおこなった。

調査期間中においては、周辺住民の方々に調査成果をひろく周知すべく平成27年12月5日に現地説明会を実施し、当日は378人の参加を得た（図5）。説明会の対象箇所は後章で述べる2区の掘立柱建物群で、特に四面廁建物を中心とする掘立柱建物2・3が注目を集めた。また現地説明会にさきだって、吹田市役所記者クラブにおいて現地説明会開催の趣旨を報道提供した。その結果、12月2日夕刻の日本放送協会大阪支局の関西版ニュース番組にてテレビ放映され、さらに12月3日の読売新聞・朝日新聞・産業経済新聞・毎日新聞の4紙の朝刊地方にて報道された。また現地説明会当時、四面廁建物については10世紀頃のものと説明していたが、調査が進み8世紀末から9世紀初頭のものであると判明した。そのため、平成28年1月31日（日）、吹田市立博物館にて開催された「吹田操車場遺跡・明和池遺跡」発掘調査報告会において、「速報！四面廁建物の時期」のタイトルで上記建物の時期についてパネル展示をおこなった。

現地説明会開催後の12月10日には2区の全調査を終了した。2区調査終了前の12月5日には、調査終了の適否に関する判断を仰ぐため、吹田市教育委員会文化財保護課による現地立会を受け、これを経て12月11日より埋戻しを開始した。いっぽう1区では、2区の埋戻しとほぼ同時並行で12月11日から機械掘削に着手し、12月14日には人力掘削を開始した。1区は平成28年3月11日に調査を終了したが、それに先立つ3月2日に吹田市教育委員会文化財保護課による現地立会を受け、埋戻し許可の確認を得た。これをうけて、3月12日より埋戻し作業を開始した。

平成28年3月23日には1区の埋戻し作業を終え、バリケード・敷設板の撤去、仮排水路・沈砂池などの復旧を経て、監督員詰所を撤収し現地での調査を終了した。

調査終了後は、平成28年3月24日より報告書作成に向けての整理作業に入り、平成28年9月30日まで作業をおこなった。その後、平成28年12月28日付けで本報告書を刊行した。

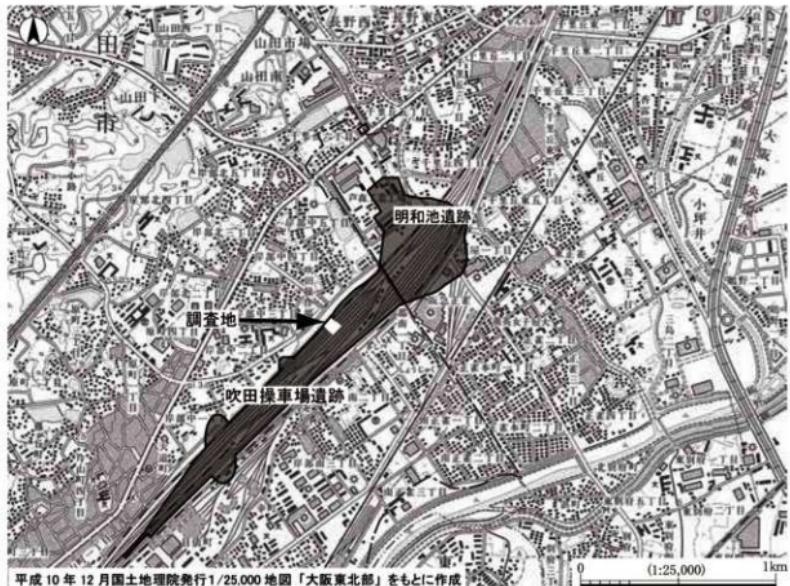


図1 遺跡の位置



図2 調査地の位置

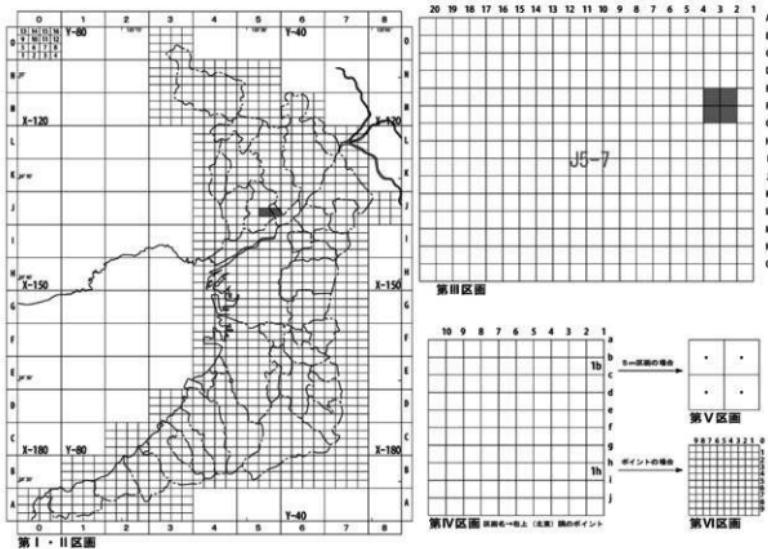
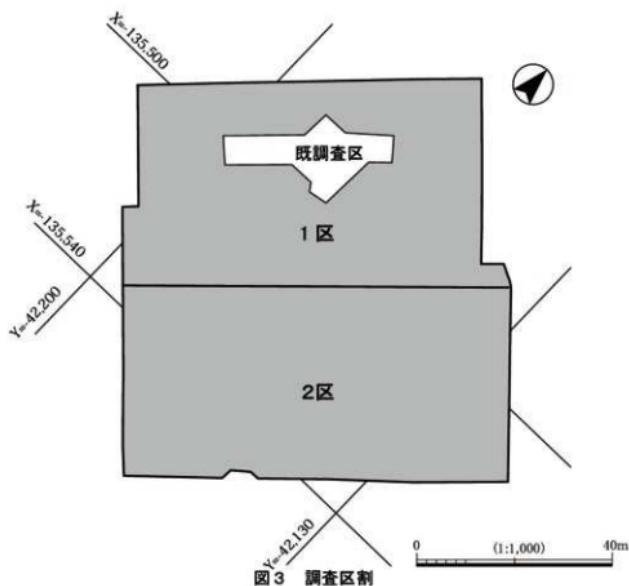




写真1 現地説明会会場の様子①



写真2 現地説明会会場の様子②



写真3 現地説明会パネル展示



写真4 現地説明会遺物展示



写真5 現地説明会遺物展示解説



写真6 NHK 大阪放送局による現地取材

#### 図5 現地説明会・テレビ取材

## 第2章 調査の方法

### 第1節 発掘調査

調査は当センターの調査基準マニュアルに準拠しておこなった。調査範囲は5,590m<sup>2</sup>に及ぶため、排土置き場や写真測量の撮影可能範囲、さらには工程管理などを考慮して、調査区を南北に2分割して調査を実施した(図3)。2分割されたうち、北半分を1区、南半分を2区とし2区からさきに調査を進めた。遺物の取り上げにあたってはそれぞれの調査区を明記したが、遺構番号については通し番号を付した。

調査は、バラスを含む盛り土および、その直下の旧耕作土を機械によって除去し、それ以下を人力によってスコップ・手ガリなどを用いて慎重に掘削し、遺構の検出および遺物の収集をおこなった。

調査中は、遺構面や各遺構、土層断面の写真撮影および図化作業をおこない、随時記録をとった。さらに主要な遺構検出面の図化作業においては、クレーンを用いた空中写真測量を合計3回実施した。記録用の写真撮影には、35mmモノクロフィルム・リバーサルフィルム、デジタルカメラ、6×7モノクロフィルム・リバーサルフィルムを使用した。出土遺物は、調査区に設置した座標杭に従い取り上げをおこなった。取り上げた遺物には、調査区名・地区割・層位名・遺構名・出土年月日・登録番号などを記したラベルを添付した。遺物は、順次洗浄し、注記作業をおこなった。写真は写真台帳、出土遺物は登録台帳を作成し登録作業をおこなった。

遺物の取り上げや遺構の位置確認には、当センターマニュアルに基づいた地区割りを適用した(図4)。この地区割りでは、世界測地系に基づいた国土座標軸を使用し、平面直角座標系を基準とし、I～VIの大小6段階の区画を設定した。第I区画は大阪府の南西端X=-192,000m・Y=-88,000mを起点に、府域を南北15(A～O)、東西9(0～8)区画に分割し、一区画は南北6km、東西8kmとなる。第II区画は第I区画を東西、南北各4分割の、計16区画(1～16)に分割したもので、一区画は南北1.5km、東西2.0kmとなる。第III区画は第II区画をさらに東西20(1～20)分割、南北15(A～O)分割する一辺100mの区画である。第IV区画は第III区画をさらに東西、南北ともに10(東西1～10、南北a～j)分割した一辺10mの区画である。

### 第2節 整理作業

今回の調査で、プラスチック製遺物整理箱(54cm×35cm×15cm)35箱分に及ぶ遺物が出土した。また調査期間中に作成した図面はA2版の方眼紙200枚にのぼる。

具体的な作業内容は以下のとおりである。まず主要な遺構については、現地で作成した実測図面および、空中写真測量によって得られたCADデータなどを整理・編集し、Adobe社製IllustratorCS5を用いてデジタルトレースをおこなった。出土遺物は、洗浄・注記・接合をおこなった後、破片数の集計・分析をおこない、必要なものを抽出、実測、撮影し、遺物台帳を作成した。現地で撮影した遺構面および各遺構の写真については、台帳を作成したうえで報告書に掲載するものを選別し現像・焼付作業をおこなった。最終的には、報告書用遺構図面および遺物図版の版下はAdobe社製IllustratorCS5を用いてデ

ジタルデータ（Illustrator.epsファイル）を作成した。写真図版の版下は遺構については現像・焼付作業の終了した写真を用いてデジタルデータを作成し、遺物についてはデジタルカメラで撮影しデジタルデータ（TIFFファイル）上で作成した。以上の作業と並行して、平成28（2016）年9月30日までに報告書中の文書を作成し編集作業をおこなった。その後印刷会社へ入稿し校正作業を経て、平成28（2016）年12月28日（水）に本報告書を刊行した。また編集作業の傍ら、報告書に掲載した出土遺物と、掲載しなかった出土遺物を分別し収納作業をおこなった。

## 第3章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

吹田操車場遺跡は旧国鉄吹田操車場の跡地に位置する。ただし吹田操車場はJR吹田駅から千里丘駅までの広大な面積を占め、行政区画上でも吹田市と摂津市に跨っていたため、吹田市側を吹田操車場遺跡、摂津市側を明和池遺跡と呼び分けている。

吹田操車場遺跡は地勢的・地理的な立地でいうならば、淀川水系の北側に広がる千里丘陵の裾野に位置している。大阪平野の北側には地質学上の年代でいうところの、新第三紀から第四紀、すなわち今から約2300万年前から約260万年前にかけて形成された大阪層群が露頭し丘陵地を形成している。千里丘陵は大阪層群により形成された丘陵地の一つで、上述のように吹田操車場遺跡は千里丘陵の南裾に位置する。そのため遺跡内およびその周辺には、丘陵上に源を発する山田川や正雀川などの河川が北摂山系に水源を持つ安威川に向けて流れている。このように遺跡周辺の地形は、千里丘陵に端を発する複数の小河川が、北東から南西に向けて流れる淀川水系の安威川に流れ込むというものである。

吹田市域のみならず周辺における遺跡の分布を概観すると、千里丘陵などの丘陵地上でかつ小河川に近接する場所に立地する遺跡と、丘陵の裾すなわち平野部でかつ小河川に近接する場所に立地する遺跡の二者に分かれ、吹田操車場遺跡は後者に該当する。当遺跡の時代範囲や出土遺物については次項述べる。

### 第2節 歴史的環境－周辺の遺跡－

以下では周辺の遺跡を中心に、文献史料や地理情報などもふまえて、調査地付近の歴史変遷について述べる（図6）。

#### （1）旧石器時代

調査地周辺の旧石器時代の主な遺跡としては、吉志部遺跡、吉志部瓦窯跡、垂水遺跡が挙げられる。吉志部遺跡では、ナイフ形石器や削器、錐状石器や礫群が出土もしくは採集されている。また吉志部遺跡の北東に位置する吉志部瓦窯の工房跡でも、同時期の礫群が検出されている（吹田市教育委員会2001）。垂水遺跡では、ナイフ形石器などのサヌカイト製の旧石器が出土している（吹田市史編さん委員会編1981）。

このほか、高城遺跡で小形のナイフ形石器が（吹田市教育委員会2001）、目俵遺跡ではナイフ形石器や角錐状石器や翼状剥片などが出土しており（吹田市教育委員会1999a）、従来知られていた吉志部遺跡

や垂水遺跡のような千里丘陵の縁辺部だけではなく、平野部においても旧石器時代の遺物が確認されている。

#### (2) 縄文時代

調査地周辺の遺跡では、縄文時代に該当する建物跡や墓などの遺構検出例はない。以下で述べる遺跡は、石器あるいは土器が出土もしくは採集されている事例である。

縄文時代の石器の出土例は、千里丘陵では吉志部遺跡での縄文時代草創期に属する有舌尖頭器、同時期の石鎌、七尾瓦窯の工房跡における縄文時代草創期の尖頭器が挙げられる。丘陵下の平野部では、中ノ坪遺跡におけるチャート製の有舌尖頭器、片山公園遺跡での木葉形尖頭器の基部とみられる石器片が挙げられる。

縄文土器の出土例は、高浜遺跡出土の縄文時代中期前半の船元式土器の破片や、豊島郡条里遺跡出土の縄文時代後期の土器、七尾瓦窯、七尾東遺跡、目依遺跡で出土した縄文時代晚期の土器などが挙げられる。

以上のように、少ないながらも縄文時代を通して人間の活動痕跡が確認できる。

#### (3) 弥生時代

弥生時代の遺跡としては、建物跡などが検出されている以下の遺跡が挙げられる。

千里丘陵での事例から述べると、旧石器の出土がみられた垂水遺跡において、弥生時代の建物群が検出されている。垂水遺跡ではこれまでの発掘調査により、丘陵の平坦面において弥生時代後期の竪穴建物4棟、掘立柱建物1棟が検出されている。また吹田操車場遺跡（以下操車場遺跡）北側の七尾東遺跡では、弥生時代中期後半の竪穴建物1棟などが検出されている。

平野部では、吹田操車場遺跡の南側に位置する目依遺跡で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての掘立柱建物が8棟検出されている。掘立柱建物が検出された南側には、湿地状であったと思われる落込みがあり、建物はこの湿地状部分の際に建てられていたようである。平成22（2010）年には、吹田操車場遺跡の東で同じ操車場跡地に位置する摂津市明和池遺跡において、弥生時代後期後半の竪穴建物7棟が検出されている。

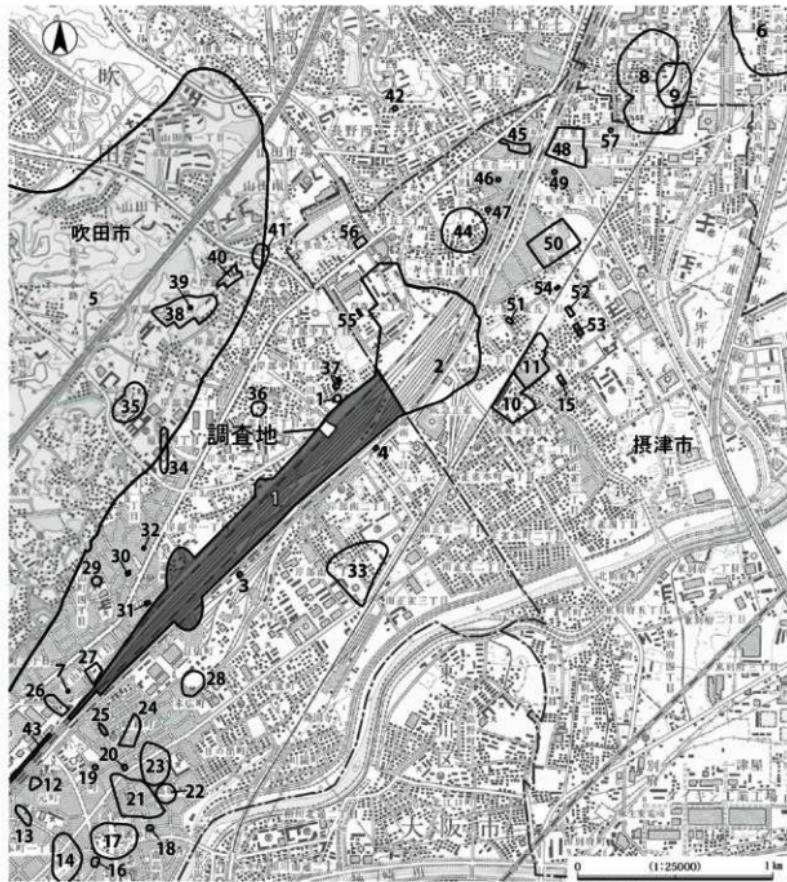
このほか、中ノ坪遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓の可能性のある溝が検出されている。また、北泉遺跡では弥生時代前期と、弥生時代後期から古墳時代前期までの土器などがまとめて出土している。

#### (4) 古墳時代

先述の垂水遺跡では、古墳時代の建物跡こそ検出されていないものの、古墳時代前期の遺構や溶解途中の偽鏡片や土器などの遺物が確認されており、この時期まで集落は継続するものと思われる。ただし古墳時代中期になると韓式系土器などが少量出土しているのみで、遺構・遺物とともに減少し、集落は衰退したようである。いっぽう平野部では、垂水遺跡の南側で千里丘陵の裾部に位置する垂水南遺跡において、古墳時代前期の竪穴建物や掘立柱建物などが検出されており、同遺跡に古墳時代前期の集落があったと想定されている。

吹田市域に分布する古墳の中で、前期古墳と推定されるものは垂水西原古墳のみである。標高77m付近の丘陵尾根上に築かれており、石室材と思われる石材が発見されているが、詳細については明らかでない。

その後、5世紀末から6世紀初頭には吉志部古墳2・3号墳や、大正2（1913）年頃に土取工事によ



平成12年国土地理院発行1/50,000「大阪東北部」をベースに、大阪府地図情報提供システムの埋蔵文化財に基づき作成

- |               |             |               |                |                 |
|---------------|-------------|---------------|----------------|-----------------|
| 1. 吹田推土場遺跡    | 13. 浜の堂遺跡   | 25. 昭和町遺跡B地点  | 37. 岸部東遺跡      | 49. 千里丘東3丁目所在遺跡 |
| 2. 明和池遺跡      | 14. 都吕須跡    | 26. 片山遺跡      | 38. 吉志部瓦窯跡     | 50. 千里丘東4丁目遺跡   |
| 3. 吹田推土場遺跡B地点 | 15. 東正省第2地点 | 27. 片山荒池遺跡    | 39. 吉志部1号墳     | 51. 庄屋1丁目所在遺跡   |
| 4. 吹田推土場遺跡C地点 | 16. 宮之前遺跡   | 28. 目依遺跡      | 40. 七尾瓦窯跡      | 52. 庄屋2丁目所在遺跡   |
| 5. 吹田須志窓跡群    | 17. 高浜遺跡    | 29. 円塚古墳      | 41. 七尾東遺跡      | 53. 東正街所在遺跡     |
| 6. 東奈良遺跡      | 18. 神境町遺跡   | 30. 片山芝田遺跡    | 42. 似禪寺山遺跡     | 54. 千里丘東4丁目所在遺跡 |
| 7. 片山前遺跡      | 19. 朝日町遺跡   | 31. 天道遺跡      | 43. 西の庄東遺跡     | 55. 千里丘7丁目所在遺跡  |
| 8. 常楽寺跡       | 20. 附和町遺跡   | 32. 片山芝田遺跡B地点 | 44. 蜂前寺跡       | 56. 千里丘6丁目所在遺跡  |
| 9. 三宅城跡       | 21. 高城B遺跡   | 33. 中ノ坪遺跡     | 45. 千里丘遺跡      | 57. 千里丘東1丁目遺跡   |
| 10. 正雀1丁目遺跡   | 22. 吹田御影推定地 | 34. 原東遺跡      | 46. 千里丘2丁目所在遺跡 |                 |
| 11. 東正雀遺跡     | 23. 高城跡     | 35. 吉志部遺跡     | 47. 千里丘3丁目所在遺跡 |                 |
| 12. 元町遺跡      | 24. 高畠遺跡    | 36. 岸部中遺跡     | 48. 千里丘2丁目遺跡   |                 |

図6 周辺の遺跡

り消滅してしまった出口古墳が築かれた。7世紀初めには、横穴式石室を主体部とする吉志部1号墳や、横穴式木室墳である新芦屋古墳が築造された。

このほか、古墳時代における調査地周辺の状況として特筆すべきことは、丘陵部で多くの須恵器窯が築かれたことである。千里丘陵には、吹田市域だけで50基以上の須恵器窯（吹田須恵器窯跡群）が築かれており、豊中市域の桜井谷窯跡群と合わせると、窯の数は現在確認できているものだけで120基以上にのぼる。吹田市域の窯については、吹田32号窯が最も古く、5世紀初頭のものとされる。これに続いて、5世紀前半には吹田54号窯が操業されるものの、その後、吹田市域では須恵器窯はあまりみられなくなる。やや時期を挟んで、5世紀末には、豊中市域の桜井谷窯跡群において窯が始まるが、吹田市域で窯が多く築かれるのは6世紀前半になってからである。千里丘陵での須恵器生産は、桜井谷窯跡群で一部8世紀まで続けられる以外は、7世紀中頃にはほぼ終焉する。

なお吹田市域には古墳が比較的少なく、良好な資料がきわめて少ないいっぽう、陶棺片が15箇所で確認されている。これらは、土師質と須恵質のものがあるが、須恵器製作時に用いられるものと同様の調整具の痕跡がみられることや、須恵器窯跡でも陶棺片が確認されていることなどから、これらの陶棺は千里丘陵の須恵器生産に関わった人々によって製作されたと考えられている。

#### （5）古代・中世

古墳時代に盛んだった千里丘陵での須恵器生産は、古代になると衰退しそれに代わって瓦生産が始まる。その嚆矢は7世紀末に位置付けられる瓦陶兼業窯の白頭瓦窯である。その後、8世紀前半には後期難波宮の所用瓦窯である七尾瓦窯が操業を開始し、8世紀末には七尾瓦窯の南西に隣接する場所で、平安宮所用瓦窯の吉志部瓦窯が操業を始めた。

集落の検出例としては、同じ吹田操車場跡地で摂津市域に入る明和池遺跡において複数棟の掘立柱建物が検出されている。吹田砂堆上では高城遺跡や高城B遺跡で平安時代の掘立柱建物群が検出されている。

古代には各地で道路の整備や、条里地割が施行される。吹田市域を通る古代道路としては、嶋上郡・嶋下郡・豊嶋郡の三郡を通る三嶋路がある。三嶋路のルートについては、高槻市の芥川町付近から茨城市耳原にかけて今城塚古墳と太田茶臼山古墳の南端付近を直線的に通り、耳原で南に折れ、千里丘陵の東辺を南下して垂水付近に至るルートが推定されている。条里地割については、吹田市域には、市域西側から豊中市・池田市域にかけての旧豊嶋郡域に広がる豊嶋郡条里と、市域東側から摂津市域にかけての嶋下郡条里が存在するが、今回の調査地は嶋下郡条里の西端付近にあたると推定される。

嶋下郡の条里地割は、郡東部にあたる、現在の高槻市域から茨木市域にかけては、ほぼ正方位の条里が確認できるという（主条里）。いっぽう、郡南西部、現在の摂津市域から吹田市域にかけては、西側に33度傾いた条里地割が存在する。嶋下郡南部条里と呼ばれる条里地割である。この嶋下郡南部条里は、西は吹田の砂堆の東端付近まで広がるが、砂堆上にはみられない。

延暦4（785）年には、淀川・神崎川間で摂津市の一津屋と別府付近を結ぶ運河が開削された。これは、今回の調査で発見された建物造営時期の直前、もしくはほぼ同じ時期にあたる。この運河は、淀川を分流して洪水を防ぐ目的とともに、前年に遷都した長岡京造営にかかる資材運搬のために水路を整備する目的があったとされるが、平安京遷都後も京と西国を結ぶルートとして利用された。

平安時代になると社寺や貴族による土地の私有化が進み、各地で荘園が増加する。吹田市域においても、平安時代前期には東寺領垂水荘や摂関家領垂水牧、醍醐寺領吹田荘が成立し、後期には荘園化がさ

らに進み、新たな莊園が次々に成立した。

室町時代には、在地の有力者として成長した国人領主が各地で現れ、吹田市域では吹田氏が勢力をもっていた。吹田城が史料に初めてみえるのは、建武3（1336）年である。吹田城のあった場所については、明治時代の初期に城跡の伝承を集めてつくられた『東摂城址図誌』に、茨木街道筋に面した字城ヶ前につける地に吹田城址があったと記されており、この場所は現在の吹田市高城町付近である。またこのほかに、吹田重通が本拠とした吹田城が、西の庄町アサヒビル吹田工場西端から、JR京都線の路線敷にあったとする説もある。

### 第3節 調査地周辺の既往の調査

吹田操車場遺跡ではこれまでに、吹田市教育委員会や当センターによって数次にわたる調査がおこなわれている。既往の調査では、古墳時代の建物跡や区画溝、千里丘陵の須恵器や瓦生産に使用した粘土を探査した跡と考えられる土坑群、奈良時代から平安時代の建物群、平安時代後期の条里痕跡など、旧石器時代から中世に至るまでの遺構・遺物が確認されている。

なかでも今回の発掘調査と直接関わるものを見ると、

- ①区画整理事業に伴う、岸辺駅北側駅前広場建設時および、調査区南側の貨物線路沿い遊歩道建設時の発掘調査（センター2014）
- ②吹田市民病院移転地の発掘調査（センター2015）
- ③調査地の南角から南へ約40mの地点でおこなわれた吹田信号駅貨車倉庫建て替え時の発掘調査（センター2008）
- ④今回の調査範囲の中ですでにおこなわれている発掘調査（センター2012）

以上が挙げられる（図2、上記の①～④は図2中の番号に対応している）。

①のJR岸辺駅北側駅前広場の調査（今回の調査地東隣）では、駅前広場の西側で古墳時代後期（6世紀後半）の土坑群が検出されている。また貨物線路沿い遊歩道建設時の発掘調査（今回調査地南隣）では、奈良時代から平安時代（8世紀後半から9世紀）にかけての掘立柱建物、井戸、溝、土坑、鎌倉時代（12～13世紀）の溝などが検出されている。③の吹田市民病院移転地の調査（今回調査地西隣）では、奈良時代から平安時代（8世紀後半から9世紀）にかけての掘立柱建物・井戸・土坑、鎌倉時代から室町時代（12～15世紀）にかけての掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが検出されている。④の吹田信号駅貨車倉庫の建て替えに伴う発掘調査（今回調査地南約40m）では、古墳時代後期（6世紀後半）から奈良時代前半（8世紀前半）にかけての土坑群、奈良時代から平安時代（8世紀後半から9世紀）にかけての掘立柱建物が検出されている。平成23（2011）年度に実施した、今回の調査範囲内の既往の調査では古墳時代後期（6世紀後半）の土坑群が検出されている。

## 第4章 調査成果

### 第1節 基本層序

調査では、操車場造成時の盛り土およびその直下の近世以降の耕作土層を、機械（バックホー）を用

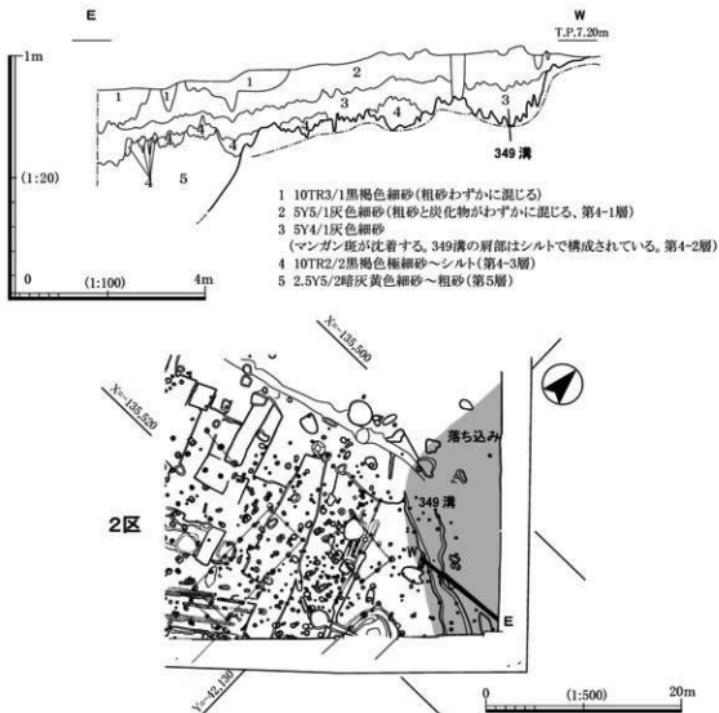


図 11 2区落ち込み断面図

いて掘削した。そして、機械により掘削した直下の地層を第1層とし、上から下へ第2層、第3層・・・と順番に層位番号を付与した（図7～11、図版3・4）。

#### (1) 第1層

近世以降に形成された耕作土層の直下に堆積する、中世末以降の耕作土層で第1-1層と第1-2層の2層に分かれる。主に細砂で構成され、色調は灰黄色もしくは黄灰色を呈する。層中に白色の粗砂を均一に含む。調査区の中央など微高地では第1-1層のみが残存するが、南東隅の谷状地形を呈する箇所や、1区の北西は第1-1層と第1-2層の二つに分かれる。この様相は、西隣の吹田市民病院移転地における調査で得られた基本層序の見解と符合する（センター2015）。

第1層からは須恵器・土師器などが出土しているが、ほとんどが細片である。

#### (2) 第2層

中世の耕作土層である。主に細砂もしくは極細砂で構成され、色調は灰色である。周辺の調査（例：吹田市民病院移転地）では2層ないしは3層に分かれている状況が確認されているが、今回の調査地では上層の第1層による攪拌が深くにまで及んでいるため、2層分確認できるのは1区の北側のみである。

第2層からは1～32の遺物が出土している（図12）。

1～11は施釉陶器である。1・2・5が縁釉陶器で、2の皿は10世紀初頭の平安京近郊産のもの、5は突帶付きの壺の肩部とみられ、猿投窯産、9世紀中頃もしくはそれ以前のもの。3・4・6・7・9・10・12は灰釉陶器で、4の椀は9世紀後半、6の椀は10世紀前半、7の椀は9世紀中頃～後半、10の平瓶は9世紀中頃、12（巻頭カラー4、図版37）の小壺は9世紀後半のもの。8・11は輸入陶磁器の白磁、定・刑窯系か。これ以外にも第2層からは施釉陶器の破片が出土しており、図化はできなかったが巻頭カラー図版2～4に掲載している。179（巻頭カラー2・2）は輸入陶磁器の白磁の破片、185・186・188～191・197（巻頭カラー4）は灰釉陶器の破片である。

13は凹基式の石礎、単体では時期は決め難いが弥生時代中期もしくはそれ以前のものと推測される。14（図版37）・15（図版37）は土師器の杯と皿いずれも8世紀中頃のもの。16の瓦器椀は12世紀中頃のもの。17（図版37）・18～23・24（図版37）・25～27（図版41）・29・30・31（図版45）・32は須恵器で、6世紀末の21・22の須恵器杯身・蓋から、10世紀前半の26の壺まで時期幅がある。29・31・32は後述する群集土坑出土土器に類似するものが多くみられるため、中世の耕作時に群集土坑に投棄された須恵器が掘り返されたのだろう。28（図版37）は新羅土器の破片で、円筒形の壺の胴部片と思われる。7世紀前半のもの。

また図化できないため、写真図版のみに掲載しているが、199（図版36）の須恵器は鉢を転用した硯である。以上、第2層から出土した遺物は弥生時代中期から12世紀までと長期間にわたるものである。しかし層中にはこのほかにも、図化できない瓦器椀片や中世の土師器片を多く含んでおり、地層の形成時期は16の瓦器椀が示す12世紀の中頃以降に一定点がおけそうである。

### （3）第3層

中世の遺物包含層である。調査区南東隅の谷地状の地形でのみ確認できる。第3層は第3～1層と第3～2層の二つに分かれるが、下層の3～2層については平面的に広がって堆積している状況は確認できず、谷地状地形以外では後述する9溝を中心として井戸や土坑などの遺構内で確認できるのみである。第3～1・3～2層ともに極細砂もしくはシルトで構成されるが、色調は第3～1層が灰黄色であるのに対して、第3～2層は黒褐色を呈している。また第3～1・3～2層とともに、基盤層である第7層のシルトブロックが混入している箇所が散見される。第3層には中世（鎌倉～室町時代）の遺物以外に、古代（奈良～平安時代）の遺物も多く含まれているが、これは中世の耕作時に前段階の包含層を搅拌したためと考えられる。

第3層からは33～41の遺物が出土している（図13）。

33～37は施釉陶器である。34～36は縁釉陶器、35は蛇の目高台の椀で9世紀中頃、平安京近郊産。33・37は灰釉陶器、37は10世紀初頭のもの。これ以外にも第3層からは施釉陶器の破片が出土しており、図化はできなかったが巻頭カラー図版3・4に掲載している。180・181・184（巻頭カラー3）は縁釉陶器の破片、187・195（巻頭カラー4）は灰釉陶器の破片である。

38（図版37）は土師器皿で、12世紀前半のものか。39・40は黒色土器B類椀で11世紀初頭のもの。41は須恵器平瓶の肩部分と想定され、6世紀のものである。以上、第3層から出土した遺物は第2層同様、6世紀代の須恵器から12世紀の土師器皿までと長期間にわたっている。第3層の形成時期は38の土師器皿が示す12世紀の初頭以降に一定点がおけるだろう。

### （4）第4層

古墳時代～平安時代の遺物包含層で、調査区南東隅の落ち込みにおいて（図11）、第4～1層・第4

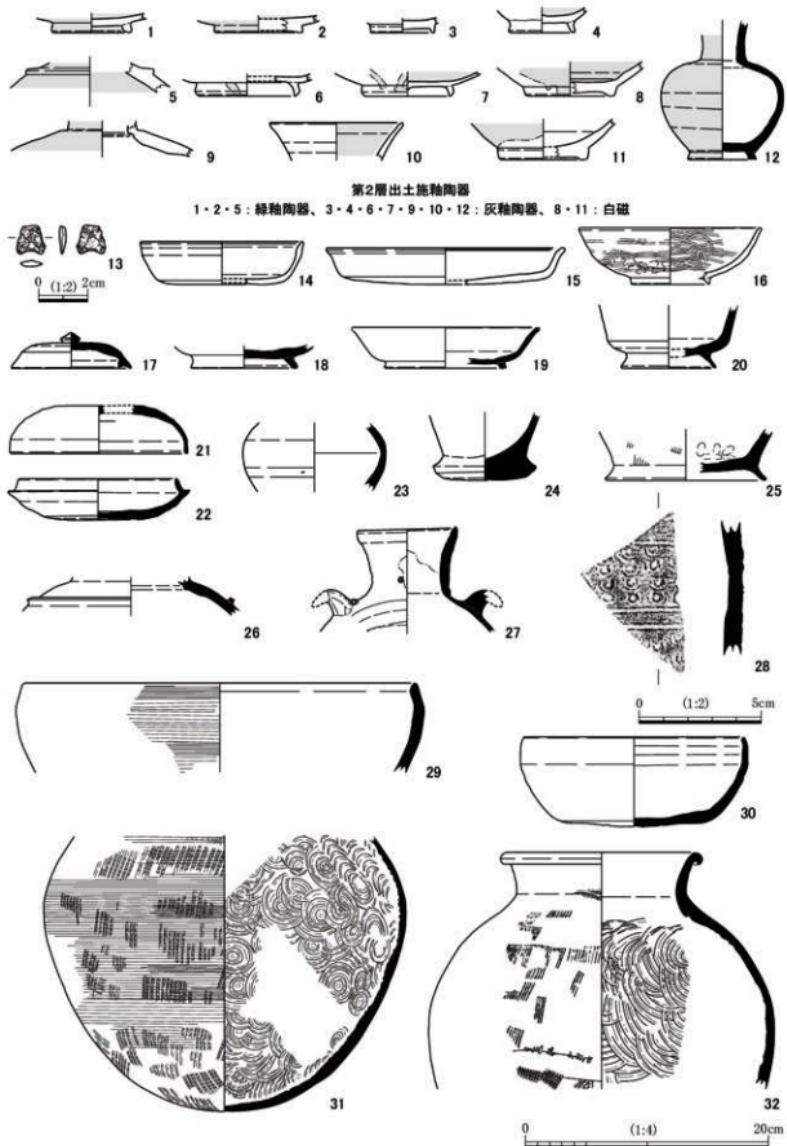
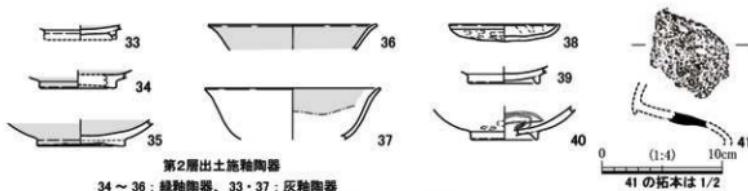
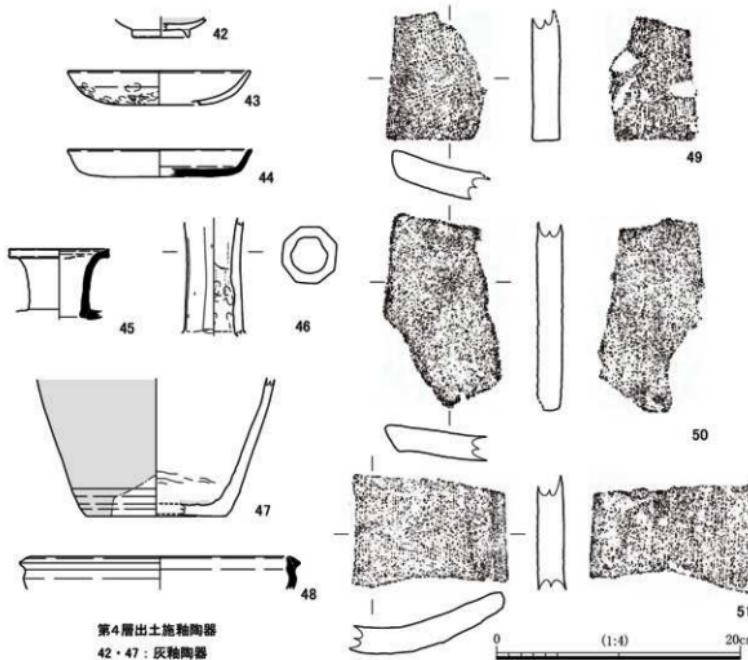


図 12 第2層出土遺物



第2層出土施釉陶器  
34～36：緑釉陶器、33・37：灰釉陶器

図13 第3層出土遺物



第4層出土施釉陶器  
42・47：灰釉陶器

図14 第4層出土遺物

－2層・第4－3層の3つに分かれる。第4－1層は落ち込みの全域で、第4－2層は落ち際に検出した349溝と、溝よりも低い箇所で確認できる。いっぽう、第4－3層については平面的に広がって堆積している状況は確認できず、溝や土坑などの遺構内で確認できるのみである。第4－1層は主として細砂、第4－2層は細砂、第4－3層は細砂・シルトで構成されており、概して下層ほど粒径が細かくなっている。色調は第4－1・4－2層が灰色、第4－3層が黒褐色を呈しており、概して下層ほど黒色化が進んでいる。

第4層からは42～51・200の遺物が出土している（図14）。ただしこれらはいずれも第4－1層からの出土で、第4－2層から出土した遺物は須恵器・土師器の細片ばかりで、第4－3層から出土した遺物は無かった。42・47は灰釉陶器である。42は9世紀中頃のもの。43の土師器皿、44の須恵器杯、45の須

恵器壺、46の土師器高杯は8世紀末から9世紀中頃のもの、48は篠窯産の須恵器鉢で10世紀初頭のものである。49～51は平瓦片で縄叩きと布目痕跡だけで年代はわからない。ただし付近からはタテ縄叩きを施した、吉志部瓦窯産の平瓦が出土しているため（センター2016）、49～51も吉志部瓦窯産とするなら8世紀末から9世紀初頭のものとなる。また国化できないため、写真図版のみに掲載しているが、200（図版37）の鉄製品は鋳造が著しく原型を想像しがたいが、火打金の可能性がある。

#### （5）第5層

弥生時代～古墳時代の間に堆積したと考えられる地層である。調査区の南東隅で確認できる地層である。第5層は後述する第6・7層により形成された谷状地形を埋める形で堆積している地層で、灰オーブ色の細砂と灰白色の細砂が交互に累積しラミナ状堆積を形成している。基本的には自然堆積層と考えられるが、落ち際部分はラミナ堆積が乱れ、やや黒色化しており、部分的に人為的な攪拌を受けている。第5層からは弥生時代中期の土器片が数点出土している。ただし、これらの土器は第6層に包含されていたものが、第5層形成時の流水作用により紛れ込んだ可能性も考えられる。したがって、第5層が弥生時代に形成されたとは断言し難い。

#### （6）第6層

下層の第7層により形成された谷状地形の底に堆積している地層である。第6層は第6-1・6-2・6-3層の三つに分けることができる。以下では、地層の形成過程の順序に則って、最下層である第6-3層から述べてゆく。まず第7層により形成された谷状地形の最下部に黒色のシルトを主とする第6-3層が、第7層の上部に貼りつくように堆積する。第6-3層は、層中に植物遺体が横方向に何条にもわたって堆積していることから自然堆積と考えられるが、所々に植物遺体が攪拌され乱れている箇所が認められる。そのため第6-3層は、人為的な攪拌を部分的に受けているようである。第6-2層はその上に堆積した灰白色シルトで構成される自然堆積層であるが、これより上層の盛り土と考えられる第6-1層の直下にしかみられず、それ以外の範囲には存在しない。このことから、第6-2層は盛り土を施すことにより保護された層といえる。第6-1層は第6-2・6-3・7層を掘削して盛り上げられた地層で、既述のようにこの盛り土部分の直下にのみ第6-2層が残存する。おそらく第6-1層は第7層により形成された谷状地形の水の流れを制御するために施された盛り土と考えられ、時期は確言できないものの弥生時代中期から古墳時代後期の間に形成されたといえる。

#### （7）第7層

調査地全域に堆積する地層で、調査地およびその周辺の地形を形成した基盤層である。自然堆積層で、極細砂～シルトで構成されているが、調査区の西南端は粒径の荒い粗砂が混じる箇所がある。基本的に同層は流水作用により堆積しているが、その作用のなかにも複数回の単位があったと推測される。色調は淡黄色もしくは緑灰色を呈する。前述のように調査区東南端では落ち込んだ状況で堆積しており、これが谷状地形を形成し上述の第5・6層が堆積する由来となった。この層からの出土遺物は無い。

## 第2節 検出遺構

今回の調査では弥生時代中期から中世（室町時代）まで、複数時期の遺構を確認している。以下では検出した遺構について時期ごとに述べてゆく。なお調査範囲が広大なため、便宜上北半の1区と南半の2区に分けて記載する。今回報告する遺構の時期は、整理作業が終了し判明したもので、調査中におこ

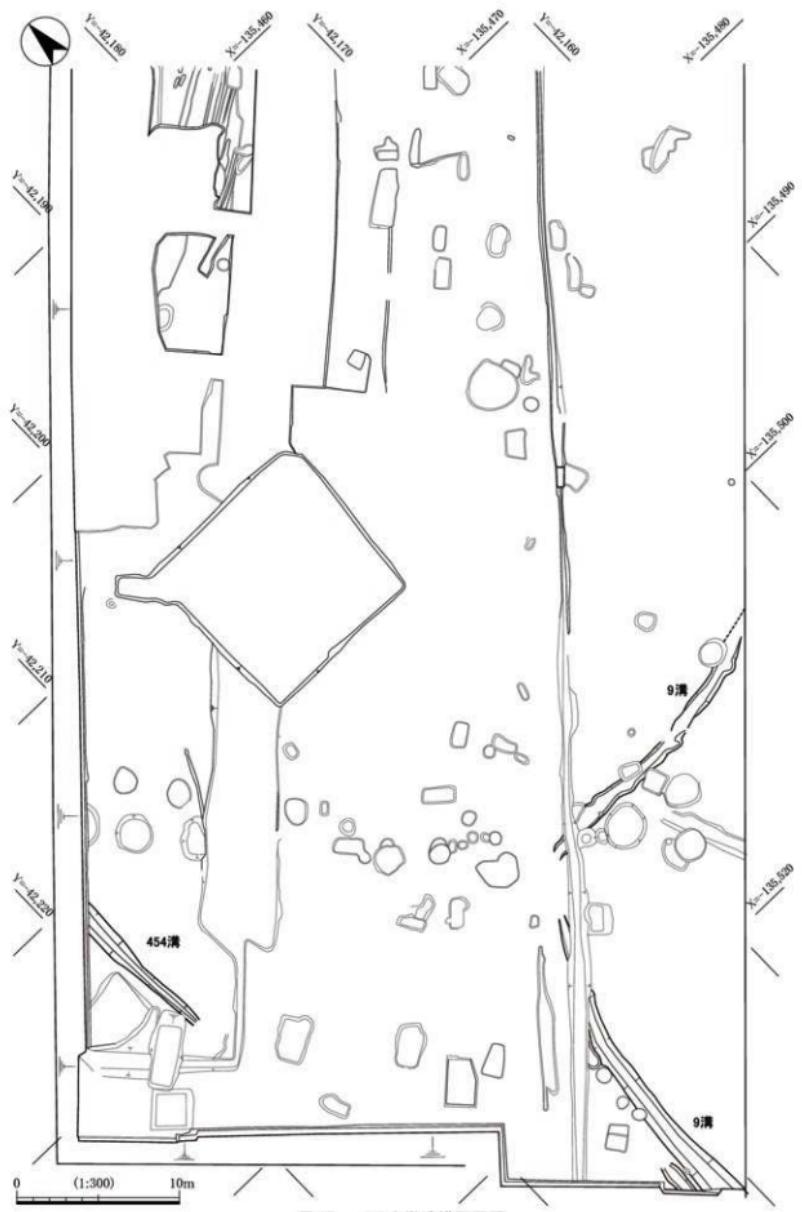


図 15 1区中世遺構配置図

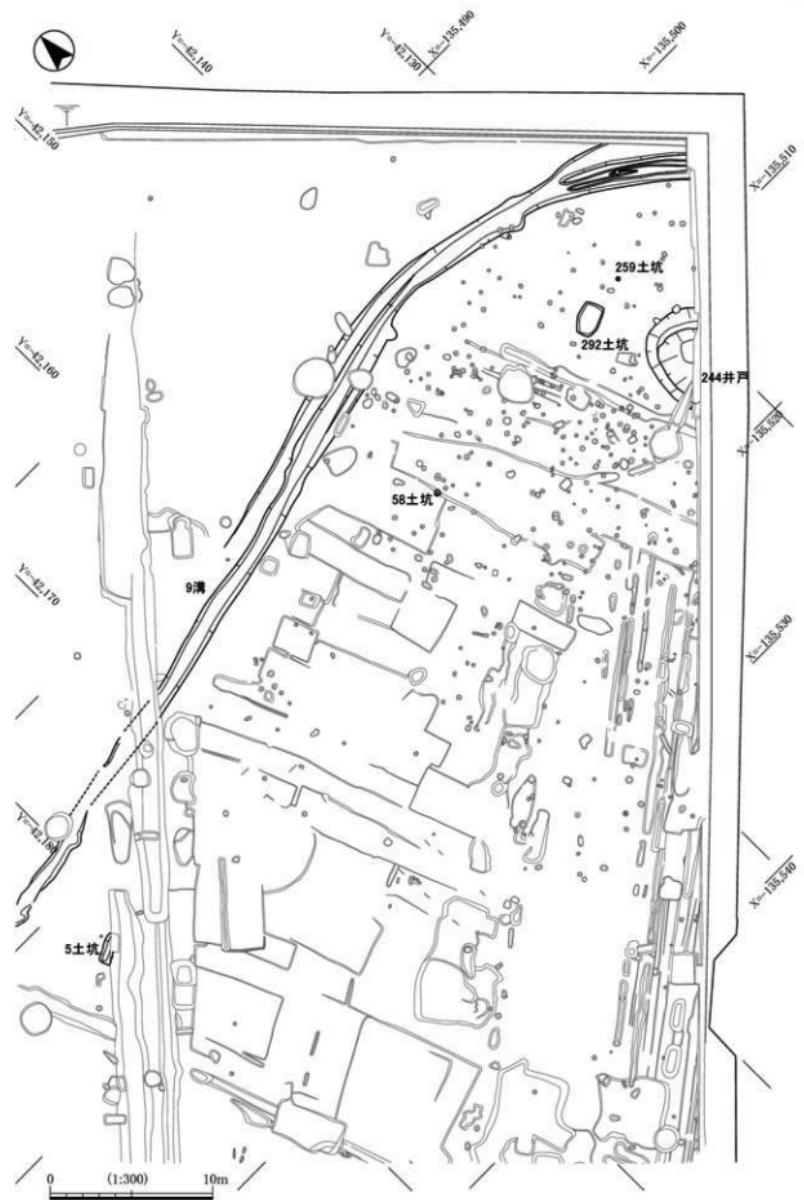


図 16 1・2区中世遺構配置図

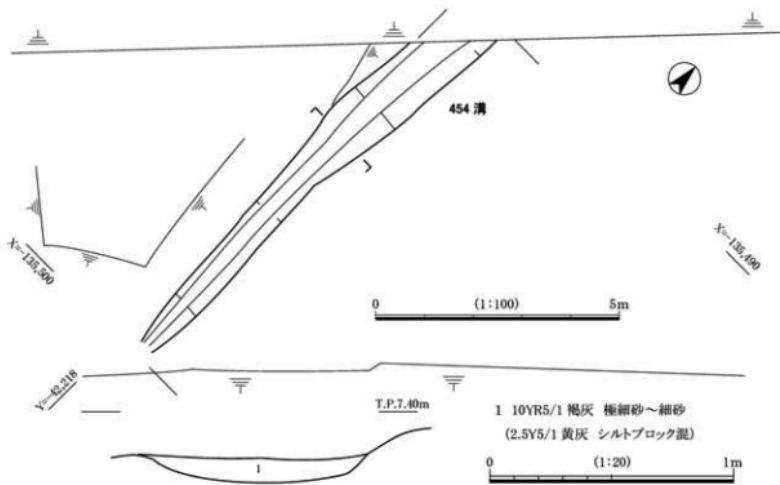


図 17 454 溝平面・断面図

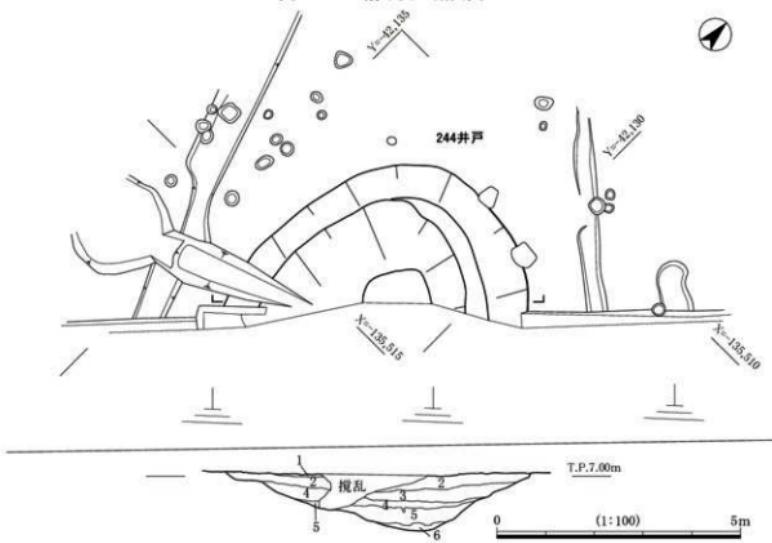


図 18 244 井戸平面・断面図

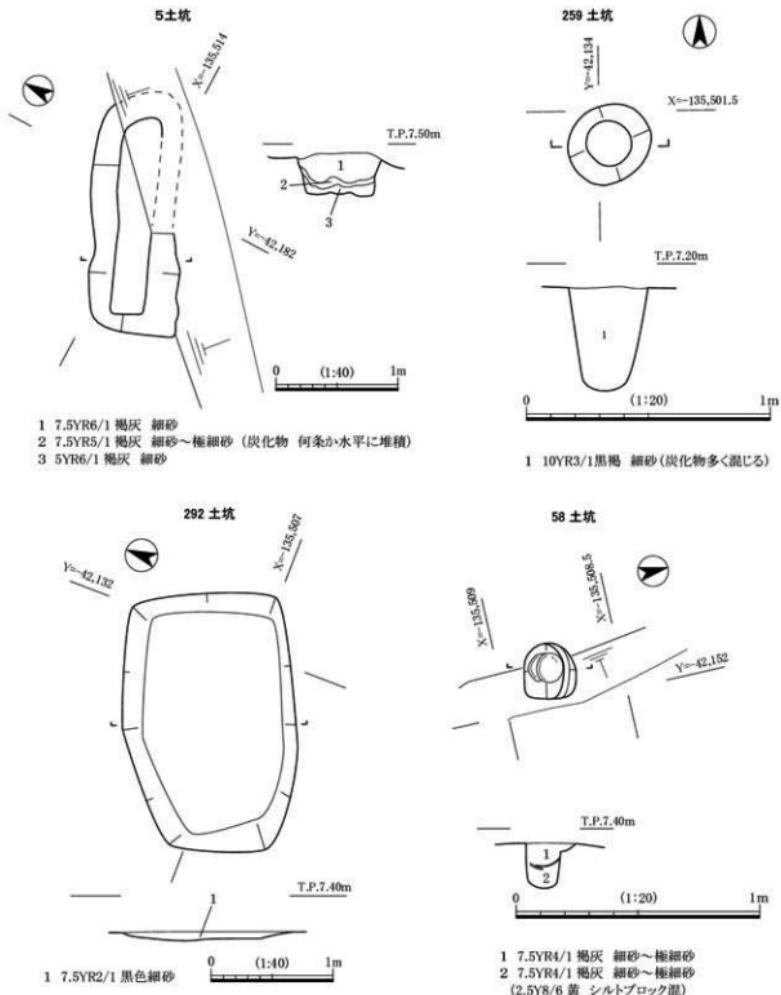


図 19 5・58・259・292 土坑平面・断面図

なった現地説明会当時に公表した時期と若干ずれるものがある（例：現地説明会時に古代と発表した58土坑）。正確な時期は本報告で述べるものであることをことわっておく。

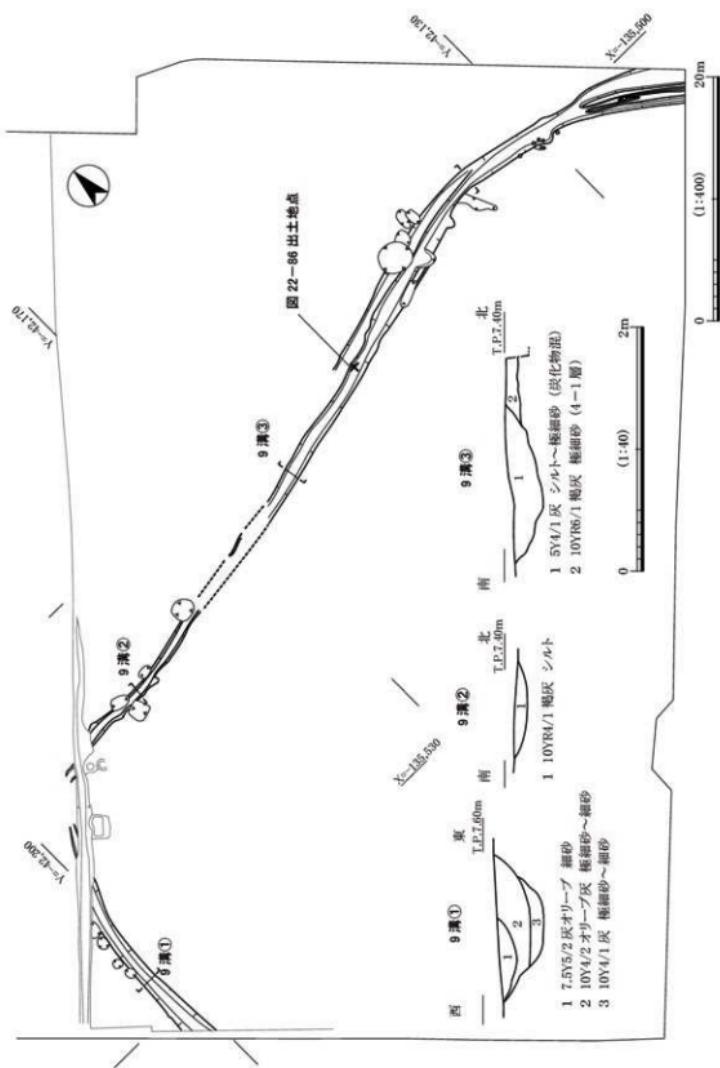


图 20 9溝平面・断面図

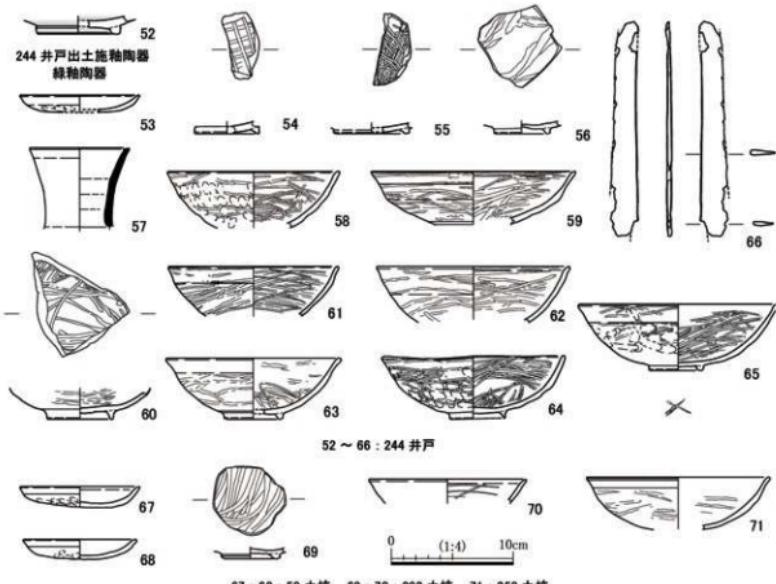


図21 中世遺構出土遺物

### (1) 中世

#### ① 1区 (図15、図版5-1)

**454溝** (図17、図版9-1) 1区の北西隅付近で検出した溝である。溝の方向は南北正方位から約10度東に傾いている。この方向は、後述する9溝の西部分とほぼ同じ向きである。溝内の埋土からは瓦器片と土師器片が出土している。この溝から西側の基盤層（第7層）は一様に約20cm高くなっていることから、耕作域の段差に相当する箇所に溝が掘られたものと考えられる。

なお9溝は1区と2区に跨るが、2区の項でまとめて扱う。

#### ② 2区 (図16、図版5-2・6-1・6-2)

**5土坑** (図19、図版7-2) 2区の西側、1区との調査区境付近で検出した土坑である。一部攪乱を受けて削平されているが、短辺0.6m長辺2.0mの長方形の土坑であったと推測される。断面形は箱形で、埋土中から土師器片が出土している。埋土は3層に分かれ、上層と下層は人為的に埋められた褐色灰色の細砂で、この層に挟まれた中層は黒色の有機物が水平に堆積した細砂である。5土坑は平面・断面の形状から中世墓の可能性が考えられる。調査区西側の吹田新市民病院予定地の調査においても同様の土坑が検出されており、中世墓の可能性が指摘されている（センター2015）。

**244井戸** (図18-21、図版8-1・36) 2区の南東隅付近で検出した井戸である。検出時の井戸掘方の直径は約6.0m、検出面から底までの深さ1.2mと大きなもので、枠板などは無く素掘りの井戸である。井戸の埋土は5層に分かれている。最下層（図18-6）およびその上層（図18-5）は、灰色もしくは灰白色のシルト層と黒褐色シルト層が互層状になっている自然堆積層である。中間の2層（図18-3・4）

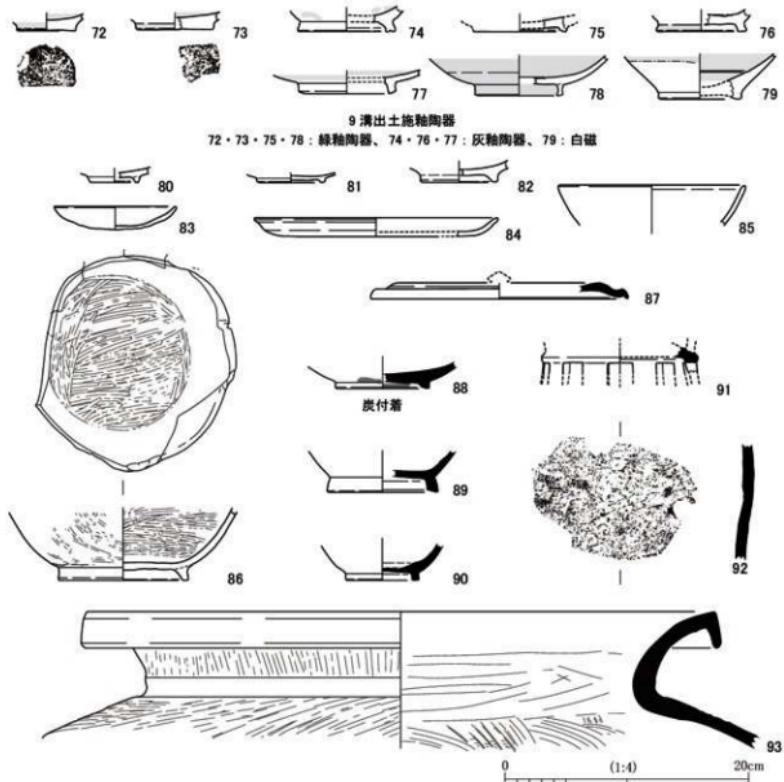
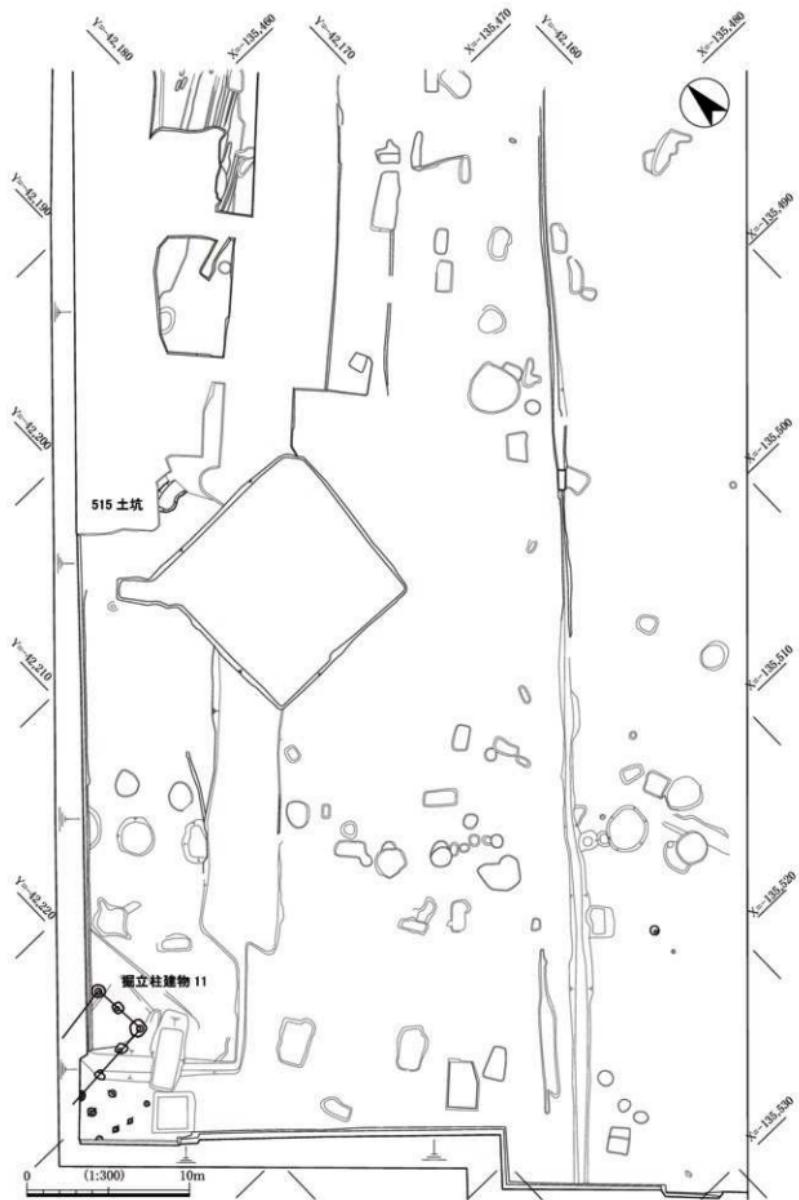


図22 9溝出土遺物

は黒褐色のほとんど混じりけの無い極細砂もしくはシルト層である。最上層(図18-2)は黒褐色の極細砂に基盤層である第7層のブロックおよび白色の小礫が混じる層で、人為的な埋戻しにより形成されたと考えられる。

244井戸からは52~66の遺物が出土した(図21)。52は緑釉陶器椀、平安京近郊産で10世紀初頭のものである。井戸の最上層(図18-2)から出土した。中世の段階で周辺の土を掘削し井戸を埋め戻す際に、後述する掘立柱建物群近辺の包含層に含まれたものが混入したと考えられる。これ以外にも244土坑からは182の緑釉陶器の破片が出土した。図化はできなかったが巻頭カラー図版3に掲載している。53は土師器皿で、図13の38と同一型式とみられる。38同様12世紀前半のもの。埋土上層(図18-2)から出土した。54~56・58~62・63~65(図版36)は瓦器椀で自然堆積層である埋土下層(図18-5)から出土した。いずれも12世紀中頃のもの。57の須恵器壺は8世紀後半のもの。埋土上層(図18-2)から出土している。52同様埋め戻し時の混入遺物と考えられる。66(図版36)は鉄刀で埋土下層(図18-5)



から出土した。

以上のうち、井戸の機能時期を示唆する遺物は54～56・58～65の瓦器椀といえる。244井戸は素掘りの井戸であるため、埋土下層の自然堆積は井戸が機能している状態、すなわち地下からの湧水で井戸が満たされている状態で形成されたと考えられる。したがって、この層から出土している一連の瓦器椀は井戸機能時に投棄されたものと考えられ、その時期は12世紀中頃であったと考えられる。

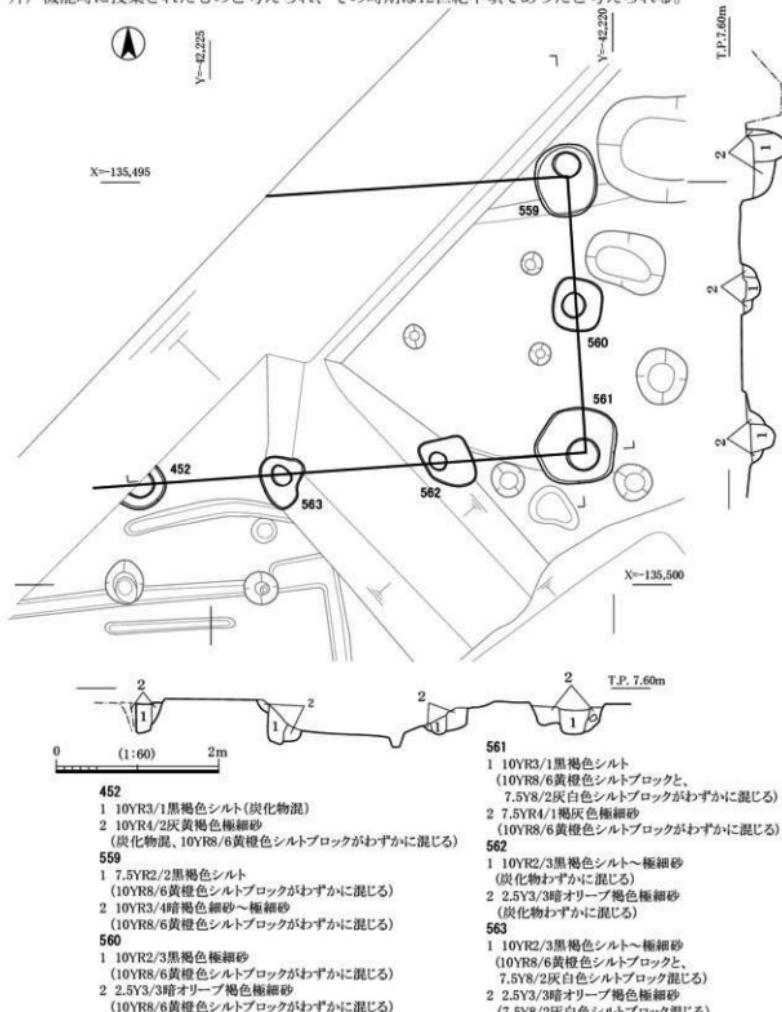


図24 掘立柱建物11平面・断面図

**58土坑**（図19・21、図版7-1・36） 2区の東側で検出した土坑である。平面形は梢円形で長軸20cm、短軸17cmである。埋土は2層に分かれ、上層は褐色の細砂～極細砂、下層は褐色の細砂～極細砂に黄色のシルトブロックが混じる。

上層と下層の間からは67（図版36）と68（図版36）の土師器皿2枚が重なった状態で出土した。皿の出土状況と、土坑の大きさが土師器皿の直径よりもやや大きいことから、58土坑はこの2枚の皿を埋納するために掘られた地鎮遺構と判断できる。67・68はいずれも12世紀中頃のものと考えられ上記の244井戸出土瓦器椀とほぼ同時期になる。

**292土坑**（図19・21、図版7-3） 244井戸の北側で検出した土坑である。平面形はややいびつな長方形で、検出面から底までの深さは10cmである。埋土は黒色の細砂である。

土坑からは69・70の瓦器椀が出土している（図21）。69は瓦器椀の底部片、70は瓦器椀の口縁部片である。いずれも12世紀代後半のものである。

**259土坑**（図19・21） 292土坑の北側で検出した土坑である。平面形は円形で検出面から底までの深さは40cmである。埋土は黒褐色の細砂で、埋土中から71の瓦器椀が出土している（図21）。71は13世紀前半のものである。

**9溝**（図20・22、図版5-1・8-1・8-2・9-1・9-2） 1区から2区にかけて検出された溝である。1区の西端では、南北正方位よりやや西に傾いた方位をとっているが、溝の最北端ではほぼ90度湾曲し2区の南東隅へと向かう。溝の底の高さは、湾曲している最北端部分がT.P+7.20mと最も高く、2区の南東隅ではT.P+6.90m、1区と2区の西端の調査区境ではT.P+7.00mと低い。このことから、湾曲部分を頂点として、そこから南と東方向に排水する目的を持った溝であると推測される。しかし、溝自体がほぼ90度湾曲していることを考えれば、排水目的の他に耕地などを区画する意図があったとも考えられる。なお9溝は調査区の東端で幅が広がり、三つ又に分かれている。また溝の南西延長部分は調査区外に延びるが、西隣の吹田新市民病院予定地の調査ではこの溝の南側の肩に繋がるとみられる、落ち込みの肩が検出されている（センター2015）。

9溝からは72～93の遺物が出土している（図22）。72～79は施釉陶器である。72・73・75・78は緑釉陶器で、72は9世紀末から10世紀初頭、73・75は9世紀中頃、72・73・75はいずれも平安京近郊産のもの、78は9世紀後半のもので猿投窯産である。74・76・77は灰釉陶器で、77は9世紀後半のもの。79は輸入陶磁器の白磁、定・刑窯系か。これ以外にも9溝からは圓化できなかったが、192～194・196・198の灰釉陶器の破片が出土しており、卷頭カラー図版4に掲載している。80は瓦器椀で12世紀後半のもの。81・82・85・86（図版36）は黒色土器椀である。81は10世紀前半のもの、82・85・86は10世紀後半のもの、86は9溝の肩部から出土した（図版9-2）。83の土師器皿は12世紀後半のもの。88～93は須恵器で、88は杯身で10世紀初頭のもの。底部に炭が付着しており、転用硯の可能性がある。89・90は壺、91（図版36）は円面硯の破片、8世紀末から9世紀初頭のもの。92・93は甕で、92は備前産甕の胴部片である。

上記の遺物は、8世紀末から12世紀後半まで時期幅があるが、9溝からは上に掲げたほかにも、瓦器椀片や土師器皿片が出土している。したがって溝そのものが掘削され、機能していた時期は12世紀代と考えられ、となれば、上記の244井戸や58・292・259土坑とほぼ同じ時期となる。

図版5-2・6-2には中世の遺構面の写真を掲げたが、報告した遺構以外にも埋土が似通うものについて白線を引いて撮影した。土坑の分布をみると、建物の柱穴として並びあうものではなく、また柱痕跡を有する土坑は皆無であった。したがって、調査地における12世紀の状況は集落の中心地という

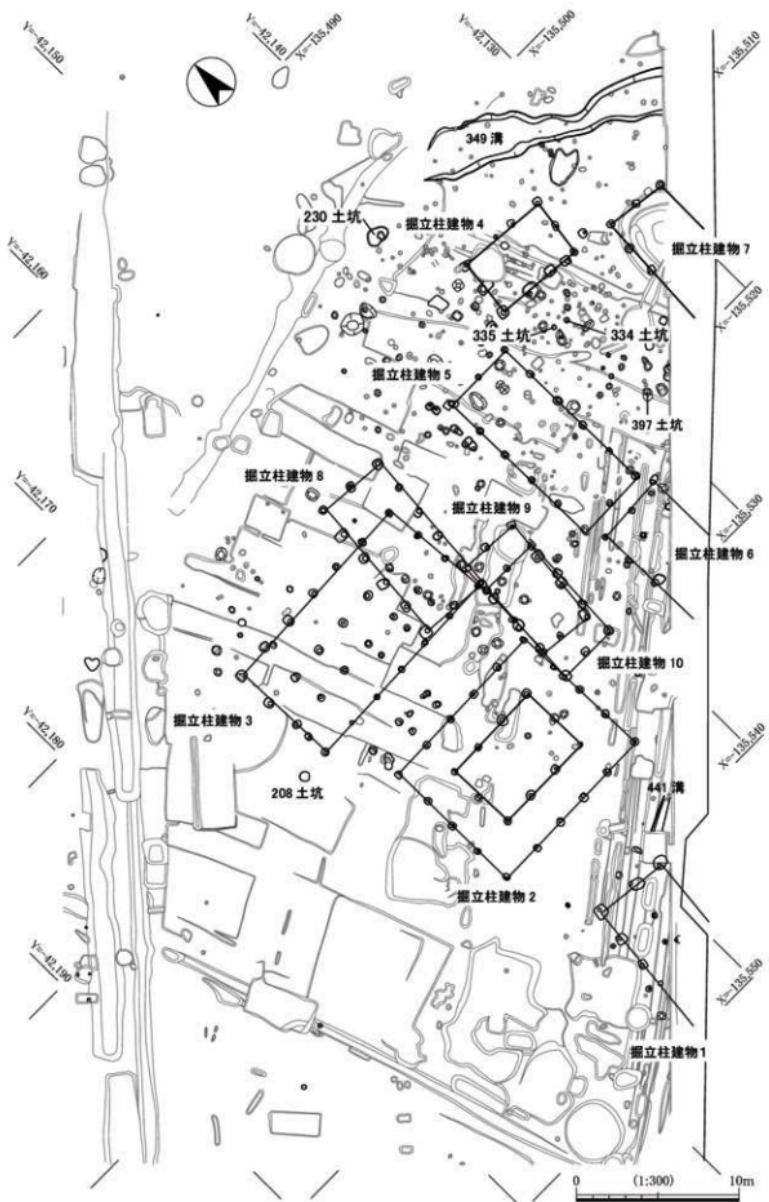


图25 2区古代遗構配置図

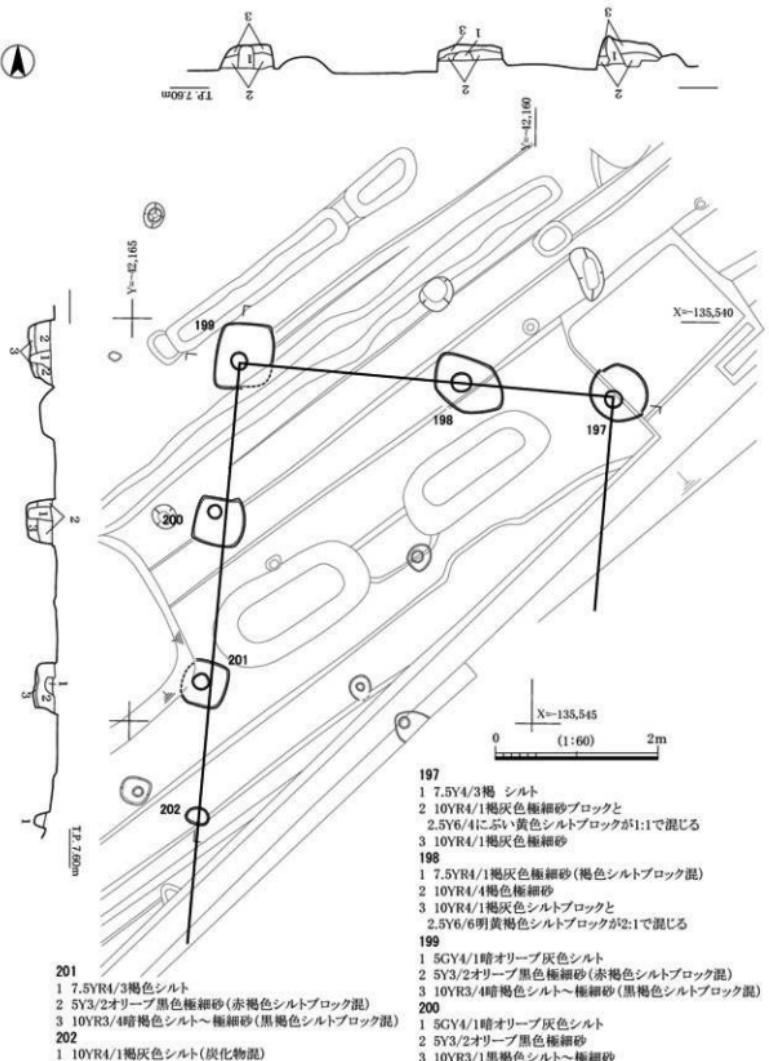


図26 掘立柱建物1平面・断面図

よりもその縁辺、もしくは畑・水田などの耕作域であった可能性が考えられる。244戸や9溝から出土している古代の遺物は、中世段階で井戸や溝を埋める際に周辺の古代の包含層が掘削された結果混入したものと考えられる。

## (2) 古代

以下ではまず掘立柱建物について報告し、その後溝・土坑などの遺構について述べる。

### ① 1区掘立柱建物(図23、図版2-2)

**掘立柱建物11** (図24、図版23-8、図版27) 調査区の北西隅で検出した建物である。東西方向に主軸を持ち、平面形は推定2間(3.6m=6尺等間)×3間(5.4m=6尺等間)以上の規模を有する。南側柱列で判断する限り、主軸は座標上の東西方向よりも北に5度傾いている。柱穴の掘方の平面形はすべて隅丸の方形である。柱痕跡の埋土は黒褐色のシルトで、掘方の埋土は褐色系の細砂もしくは極細砂で構成される。561柱穴は他の柱の位置関係から、これよりも南もしくは東へ延びる柱穴がないために、一見して隅柱と判断できる。いっぽう559柱穴については、さらに北方に柱列が延びる可能性もあるが、平面規模と柱痕跡の深さが561柱穴と似ることから、これも隅柱と考えて大過ないといえる。したがって、建物11の梁間は2間と推定した。いっぽう西側柱列の隅柱は452柱穴をそれにあるかどうかが問題となるが、平面規模および柱痕跡の深さは他の側柱とさして大差ないため積極的にこの柱穴が隅柱となるとは判断しかねる。したがって、建物11の桁行きは3間以上と推定した。

出土遺物は、柱穴掘方から須恵器や上師器の細片が出土したが、詳細な時期は不明である。

表1 掘立柱建物2柱穴寸法一覧表

身含柱 柱穴番号	掘方一辺の長さ(長軸) cm	柱穴の直径 cm	柱穴の深さ cm	柱穴底のT.P.値 m
87(隅)	34	18.0	18	7.15
88	34	20.0	8	7.27
89	61	27.8	16	7.20
90(隅)	46	26.8	26	7.16
91	43	—	18	7.23
92(隅)	30	—	10	7.30
93	49	15.7	10	7.30
94	50	18.0	7	7.31
95(隅)	48	22.3	26	7.14
96	40	17.7	18	7.18
龜柱				
柱穴番号	掘方一辺の長さ(長軸) cm	柱穴の直径 cm	柱穴の深さ cm	柱穴底のT.P.値 m
69(隅)	46	15.4	16	7.22
70	42	20.2	20	7.11
71	34	16.1	16	7.12
72	39	16.7	18	7.18
73	42	19.7	23	7.14
74(隅)	40	19.1	10	7.28
75	36	18.7	20	7.21
77	44	24.4	18	7.22
78	46	21.2	24	7.16
79(隅)	52	19.3	19	7.20
245	46	20.6	26	7.14
80	44	23.3	10	7.30
81	42	22.0	16	7.22
82	41	20.0	28	7.10
83(隅)	45	17.2	20	7.18
84	39	18.8	20	7.20
85	44	21.5	25	7.12
86	41	18.9	8	7.24

### 掘立柱建物 2 柱穴埋土 (37・38 頁、図 27 に対応)

69	1 10YR1/1褐色 極細砂～細砂	84	1 7.5YR4/1褐色 シルト
2 10YR4/2灰黃色 細砂～極細砂	2 2.5Y8/1灰白 極細砂 (7.5YR4/1褐色 シルトブロック混)		
70	3 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂 (10YR7/1灰白 極細砂ブロック混)		
1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂	85	1 2.5Y6/1黄灰 極細砂 (2.5Y7/8黄 シルトブロックむすかに混)	
2 10YR4/1褐色 極細砂ブロック～細砂と	2 2.5Y4/4オーブル色 細砂～極細砂		
10YR5/6黄褐色 極細砂ブロックが1:1で混じる	71	1 2.5Y5/4黄褐色 シルト	
1 10YR7/1灰白色 極細砂 (7.5YR4/3褐色 極細砂ブロック混)	87	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂	
2 10YR4/2灰黃褐色 細砂～極細砂	2 10YR4/2灰黃褐色 細砂～極細砂		
72	88	1 10YR4/1褐色 極細砂～細砂	
1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂	2 10YR4/1褐色 極細砂～細砂と		
2 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂と	7.5YR4/1褐色 極細砂ブロックが1:1で混じる		
10YR5/6黄褐色 極細砂ブロックが2:1で混じる	73	89	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂
1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂	2 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂～細砂		
2 10YR3/1黒褐色 極細砂ブロックと	90	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂	
10YR5/6黄褐色 極細砂ブロックが2:1で混じる	2 10YR3/1黒褐色 極細砂ブロックと		
74	10YR5/6黄褐色 極細砂ブロックが1:1で混じる	91	1 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂 (10YR7/1灰白色 極細砂ブロック混)
1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂	92	1 10YR7/1灰白色 極細砂 (7.5YR4/3褐色 極細砂ブロック混じる)	
2 10YR4/1褐色 極細砂ブロック～細砂と	93	1 10YR4/1褐色 極細砂～細砂	
10YR5/6黄褐色 極細砂ブロックが1:1で混じる	2 10YR4/1褐色 極細砂～細砂と		
75	94	1 10YR4/1褐色 極細砂～細砂	
1 10YR4/1褐色 極細砂ブロック～細砂	2 10YR4/2灰黃褐色 細砂～極細砂		
2 10YR4/1褐色 極細砂ブロック～細砂	95	1 10YR4/1褐色 極細砂～細砂	
と 10YR5/6黄褐色 極細砂ブロックが1:1で混じる	2 10YR4/2灰黃褐色 細砂～極細砂		
77	96	1 10YR4/1褐色 極細砂～細砂	
1 10YR5/1褐色 細砂 (10YR8/4浅黄褐色 シルトブロック混)	2 10YR4/1褐色 極細砂～細砂と		
2 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂 (10YR7/1灰白色 極細砂ブロック混)	245	1 10YR3/1黒褐色 極細砂	
78	97	2 7.5YR3/2黒褐色 極細砂～細砂	
1 7.5YR4/1褐色 極細砂 (10YR7/1灰白色 細砂～極細砂ブロック混)	1 10YR4/1褐色 極細砂～細砂		
2 10YR4/2灰黃褐色 細砂～極細砂	1 10YR4/2灰黃褐色 細砂～極細砂		
79	1 10YR3/3暗褐色 極細砂～細砂		
2 7.5YR4/1褐色 極細砂～細砂	2 10YR4/2灰黃褐色 細砂～極細砂		
80	1 10YR3/1黒褐色 極細砂		
2 7.5YR3/2黒褐色 極細砂～細砂	1 10YR4/1褐色 極細砂～細砂		
81	2 10YR4/1褐色 極細砂～細砂と		
1 10YR7/1灰白色 極細砂 (7.5YR4/3褐色 極細砂ブロック混)	7.5YR4/1褐色 極細砂ブロックが1:1で混じる		
2 10YR4/2灰黃褐色 細砂～極細砂	98	1 10YR4/1褐色 極細砂～細砂	
82	1 10YR4/3褐色 極細砂 (10YR7/1灰白色 極細砂ブロック混)		
1 7.5YR4/3褐色 極細砂 (10YR7/1灰白色 極細砂ブロック混)	2 10YR4/3褐色 極細砂～細砂		
2 10YR4/2灰黃褐色 細砂～極細砂	83	1 10YR4/3褐色 極細砂 (10YR7/1灰白色 極細砂ブロック混)	
83	2 10YR4/3褐色 極細砂～細砂		

### ② 2 区掘立柱建物 (図25、巻頭カラー 1-1、図版 1-2・2-1・10)

**掘立柱建物 1** (図26、図版11) 調査区の南端近くで検出した建物である。南北方向に主軸を持ち、平面形は2間(4.55m=15尺)×3間(5.5m=6尺)以上の規模を有する。西側の側柱列で判断する限り、主軸は座標上の南北方向よりも東に5度ふっている。柱穴掘方は202柱穴を除いてすべて方形であるが、202柱穴は近世以降の溝による搅乱を受けているため、本来の形状は方形であったと推測すれば、すべての柱穴は方形であったといえる。柱痕跡の埋土は灰色系もしくは褐色系のシルトで、柱掘方の埋土は褐色系のシルトもしくは極細砂である。199柱穴は位置関係から、これよりも北もしくは西へ延びる柱穴がないために、一見して隅柱といえるが、197柱穴については、はっきりとはわからない。しかし197柱穴は、199柱穴と掘方の規模と柱痕の深さがほぼ一致することから、この柱穴も隅柱であったと想定される。従って建物1の梁間は2間と推定した。いっぽう、202柱穴については、大きく削平を受けているため、柱痕跡のみの残存で掘方の規模が判然としない。柱痕跡の深さは、北西の隅柱である199柱穴とほぼ同じであるため隅柱の可能性も捨てきれない。図26では桁行は3間以上と推定しているが、3間で収まる可能性もある。

柱痕跡および柱掘方からの出土遺物は無い。

### 掘立柱建物 3 柱穴埋土 (39・40 頁、図 28 に対応)

101	1 10YR2/1黒褐色 極細砂～シルト 2 10YR4/2灰黄褐色 細砂	112	1 10YR3/1黒褐色 細砂 2 2.5Y4/6オーリーブ褐色 極細砂ブロック～シルト	124	1 2.5Y5/3黄褐色 細砂 2 10YR4/2黑褐色 極細砂～細砂
102	1 10YR2/1黒褐色 極細砂～シルト 2 10YR4/2灰黄褐色 細砂～粗砂	113	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 2.5Y4/6オーリーブ褐色 細砂	126	1 10YR3/2黑褐色 極細砂～細砂 2 10YR4/1灰褐色 細砂と、 10G6/1緑色 シルトブロックが1:1で混じる
103	1 10YR2/1黒褐色 極細砂～シルト 2 10YR4/2灰黄褐色 細砂～粗砂と、 5Y8/4灰黄色 シルトブロックが1:1で混じる	114		127	
104	1 5Y4/1灰褐色 シルトブロックと、 2.5Y5/6黄褐色 シルトブロックが1:1で混じる	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 2.5Y4/6オーリーブ褐色 細砂	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 2.5GY5/1オーリーブ灰褐色 シルト	128	1 2.5Y3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 10YR4/3灰褐色 極細砂～細砂
105	1 5Y4/1灰褐色 シルトブロックと、 2.5Y5/6黄褐色 シルトブロックが1:1で混じる	115	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 2.5Y4/6オーリーブ褐色 細砂	129	1 2.5Y3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 2.5Y5/2灰黄色 極細砂～細砂
106	1 5Y4/1灰褐色 極細砂～細砂	116		130	
108	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂～細砂	117	1 2.5Y4/1にぶい黄褐色 細砂	1 10YR3/1黒褐色 極細砂	1 10YR3/1黒褐色 極細砂
109	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 10YR3/1黒褐色 極細砂～粗砂と、 5Y8/2灰白色 ブロックが1:1で混じる	118	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 2.5Y5/2灰黄色 極細砂～細砂	2 10YR3/1黒褐色 極細砂と、 2.5Y4/6オーリーブ褐色シルトの ブロックが1:1で混じる	2 10YR3/1黒褐色 極細砂と、 2.5Y4/6オーリーブ褐色シルトの ブロックが1:1で混じる
110	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 10YR3/1黒褐色 極細砂～粗砂と、 5Y8/2灰白色 ブロックが1:1で混じる	119		131	
111	1 10YR3/1黒褐色 極細砂 2 10YR3/1黒褐色 極細砂と、 2.5Y4/6オーリーブ褐色シルトの ブロックが1:1で混じる	120	1 5Y4/1灰褐色 細砂 2 2.5Y4/2灰黄色 細砂	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 10YR3/1黒褐色 極細砂と、 5Y8/2灰白色 シルトブロックが1:1で混じる	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 10YR3/1黒褐色 極細砂と、 5Y8/2灰白色 ブロックが1:1で混じる
		121	1 5Y5/2灰白色 シルトブロックが1:1で混じる	132	
		122	1 5Y7/3灰黄色 細砂～粗砂	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 (5Y6/3サバゲーブル色シルトブロック混) 2 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂と、 5Y8/2灰白色 ブロックが1:1で混じる	1 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂 (5Y6/3サバゲーブル色シルトブロック混) 2 10YR3/1黒褐色 極細砂～細砂と、 5Y8/2灰白色 ブロックが1:1で混じる
		123	1 2.5Y3/1黒褐色 極細砂～細砂 2 10YR4/3にぶい黄褐色 極細砂～細砂	133	
		124	3 10YR5/1灰褐色 極細砂～細砂		

**掘立柱建物 2** (図27・30・31・39、巻頭カラー 1－2、図版12～15・40、表 1) 掘立柱建物 1 の北側で検出した建物である。東西方向に主軸を持ち、平面形は 5 間 (11.4m) × 4 間 (9.2m) の規模を有する。この建物は一般的な掘立柱建物ではなく、身舎に外周する柱 (以下、身舎外周柱) を配置する。この場合、身舎外周柱は廂、袋階、縁、軒支柱などの可能性が考えられる。

掘立柱建物 2 の主軸は身舎の棟柱の方向で判断する限り、座標上の東西方向よりも南に 2 度ふっている。身舎柱掘方の平面形態は隅丸の方形で、柱穴の半分以上が削平されている 92 柱穴を除外すると、最も小さい 87 柱穴で一辺 34cm、最も大きい 89 柱穴で 61cm である (長方形ないしは楕円形の場合は長軸・辺、以下同様)。身舎柱掘方の一辺の平均値は 43.5cm である。外周柱掘方の平面形態は隅丸の方形ないしは円形で、最も小さい 71 柱穴で一辺 34cm、最も大きい 79 柱穴で 52cm である。外周柱掘方の一辺ないしは長軸の平均値は 42.4cm である。

つぎに柱痕跡の直径と深さについて身舎柱と外周柱に分けてみていただきたい (表 1)。身舎柱痕跡の平面形はすべて円形である。柱痕跡の直径は最も小さい 93 柱穴で 15.7cm、最も大きい 89 柱穴で 27.8cm、検出面からの深さは最も浅い 94 柱穴で 7 cm、最も深い 90 柱穴で 26cm である。身舎柱痕跡の直径の平均は 20.8cm である。つぎに外周柱であるが、その平面形は身舎柱痕跡同様すべて円形である。その直径は最も小さい 69 柱穴で 15.4cm、最も大きい 77 柱穴で 24.4cm、検出面からの深さは最も浅い 86 柱穴で 8 cm、最も深い 82 柱穴で 28cm である。外周柱痕跡の直径の平均は 19.6cm である。なお、柱痕跡の深さは上層の搅

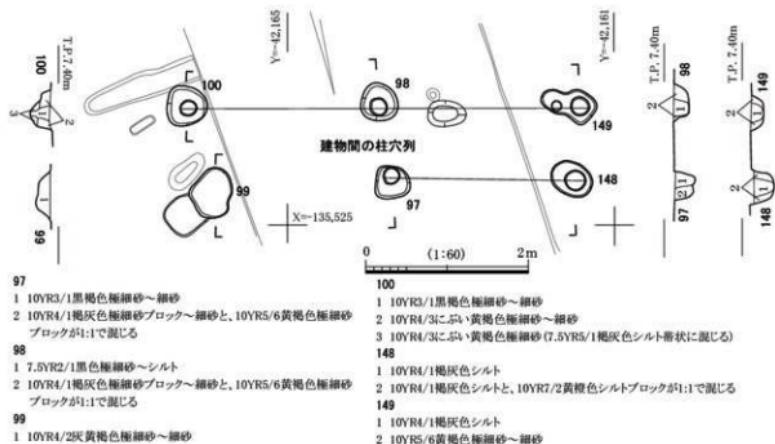


図29 堀立柱建物2・3間の柱穴列

押が著しく検出面が低い場合は他の柱穴よりも浅くなる。そのため参考値として柱痕跡底の標高をTP値で表1中に載せておいた。

身舎外周柱は身舎柱の柱筋を延長した位置に配置されている。したがって身舎柱と外周柱の梁は一直線上に延びていると解釈できる。しかも後述するように、身舎柱と外周柱の柱間は南北方向であれ東西方向であれ、ほぼ同じ間隔を意識していると考えられ、外周柱の配置は身舎柱の位置に規制されていたことをうかがわせる。身舎外周柱は上述したように、四面廂建物の廂、蓑階の支柱、縁の支柱、軒の支柱などの可能性が考えられる。箱崎和久氏によれば身舎の柱が外周柱の径より若干大きいもしくはほぼ同じ大きさで、身舎の柱間と外周柱の柱間が一致し柱筋を描えている建物は、四面廂建物である可能性が高いという（箱崎2012）。上記でみてきたように、建物2はまさにこれに該当するものであり、構造的には3間（6.4m）×2間（4.5m）の身舎の外周に廂柱を巡らせた四面廂建物だといえる。したがって、以下では外周柱とは表記せず廂柱と表記する。

図30に掘立柱建物2・3の柱間の実測値を掲載した。実測は現地において柱痕跡の心々間に平面距離で測っており、単位はメートルである。掘立柱建物2の柱間寸法について一見して気が付くのは、廂間と廂間以外の柱間の差である。廂間は平均2.46mであるいっぽう、それ以外は平均2.17mである。このことから、身舎の柱間が2.17m、すなわち7尺の規格で設計され、廂間はそれより1尺広い8尺の規格で設計されたと考えられる。身舎の柱間よりも廂間のほうが広い平面構造は平安京で多くみられるもので（家原2012）、建物の時期は次章で詳説するが、掘立柱建物2は平安京内の建物と同時代的特徴を有しているといえる。

柱痕跡の埋土はほぼ一様で、黒褐色ないしは褐灰色系の極細砂で構成される。掘方の埋土もほぼ一様で、柱痕跡よりも色調の薄い黄褐色ないしは灰黄褐色系の細砂もしくは極細砂で構成される。なお88柱穴では、柱痕跡よりもやや東にずれた位置で根石の一部と想定される石を検出している。また91柱穴は、近世の耕作に伴う土坑によって柱掘方の半分近くが削平されているが、その土坑の中から根石と想定される石を検出している。

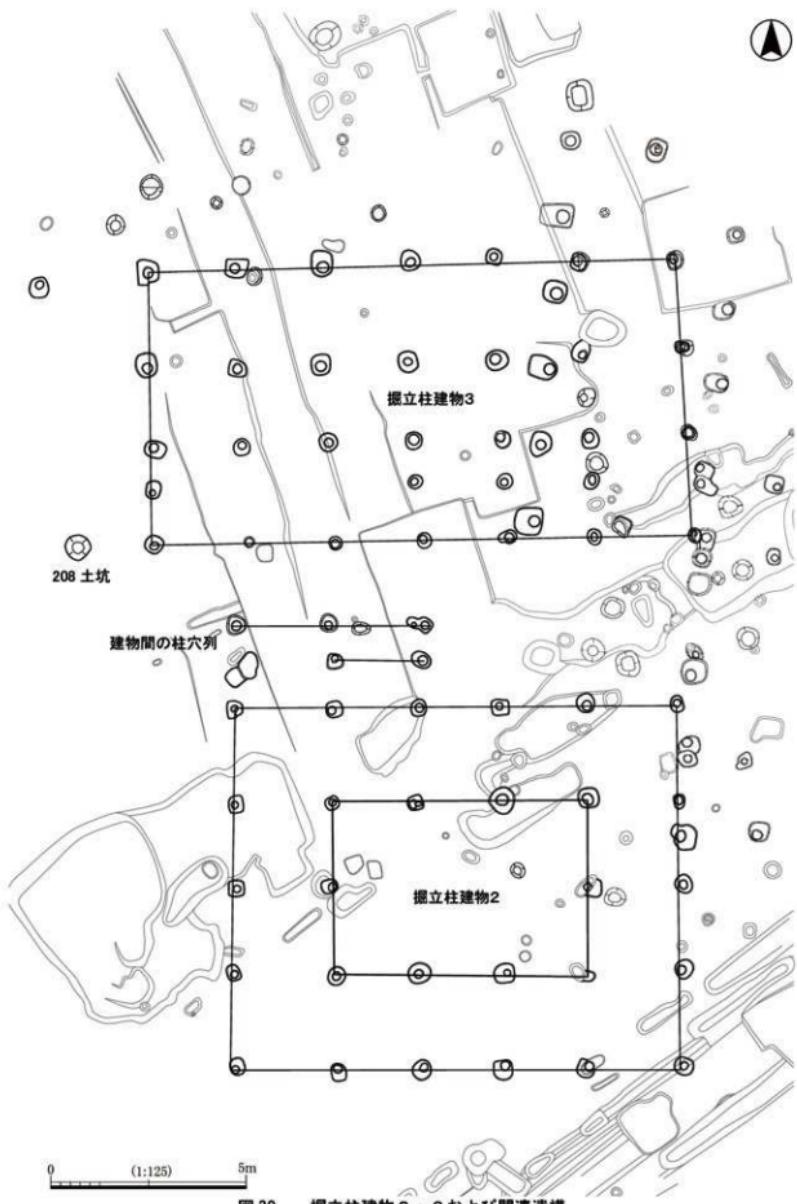


図 30 掘立柱建物 2・3 および関連遺構

掘立柱建物3

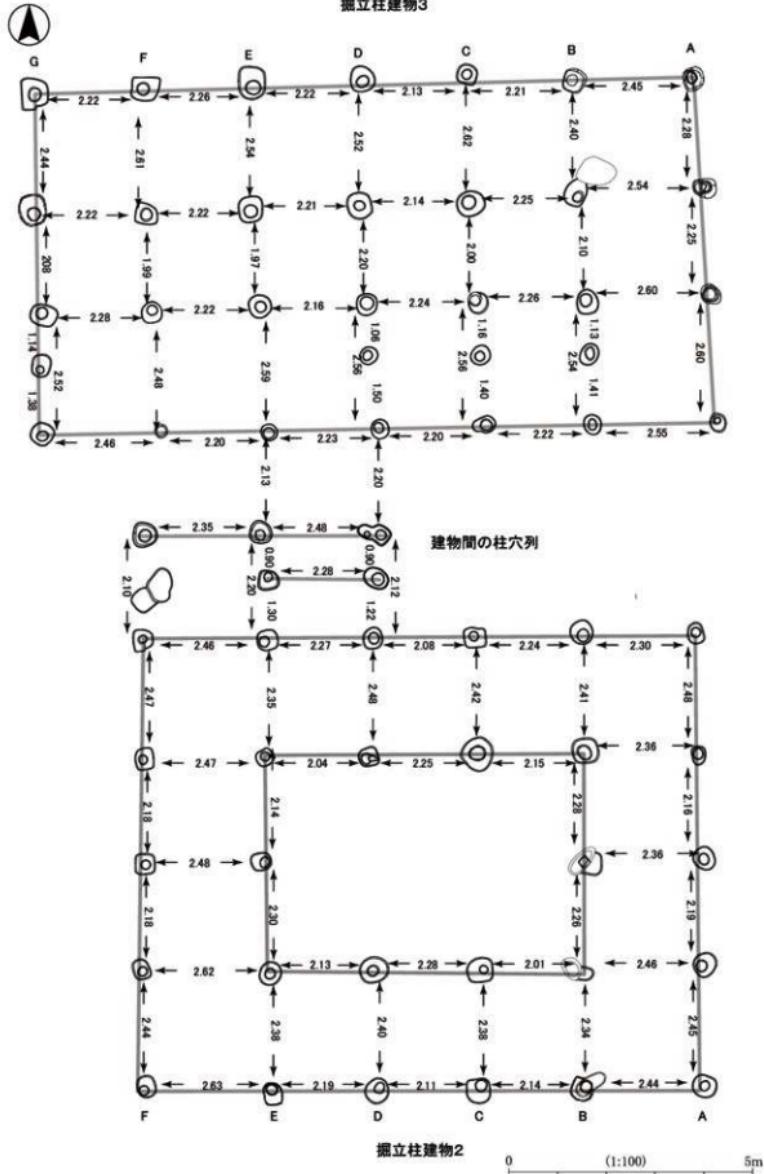


図 31 掘立柱建物 2・3 の柱間寸法

表2 掘立柱建物3柱穴寸法一覧表

側柱 柱穴番号	掘方一辺の長さ(長軸) cm	柱穴の直径 cm	柱穴の深さ cm	柱穴底のT.P.値 m
101	64	27.9	28	7.00
120	54	24.7	26	7.00
119	62	27.4	30	7.00
118	48	21.8	26	7.04
117	37	14.5	12	7.18
116	43	27.7	17	7.21
115	40	20.5	22	7.07
114	49	19.6	22	7.16
113	43	17.5	22	7.18
112	31	19.2	22	7.17
111	37	20.6	18	7.20
110	43	21.4	14	7.20
109	33	18.5	16	7.10
108	34	20.6	10	7.20
106	21	-	18	7.04
105	42	15.7	23	7.10
104	42	11.6	23	7.10
103	46	19.9	28	7.03
102	59	23.9	6	7.18
東柱 柱穴番号	掘方一辺の長さ(長軸) cm	柱穴の直径 cm	柱穴の深さ cm	柱穴底のT.P.値 m
121	46	26.4	12	7.12
122	47	23.6	14	7.18
123	47	19.9	34	6.96
124	56	24.8	10	7.20
125	56	21.5	9	7.28
130	45	24.6	18	7.20
129	38	21.8	12	7.21
128	36	23.2	12	7.18
127	45	20.2	23	7.13
126	39	19.8	19	7.04

身舎の北東隅柱である87柱穴の掘方からは、99（図39、図版40）の土師器の小型壺の口縁部から胴部にかけての破片が出土している。土器自体は、8世紀末頃から9世紀初頭にかけての時期に属する。

掘立柱建物3（図28～31、巻頭カラー1-2、図版16～19、表2）掘立柱建物2の北側で検出した建物である。東西方向に主軸を持ち、平面形は6間（13.5～13.8m）×3間（6.9～7.0m）の規模を有する。この建物は総柱建物で、倉庫もしくは総床張り建物と考えられるがその構造については後述する。南側の側柱列で判断する限り、主軸は座標上の南北方向よりも東に2度ふっている。

つぎに柱穴の規模についてみてゆくが、結論から述べると掘立柱建物3では側柱と内部の柱とで規格が異なる。そのため、側柱と内部の柱とで別々に述べてゆきたい（表2）。側柱柱穴の掘方は隅丸の方形もしくは円形で、削平の著しい106柱穴を除いて、最も小さい109柱穴で一辺33cm、最も大きい101柱穴で64cmである。側柱掘方の一辺の平均値は43.6cmである。内部の柱掘方の平面形態は隅丸の方形ないしは円形で、最も小さい128柱穴で一辺36cm、最も大きい124柱穴と125柱穴で56cmである。内部の柱掘方の一辺ないしは長軸の平均値は45.4cmである。

柱痕跡の平面形は側柱も内部の柱もすべて円形である。側柱痕跡の直径は削平が著しい117柱穴を除いて、最も小さい113柱穴で18.0cm、最も大きい101柱穴で27.9cm、検出面からの深さは削平が著しい102柱穴を除いて、最も浅い108柱穴で10cm、最も深い119柱穴で30cmである。側柱痕跡の直径の平均は21.5cmで、深さの平均は21.4cmである。いっぽう内部の柱痕跡の直径は最も小さい126柱穴で19.8cm、最

も大きい121柱穴で26.4cm、検出面からの深さは最も浅い125柱穴で9cm、最も深い123柱穴で34cmである。内部の柱痕跡の直径の平均は22.6cmで、深さの平均は16.3cmである。なお、ここでも掘立柱建物2同様、柱痕跡底の標高をT.P.値で表2に載せている。

側柱と内部の柱を比較すると、掘方および柱痕跡の大きさは内側の柱のほうが大きい。これに対して柱痕跡の深さは側柱のほうが深い。側柱の深さは計測可能な17基の柱穴のうち、10基が20cmを上回っているのに対して、内部の柱は計測可能な10基のうち20cmを上回るものは2基のみで、しかも半分の5基が15cm以下である。柱痕跡の直径が柱の直径を示すという前提に立てば、内部の柱についてはその直径が太いにも関わらず、側柱の柱よりも浅いことが特徴的である。以上のことから内部の柱穴は屋根を支えていたのではなく、床を支えていた床束と考えられる。したがって、掘立柱建物3は規模の大きな縦床張り建物であったと推測される。また、掘立柱建物3の側柱は南側の掘立柱建物2の柱筋を意識して配置されており、2棟の建物は一対として設計規格されたものといえる。

このことは図30を参照すればより鮮明にわかる。まず東端の桁行きの柱間間隔をみてみると、北から、2.45m、2.54m、2.60m、2.55mとこれよりも西側の桁行きの間隔よりもあきらかに広くなっている。これは、掘立柱建物2の東側の廊間と柱筋を合わせた結果このような柱間間隔、すなわち8尺になったものと考えられる。図30のアルファベットで示すならば、掘立柱建物3の柱列A・Bは掘立柱建物2の柱列A・Bに合わせたものといえる。ただし、これより西側の柱列C・D・Eも両建物間で同じ筋にのっているが、掘立柱建物3の柱列Fは掘立柱建物2の柱列Fと同じ筋にはのらない。その要因は不明であるが、そもそも床束であるため、なにもすべての柱筋が通っている必要もない。すくなくとも掘立柱建物3の設計にあたっては掘立柱建物2の東側柱と揃えることと、東側の廊間と柱間をそろえることが第一義的に意識されたと推測される。

掘立柱建物3の柱痕跡の埋土はほぼ一様で、黒褐色ないしは褐灰色系の極細砂で構成される。掘方の埋土もほぼ一様で、黄褐色ないしは灰黄褐色系の極細砂のブロックと、黒褐色ないしは灰色の極細砂のブロックが混じり合って構成される。なお114柱穴では根石と想定される石を検出している。

掘立柱建物3の柱穴からの出土遺物は土師器や須恵器の細片ばかりで、建物の時期を示唆するようなものはなかった。

**掘立柱建物2と3の間の柱穴列**（図29～31・39、巻頭カラー1－2、図版20－1～4） 掘立柱建物2と3のちょうど中間の位置で、かつ両建物の柱筋に則った形で柱穴が列状に並んでいる。98柱穴、100柱穴、149柱穴の一列と97柱穴、148柱穴の一列がそれで、いずれも掘立柱建物2の梁間の柱筋を延長した位置に並んでいる。これらの柱の掘方と柱痕跡の埋土は、掘立柱建物2と3の柱穴のそれと非常によく似通っており、埋土の観察からも掘立柱建物2・3と同じ時期に掘削されたことが推測できる。なお97柱穴と148柱穴は、上記の柱穴列よりも1基少ないとから、二つの柱列が同一構造をなしていかつた可能性もある。ただし、図30を見る限り、97柱穴と148柱穴は、南の掘立柱建物2との間隔および、北の柱穴列と間隔を同じにしている。このことから、97・148柱穴も98柱穴、100柱穴、149柱穴の柱穴列と同じ構造をなしていた可能性がある。なお100柱穴南側の99土坑については掘立柱建物2の柱筋からあきらかにずれることと、柱痕跡を有しないことから、上記の柱穴とは別の時期ないしは別の目的で掘削されたと考えておく。99土坑の埋土が他の柱穴とは異なり、周辺の遺構を削平している状況を考えると、元来ここにも柱穴列をなす1基があった可能性も考えられる。

上記の柱穴列からは94～96の遺物が出土している（図39）。95は98柱穴の柱痕跡から出土した灰釉陶

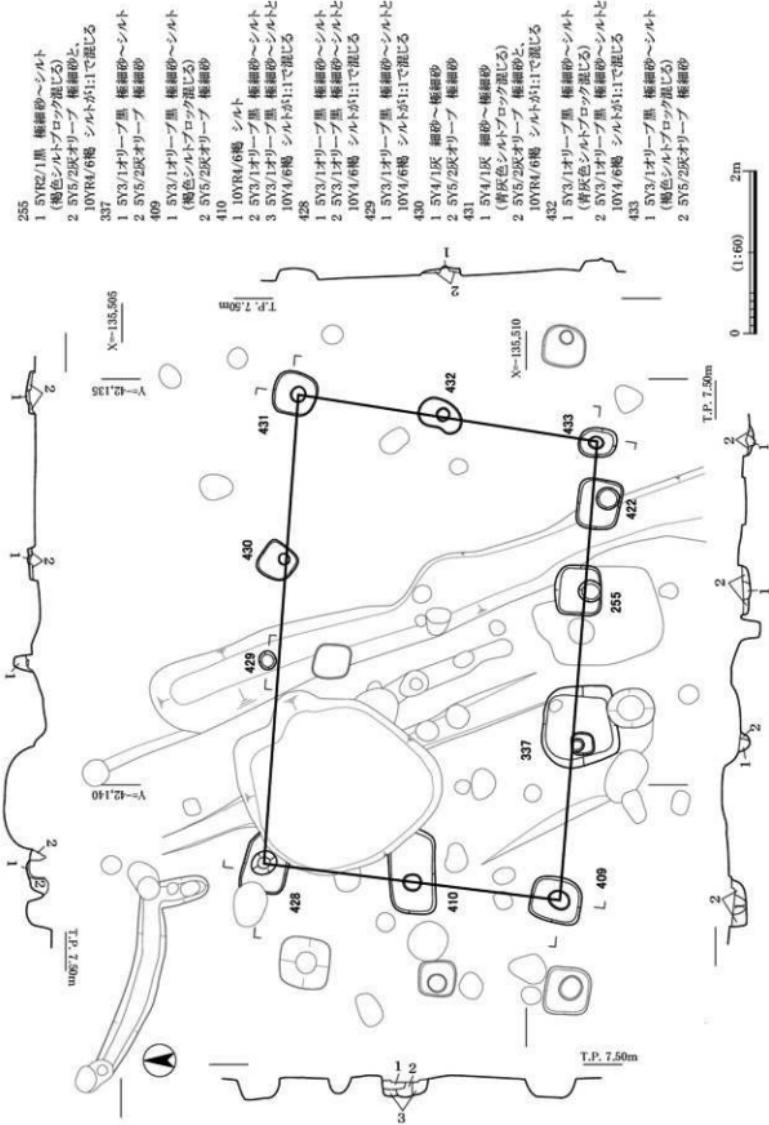


図32 掘立柱建物4平面・断面図

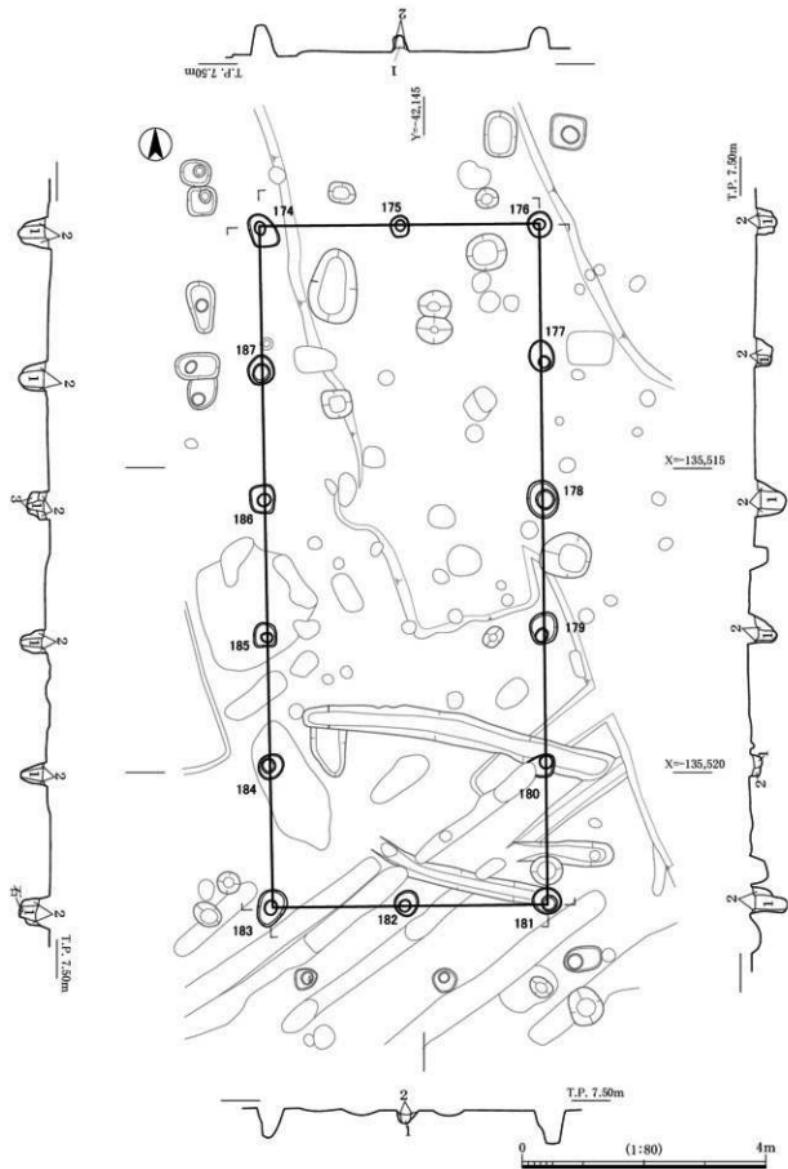


図33 掘立柱建物5平面・断面図

掘立柱建物 5 柱穴埋土 (49 頁、図 33 に対応)

- |  |   |     |                                       |
|--|---|-----|---------------------------------------|
| 174  | 1 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト                        | 181 | 1 5Y2/1黒 極細砂～シルト                      |
| 2 5Y2/1黒 極細砂～シルトと5Y8/4淡黄 シルトが1:4で混じる                         | 2 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト                        |     |                                       |
| 175  | 1 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト                        | 182 | 1 5Y2/1黒 極細砂～シルト                      |
| 2 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルトと、<br>5Y8/4淡黄 シルトと10YR4/6褐 シルトが5:2:3で混じる | 2 5Y2/1黒 極細砂～シルトと5Y8/4淡黄 シルトが1:1で混じる        |     |                                       |
| 176  | 1 5Y2/1黒 極細砂～シルトと5Y8/4淡黄 シルトが4:1で混じる        | 183 | 1 5Y2/1黒 極細砂～シルトに10YR4/6褐 シルトブロックが混じる |
| 2 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルトと10YR4/6褐 シルトが1:1で混じる                    | 2 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルトと10YR4/6褐 シルトが1:2:2で混じる |     |                                       |
| 177  | 1 10YR4/6褐 黒 極細砂                            | 184 | 1 5Y2/1黒 極細砂～シルト                      |
| 2 10VR3/1黒 黒 シルトブロックと5Y8/4淡黄 シルトが2:1で混じる                     | 2 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルトと5Y8/4淡黄 シルトが1:1で混じる    |     |                                       |
| 178  | 1 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト                        | 185 | 1 5Y2/1黒 極細砂～シルトと5Y8/4淡黄 シルトが3:7で混じる  |
| 2 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルトと5Y8/4淡黄 シルトが1:1で混じる                     | 2 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト                        |     |                                       |
| 179  | 1 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルトと5Y8/4淡黄 シルトが1:1で混じる    | 186 | 1 5Y2/1黒 極細砂～シルト                      |
| 2 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト   | 2 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルトと10YR4/6褐 シルトが1:4で混じる   |     |                                       |
| 180  | 1 10YR4/6褐 黒 極細砂～シルト                        | 187 | 1 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト                  |
| 2 2.5Y5/1灰 黑 極細砂～極細砂 (淡黄色シルトブロック混じる)                         | 2 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルトと5Y8/4淡黄 シルトが1:1で混じる    |     |                                       |

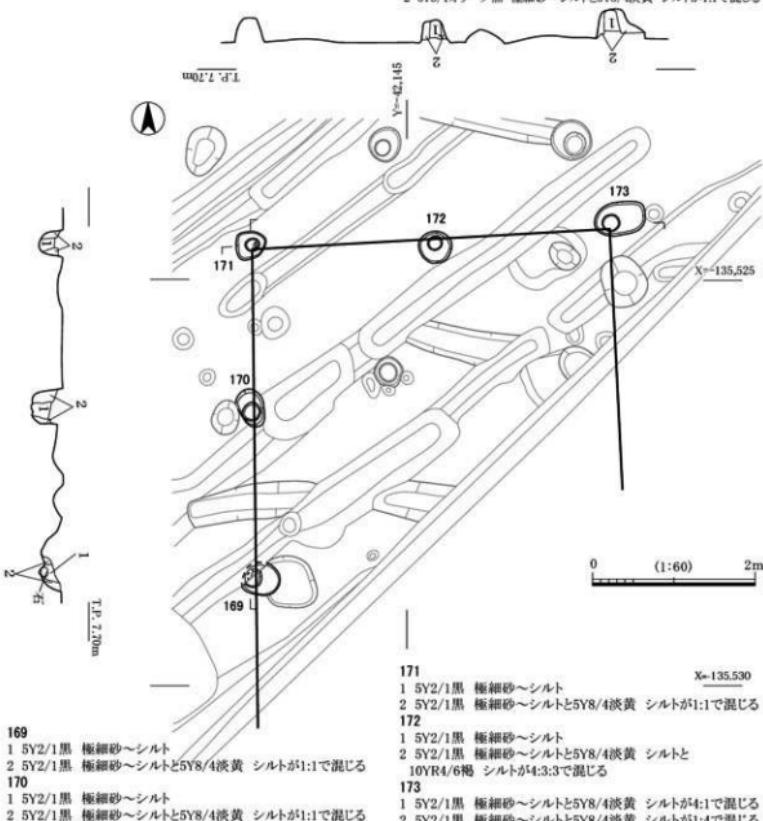


図 34 掘立柱建物 6 平面・断面図

掘立柱建物 8 柱穴埋土 (51・52 頁、図 35 に対応)

134	1 10YR2/1黒褐色 極細砂	139	1 5Y4/1灰 極細砂	144	1 10YR3/1黒褐色 極細砂
2 10YR4/4褐色 細砂		2 5Y6/1灰 極細砂～細砂		2 10YR4/4褐色 細砂	
135		140		145	
1 5Y4/1灰 極細砂	1 10YR3/1黒褐色 細砂	1 5Y4/1灰 極細砂		2 5Y6/1灰 極細砂～細砂	
2 10YR4/1褐色 極細砂～細砂	2 10YR4/4褐色 細砂	141		146	
136		142		1 10YR3/1黒褐色 極細砂	
1 10YR4/1褐色 色極細砂	1 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト	2 5Y6/2灰オリーブ 極細砂		2 10YR4/4褐色 細砂に	
2 10YR4/4褐色 細砂		143		10YR4/2淡黄色 シルトブロック混じる	
137		144		147	
1 5Y4/1灰 極細砂	1 10YR2/1黒褐色 極細砂	1 10YR2/1黒褐色 極細砂		2 10YR4/4褐色 細砂	
2 5Y6/1灰 極細砂～細砂	2 5Y6/1灰 極細砂～細砂	148			
138		149			
1 5Y4/1灰 極細砂	1 10YR2/1黒褐色 極細砂				
2 5Y6/1灰 極細砂～細砂	2 5Y6/1灰 極細砂～細砂				

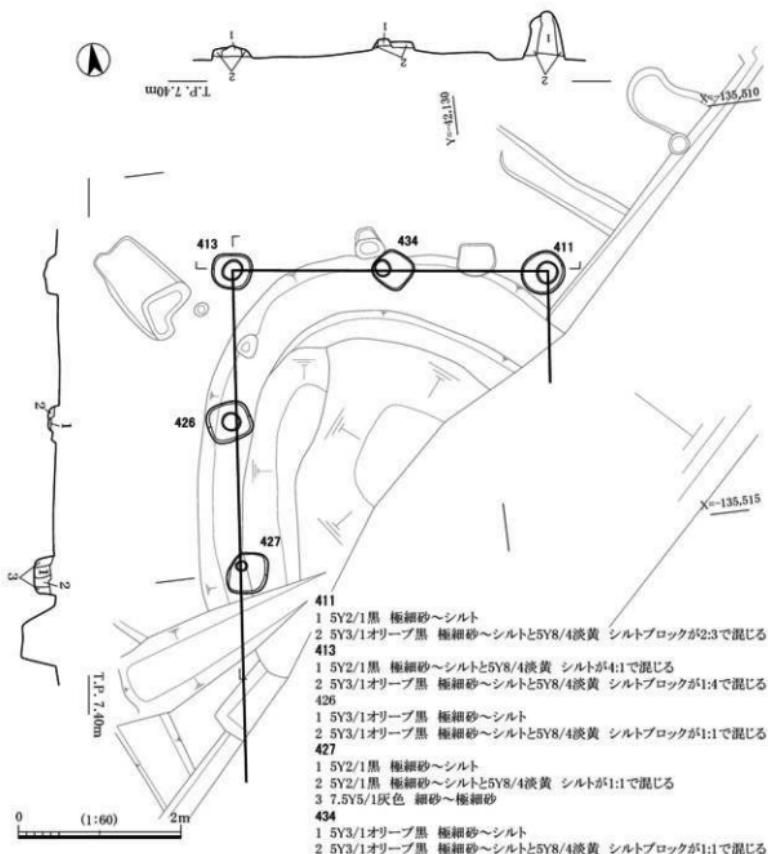
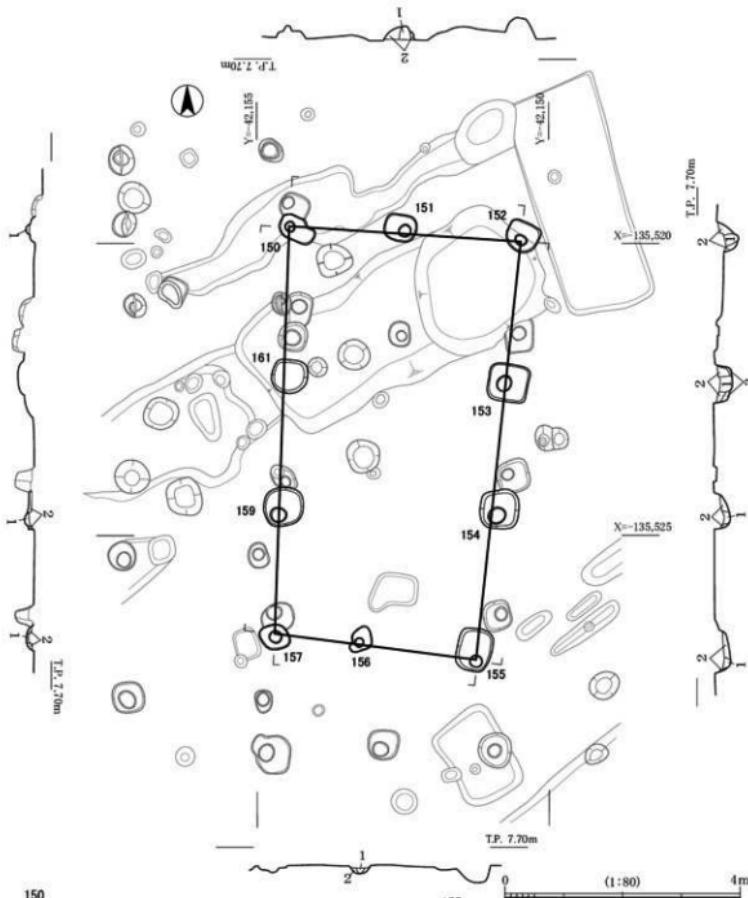


図 36 掘立柱建物 7 平面・断面図



- |     |  |  |   |
|-----|--|--|---|
| 150 | 1 5Y5/1灰 黒細砂～極細砂   | 155  | 1 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルト  |
| 151 | 1 2.5Y4/1黄灰 細砂   | 2 5Y5/2灰オリーブ 極細砂と、<br>10YR4/6褐 シルトが1:1で混じる |   |
| 152 | 2 5Y5/2灰オリーブ 極細砂と10YR4/6褐  | 156  | 1 5Y4/1灰 黒細砂～極細砂<br>2 2.5Y4/4黄褐 極細砂と、<br>5Y5/2灰オリーブ 極細砂が1:1で混じる         |
| 153 | 3 5Y5/2灰オリーブ 極細砂   | 157  | 1 5Y4/1灰 黒細砂～極細砂<br>2 2.5Y5/4黄褐 極細砂～細砂                                  |
| 154 | 4 5Y5/2灰オリーブ 極細砂   | 159  | 1 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルトと、<br>2.5Y4/2暗灰黄 極細砂～細砂が1:1で混じる<br>2 5Y5/2灰オリーブ 極細砂 |
| 155 | 5 5Y2/1灰 黒細砂～シルト   |  |   |
| 156 | 6 5Y5/2灰オリーブ 極細砂と、<br>10YR4/6褐 シルトが1:1で混じる                               |  |   |
| 157 | 7 5Y4/1灰 黒細砂～極細砂   |  |   |
| 158 | 8 2.5Y5/4黄褐 極細砂と、<br>5Y5/2灰オリーブ 極細砂が1:1で混じる                              |  |   |
| 159 | 9 5Y4/1灰 黒細砂～細砂  |  |   |
| 160 | 10 5Y3/1オリーブ黒 極細砂～シルトと、<br>2.5Y4/2暗灰黄 極細砂～細砂が1:1で混じる<br>2 5Y5/2灰オリーブ 極細砂 |  |   |

図37 据立柱建物9平面・断面図

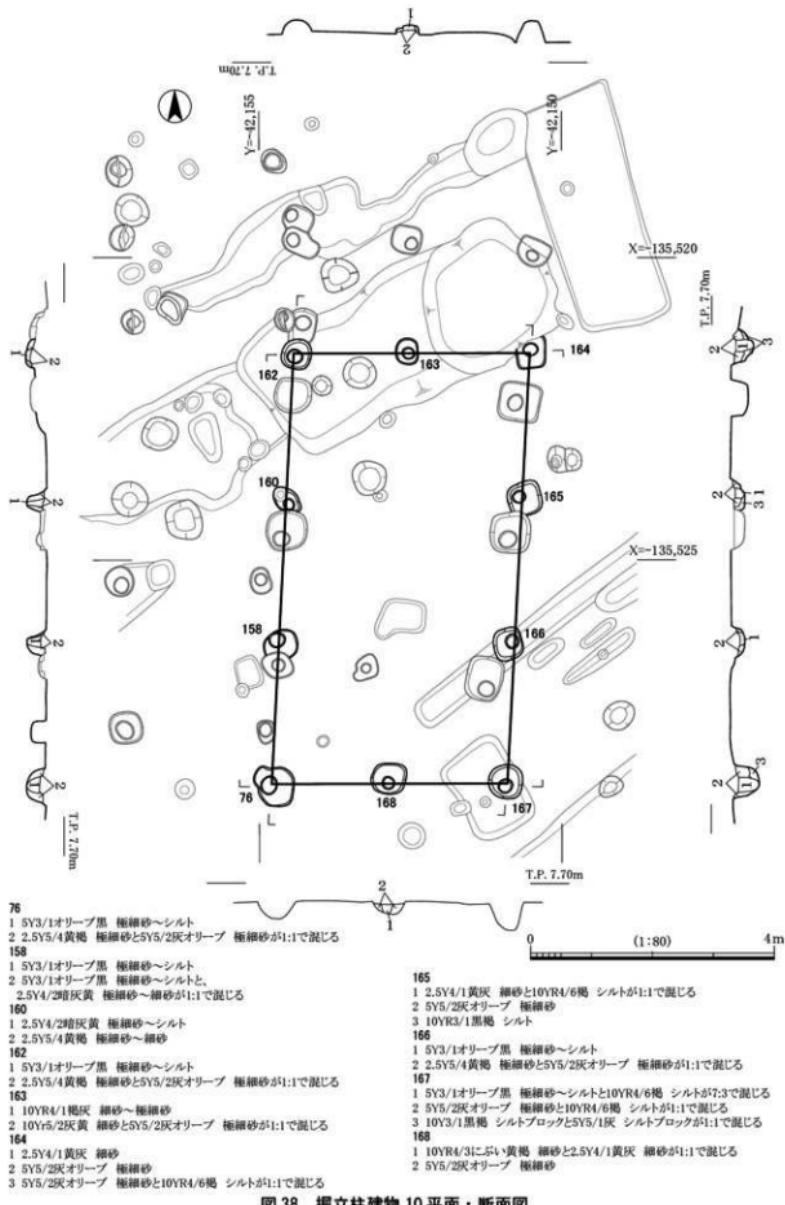
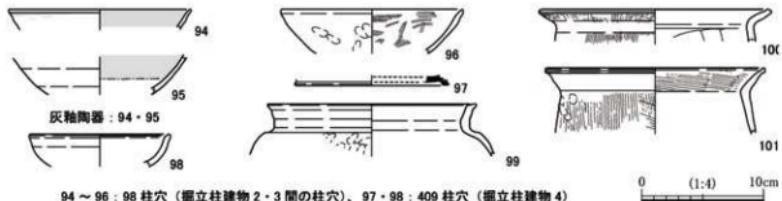


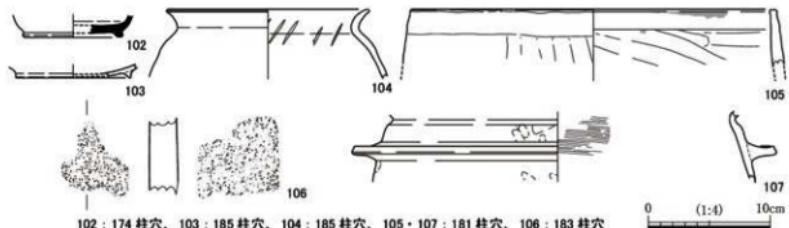
図 38 据立柱建物 10 平面・断面図



94 ~ 96 : 98 柱穴（掘立柱建物 2・3 間の柱穴）、97・98 : 409 柱穴（掘立柱建物 4）

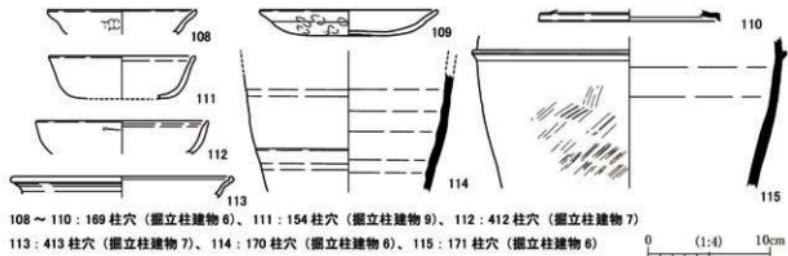
99 : 87 柱穴（掘立柱建物 2）、100・101 : 255 柱穴（掘立柱建物 4）

図 39 掘立柱建物 2・3・4、掘立柱建物 2・3 間の柱穴出土遺物



102 : 174 柱穴、103 : 185 柱穴、104 : 185 柱穴、105・107 : 181 柱穴、106 : 183 柱穴

図 40 掘立柱建物 5 出土遺物



108 ~ 110 : 169 柱穴（掘立柱建物 6）、111 : 154 柱穴（掘立柱建物 9）、112 : 412 柱穴（掘立柱建物 7）

113 : 413 柱穴（掘立柱建物 7）、114 : 170 柱穴（掘立柱建物 6）、115 : 171 柱穴（掘立柱建物 6）

図 41 掘立柱建物 6・7・9 出土遺物

器挽の体部片である。94も同じく98柱穴の柱痕跡から出土した灰釉陶器挽の口縁部片である。95の明確な時期はわからないが、94はK90窯式にあたり9世紀後半代のものである（山下1995）。96も98柱穴の柱痕跡から出土したもので、黒色土器挽の口縁部から体部の破片である。96の時期は94同様9世紀の後半にあたる。

これらの柱穴列については、掘立柱建物 2 と 3 の構造的特徴を考えるうえで極めて重要な意味を持つため、次章にてもう一度ふれる。

**掘立柱建物 4**（図32・39、図版20-5・21-1～4） 2 区の東端寄りで検出した建物である。2 区の建物群のなかでは最も北に位置している。東西方向に主軸を持ち、平面形は3間（5.6～5.7m）×2間（3.7m）の規模を有する。中央の棟桁から判断する限り、主軸は座標上の東西方向よりも南に5度ふっている。柱穴の掘方の平面形は隅丸の正方形で、一辺の長さは東側の側柱を除いて60～70cmの中におさまる。東側の側柱の柱穴は中世以降の耕作土による搅乱が著しく、検出できた掘方の大きさは一辺30～40cmである。柱痕跡の埋土は黒色の極細砂もしくはシルトに青灰色もしくは褐色のシルトブロックが混

じる。柱掘方の埋土は色調の濃い灰色のシルトに褐色のシルトブロックが混じる。なお北側の側柱のうち西から一間目のものは近世の井戸に削平された可能性が考えられるが、この側柱列から僅かに外れた位置に429柱穴があり、根石を検出している。そのため、429柱穴が掘立柱建物4の側柱になる可能性もある。

掘立柱建物4からは100と101の遺物が出土している（図39）。100・101はいずれも土師器甕の口縁部から胴部の破片である。どちらも255柱穴の掘方から出土している。

**掘立柱建物5**（図33・40、図版22・23）掘立柱建物4の南西で検出した建物である。南北方向に主軸を持ち、平面形は5間（11.3m）×2間（4.6m）の規模を有する。中央の棟桁から判断する限り、主軸は座標上の南北方向よりも東に2度ふっている。柱穴の掘方は174・185・186柱穴が隅丸の方形で、残りはすべて円形もしくは梢円形である。一辺の長さもしくは直径は40～50cmの中におさまる。柱痕跡の埋土は黒色の極細砂もしくはシルトに青灰色もしくは褐色のシルトブロックが混じる。柱掘方の埋土は柱痕跡よりも色調の薄い黒色のシルトに褐色のシルトブロックが混じる。183柱穴の底部で根石と想定される石の一部を検出している。

掘立柱建物5の柱穴からは、須恵器片・土師器片・瓦片などが出土している（図40）。ある程度時期が確定できるのは以下の5点である。102は須恵器杯身の底部片で、174柱穴の掘方から出土している。103は内面黒色土器の底部片で、185柱穴の掘方から出土している。104は土師器甕の口縁部から胴部片で、182柱穴の掘方から出土している。105は土師器甕の口縁部片で181柱穴の掘方から出土している。106は平瓦の破片で、183柱穴の掘方から出土している。107土師器羽釜の鉢の部分で、181柱穴の掘方から出土している。102と104は8世紀代に、107と103は9世紀代に、なかでも103は9世紀後半に位置づけられる。

**掘立柱建物6**（図34・41、図版22-1、図版24-1～4・40）掘立柱建物5の南で検出した建物である。南北方向に主軸を持つと推測され、平面形は3間（5.49m）以上×2間（4.55m）の規模を有する。173柱穴の柱痕跡の深さが北西隅柱の171柱穴と同様の深さであることから、北東の隅柱と推定し梁間を2間とした。建物の大半が南側の調査区外にあたるため規模の全容は不明である。西側の側柱列から判断する限り、主軸は座標上の南北方向よりも東に2度ふっている。柱穴の掘方は隅丸の長方形もしくは円形で、一辺の長さもしくは直径は40～50cmの中におさまる。柱痕跡の埋土は総じて黒色のシルトで、柱掘方の埋土は柱痕跡よりも色調の薄い黒色のシルトに淡黄色のシルトブロックが混じる。169柱穴と171柱穴において、根石と想定される石の一部を検出している。

掘立柱建物6の柱穴からは、須恵器片・土師器片が出土している（図41）。ある程度時期の判明しているものは以下の5点である。108・109（図版40）は土師器皿の口縁部片、110は須恵器杯蓋の口縁部片、いずれも169柱穴の柱抜き取り痕跡から出土した。108・109はともに9世紀末から10世紀初頭のものである。110の厳密な時期は不詳で、8世紀後半から9世紀代のものか。114は須恵器壺の胴部片で170柱穴の掘方から出土した。9世紀中ごろから10世紀のもの。115は須恵器壺で胴部に突帶を有する。171柱穴の柱抜き取り痕跡から出土した。厳密な時期は不詳だが、9世紀中頃から10世紀代のものと考えられる。115はあまり出土をみないものだが、類例として薬師寺西僧房出土の壺が挙げられる（木村2010）。

**掘立柱建物7**（図36・41、図版20-5・図版21-5～8）掘立柱建物4の南東で検出した建物である。南北方向に主軸を持ち、平面形は3間（5.7m）以上×2間（3.9m）の規模を有する。411柱穴の柱痕跡の深さが、他の柱穴のどれよりも深いため、北東の隅柱になると推定し梁間を2間とした。柱穴の大

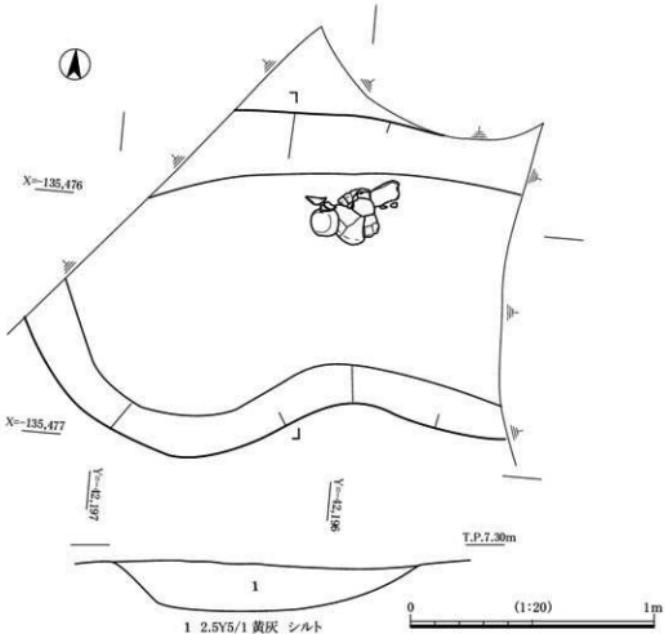


図42 515土坑平面・断面図

半が中世の244井戸による削平を受けており、残存する埋土は浅い。西側の側柱列から判断する限り、主軸は座標上の南北方向よりも東に5度ふっている。柱穴の掘方の掘方の平面形は隅丸の長方形もしくは円形で、一辺の長さないし直径は50cm前後である。柱痕跡の埋土は総じて黒色のシルトないしは極細砂で、柱掘方の埋土は柱痕跡よりも色調の薄い黒色のシルトに淡黄色のシルトブロックが混じる。

掘立柱建物7からは112・113の遺物が出土している(図41)。112は土師器杯の口縁部片で412柱穴の柱痕跡からの出土、113も土師器杯の口縁部片で413の柱穴の柱痕跡から出土している。いずれも8世紀後半のもので掘方から出土している。

掘立柱建物8(図35、図版24-5~8・25-1~4) 掘立柱建物3の東側部分と重複する位置で検出された建物である。南北方向に主軸を持ち、平面形は5間(9.7m)×2間(4.4m)の規模を有する。中央の棟桁から判断する限り、主軸は座標上の南北方向よりも東に5度ふっている。この建物の東側柱の南端は掘立柱建物3の東側柱の南端と重なり合う。柱穴の掘方は隅丸の正方形で、一辺の長さもしくは直径は40~60cmの中におさまる。柱痕跡の埋土は黒色系の極細砂と灰色系の極細砂の2種類に分かれ。柱掘方の埋土は灰色もしくは褐灰色の極細砂である。135柱穴において、根石と想定される石の一部を検出している。掘立柱建物8は先述の掘立柱建物3、後述する掘立柱建物9・10と重なるが、柱穴の重複関係から見る限り重なり合うすべての建物の中で最も古い。

柱穴からの出土遺物は少なく、土師器や須恵器の小片のみであった。

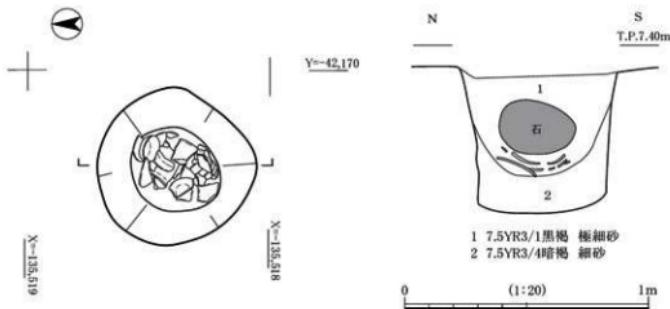


図43 208 土坑平面・断面図

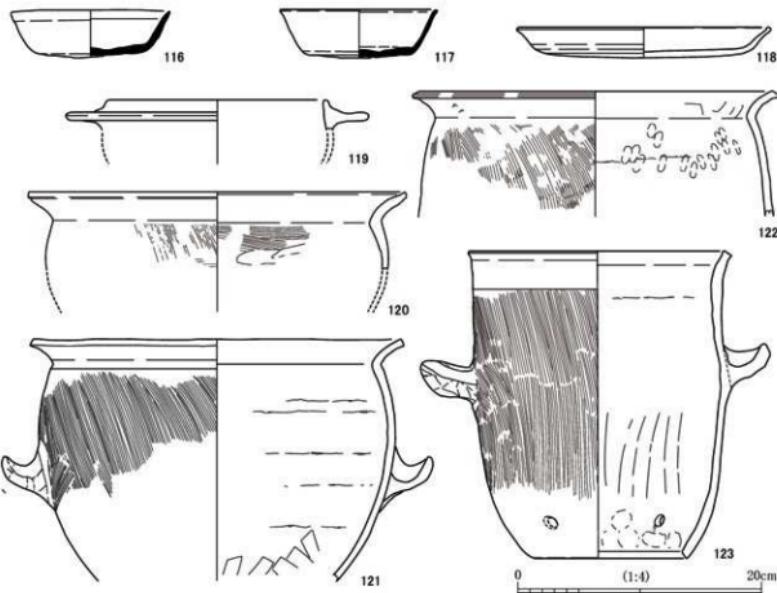
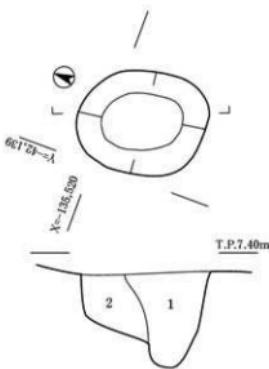


図44 208 土坑出土遺物

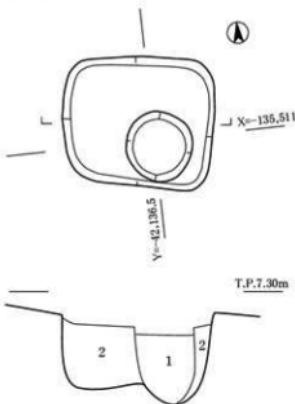
掘立柱建物9（図37・41、図版25-5～8・図版26-1・2）掘立柱建物2・3の東側で検出された建物である。南北方向に主軸を持ち、平面形は3間（7.1～7.2m）×2間（3.5～3.9m）の規模を有する。この建物は掘立柱建物2・3・8・10と重なる。中央の棟桁から判断する限り、主軸は座標上の南北方向よりも東に4度ふっている。柱穴の掘方の平面形は隅丸の正方形で、一边の長さもしくは直径は40～60cmの中におさまる。柱痕跡の埋土は黒色系の極細砂もしくはシルトで、柱掘方の埋土は灰オリーブ色もしくは黄褐色の極細砂である。南西隅柱の157柱穴が、後述する掘立柱建物10の西側柱である158

397 土坑



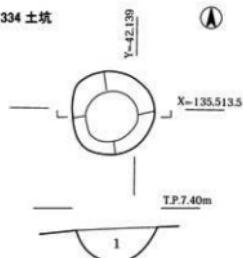
1 7.5YR2/1 黒 極細砂（炭化物、土器片混）  
2 7.5YR1/1 暗灰 極細砂ブロックと、  
淡黄色シルトブロックが 1:1 で混じる

422 土坑



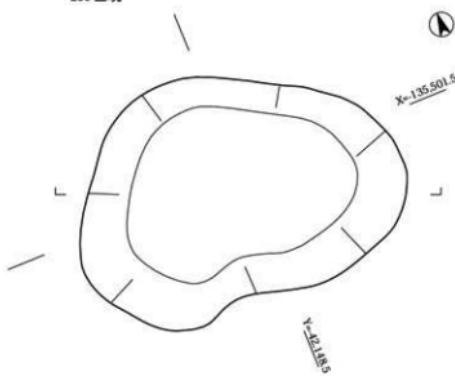
1 10YR2/1 黒 細砂  
2 10YR4/2 斑状暗灰 極細砂

334 土坑



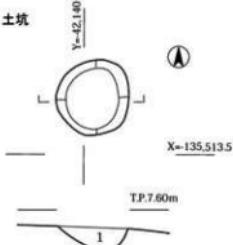
1 10YR3/1 黒褐色 極細砂ブロックと、  
2.5GY7/1 明オリーブ灰 シルトブロック  
が 1:1 で混じる

230 土坑



1 2.5Y3/2 黒褐色 細砂  
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 細砂（炭化物混）  
3 2.5Y3/1 黒褐色 細砂（炭化物混）

335 土坑



1 10YR3/1 黒褐色 極細砂ブロックと、  
2.5GY7/1 明オリーブ灰 シルトブロックが 1:1 で混じる

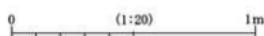


図 45 230・397・422・334・335 土坑平面・断面図

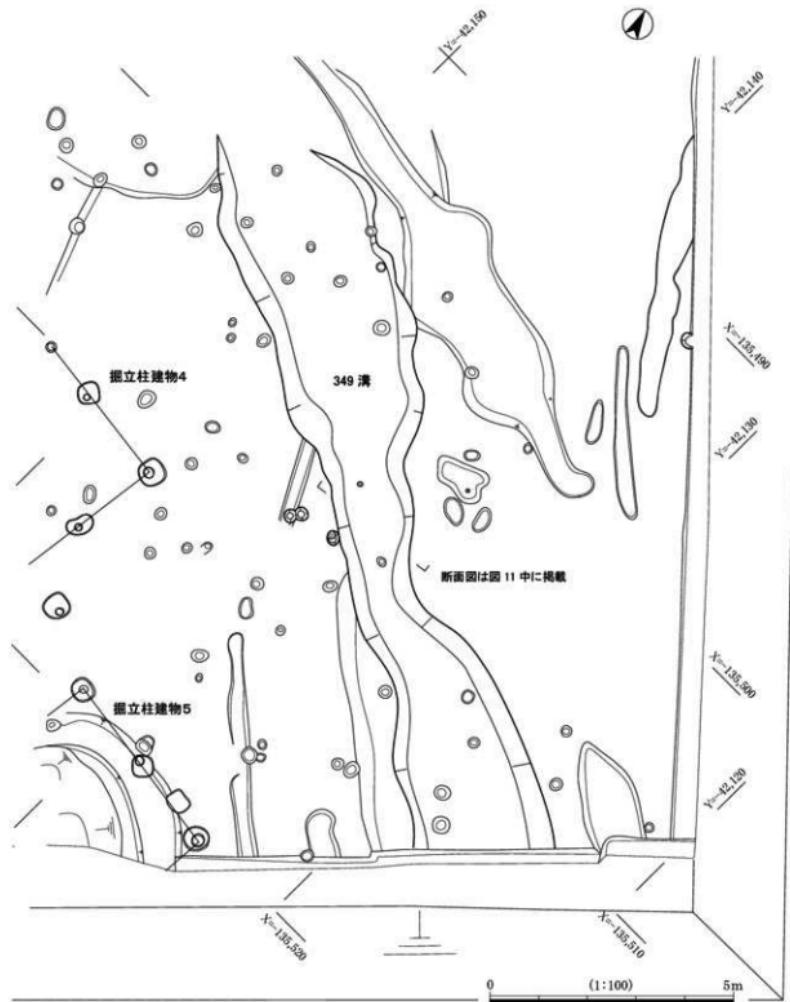


図 46 349 潟平面図 (断面図は図 11)

柱穴の一部を切り込んでいることから、掘立柱建物10が先行し掘立柱建物9は後出することがわかる。

掘立柱建物9からは11が出土している(図41)。111は154柱穴掘方から出土した土師器器杯の口縁部から体部にかけての破片である。8世紀中頃のものと考えられる。

掘立柱建物10(図38、図版26-1~4) 掘立柱建物9とほぼ重なる位置で検出された建物。掘立柱建物9を一間分南にずらした位置で検出した。平面形は3間(7.1~7.2m)×2間(3.8~3.9m)の規模

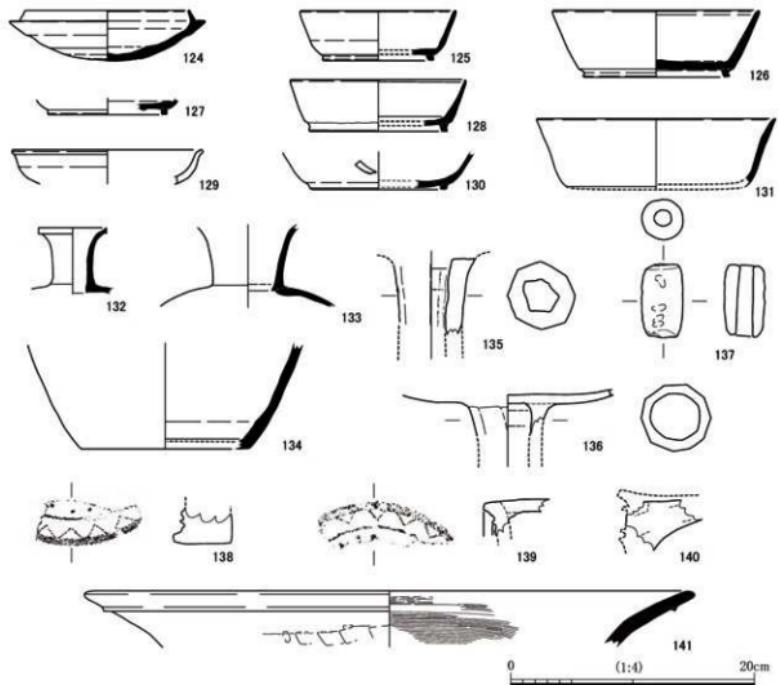


図47 349溝出土遺物

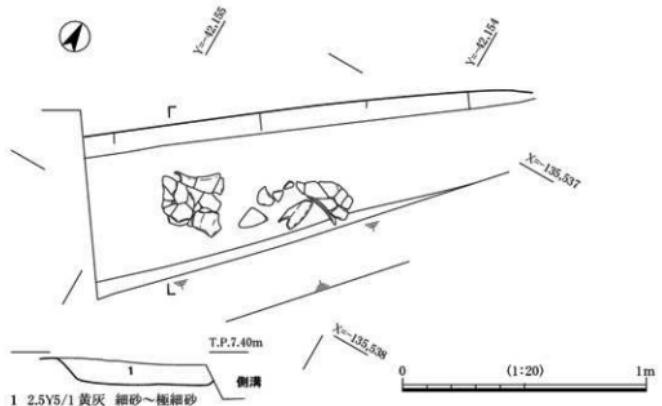
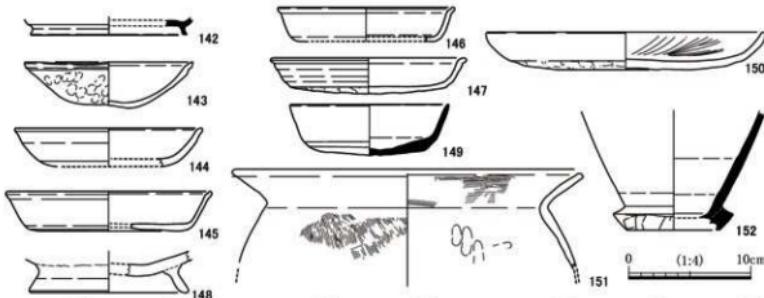


図48 441溝平面・断面図



142 : 230 土坑、143 : 397 土坑、144 ~ 147 : 422 土坑、148 : 335 土坑、149 ~ 150 : 515 土坑、151 : 441 清、152 : 334 土坑

図49 その他の古代遺構出土遺物

を有する。この建物の西側柱の北端は掘立柱建物8の東側柱の南端と重なり合う。中央の棟桁から判断する限り、主軸は座標上の南北方向よりも東に5度ふっている。柱穴の掘方の平面形は隅丸の正方形で、一辺の長さもしくは直径は30~60cmの中におさまる。柱痕跡の埋土は黒色系の極細砂もしくはシルトで、柱掘方の埋土は灰色系もしくは黄褐色系の極細砂である。159柱穴（掘立柱建物9）と160柱穴（掘立柱建物10）、154柱穴（掘立柱建物10）と165（掘立柱建物9）の重複関係から掘立柱建物9は先行するといえる。平面および柱穴の規模が掘立柱建物9と似通うことから、掘立柱建物9は掘立柱建物10を何らかの理由で建て替えたものと推測される。さらに141柱穴（掘立柱建物8）と162柱穴（掘立柱建物10）の重複関係から、掘立柱建物8が先行し掘立柱建物10は後出することがわかる。

柱穴からの出土遺物は少なく、土師器や須恵器の小片のみであった。

以上の掘立柱建物の造営年代とその変遷については次章で詳しく述べる。

### ③ 1区その他の遺構

**515土坑**（図42・49、図版28-3・40）1区の北端で検出した土坑。515土坑の周囲は、後述するよう古墳時代後期から古代初頭の土坑群が密集しているが、この土坑から出土した遺物はすべて奈良時代のものであるため、古代の遺構として扱った。

515土坑からは149（図版40）と150（図版40）の遺物が出土している（図49）。149は須恵器杯の口縁部から底部までが残る破片、150は土師器皿の口縁部から底部までが残る破片である。いずれも8世紀後半のものである。

### ④ 2区その他の遺構

**208土坑**（図30・43・44、巻頭カラー2-1、図版26-6・38・39）掘立柱建物3の南側柱列の延長上に位置する土坑。建物3の南西隅柱である105柱穴から側柱列を西に延長した位置で検出した。208土坑に柱痕跡はなく、土坑の中心から105柱穴の柱痕跡の中心までの距離は2.0mである。土坑の埋土は黒褐色極細砂の上層と暗褐色細砂の下層に分かれるが、下層の直上に須恵器や土師器の供膳具・煮炊具を投棄したのち、その上に一抱えほどの石を投げ込んだうえで、上層の埋土で埋め戻している。上層の埋土は掘立柱建物2・3の柱の掘方埋土と、色調や粒径がほぼ同じであった。なお投げ込まれた石は脆弱な砂岩であったため、調査で取り上げた段階で崩れてしまった。

208土坑からは116~123の遺物が出土している（図44）。116（図版39）・117（図版39）は須恵器の杯身、

118（図版39）は土師器の皿、119は土師器の羽釜、120・121（図版38）は土師器の鍋、122は土師器の甕、123（図版38）は土師器の把手付の瓶である。いずれも8世紀末から9世紀初頭に位置づけることができる。

208土坑はその位置から、南側柱との配置関係を意識して掘られたものと考えられる。また土坑の埋土は、掘立柱建物2・3の柱穴の埋土と似通うことから、これらの建物柱穴と同じ時期、すなわち掘立柱建物2・3の建設時に掘られて、埋められた可能性が考えられる。この土坑の性格については掘立柱建物2・3の建造時期とかかるため次章で詳論する。

230土坑（図45・49、図版26-7）掘立柱建物4の北西側で検出した土坑。平面形は不整形な梢円形で、埋土は黒褐色の細砂とオリーブ褐色の細砂である。

230土坑からは142の須恵器杯身が出土している（図49）。8世紀末から9世紀初頭のものである。

334土坑（図45・49）掘立柱建物4の南側で検出した土坑。平面形は円形で、埋土は黒褐色の極細砂とオリーブ灰色のシルトがブロック状に混じり合っている。

334土坑からは152の須恵器の鉢底部から胴部にかけての破片が出土している（図49）。8世紀後半のものである。

335土坑（図45・49）334土坑の西に隣接する土坑。334土坑同様、平面形は円形で、埋土は黒褐色の極細砂と明オリーブ灰色のシルトがブロック状に混じり合っている。

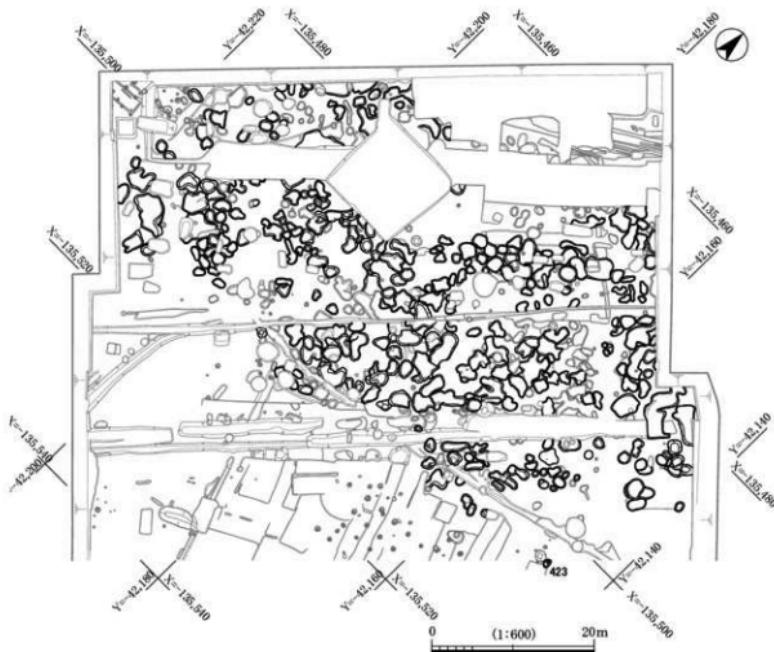


図50 群集土坑全体配置図

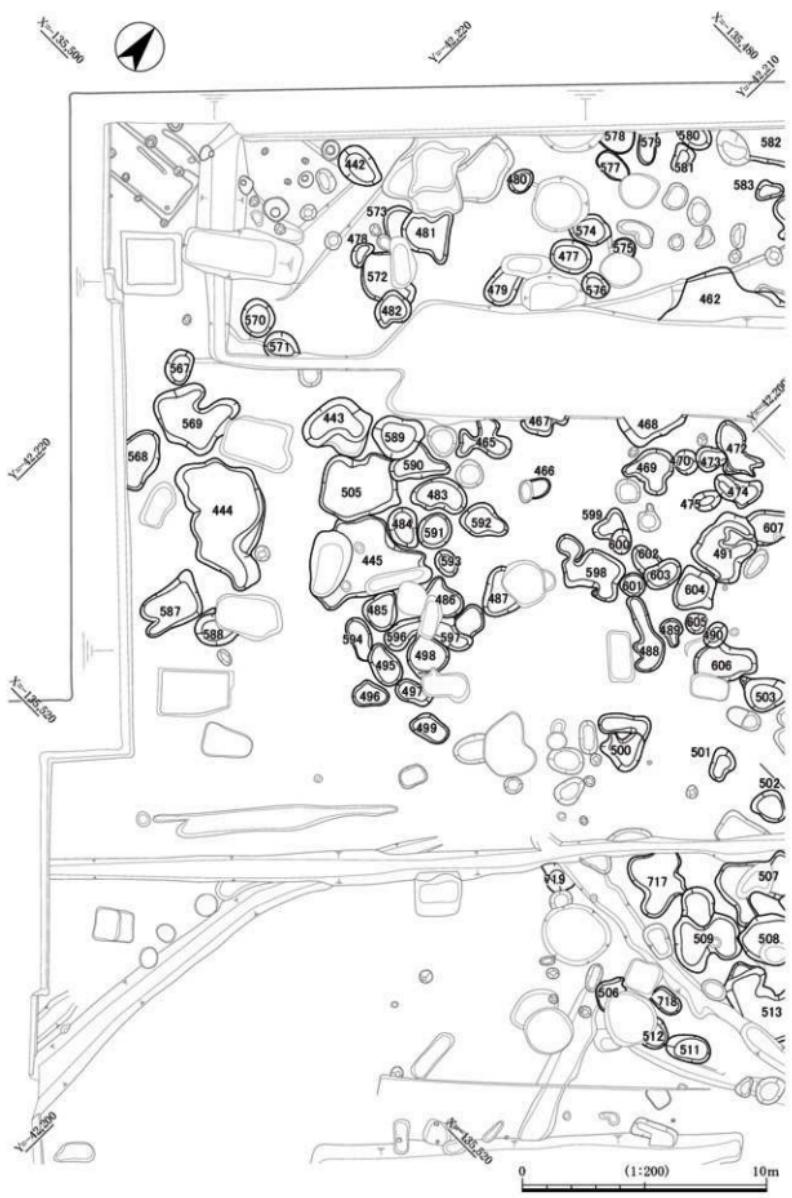


図51 群集土坑遺構配置図1

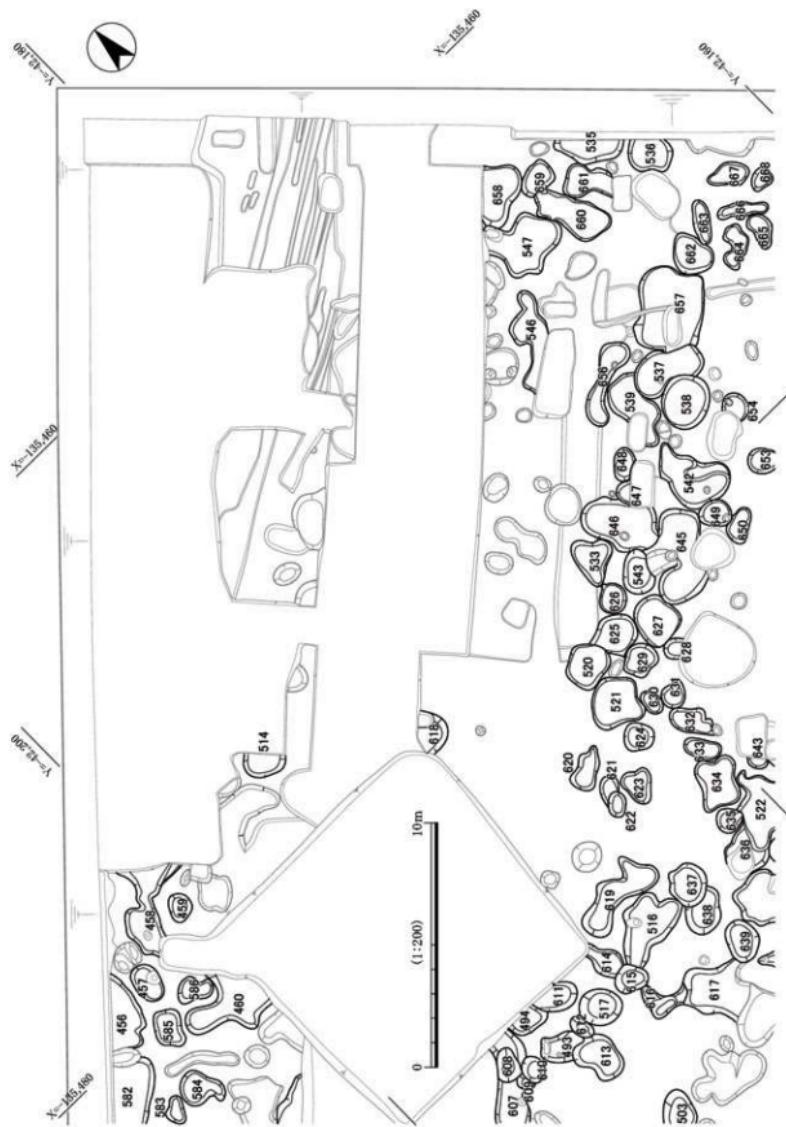


図 52 群集土坑遺構配置図 2



図 53 群集土坑遺構配置図 3

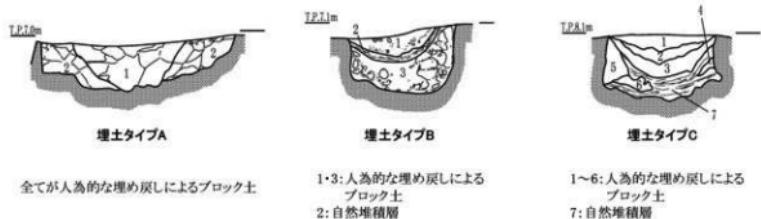


図54 群集土坑断面分類図

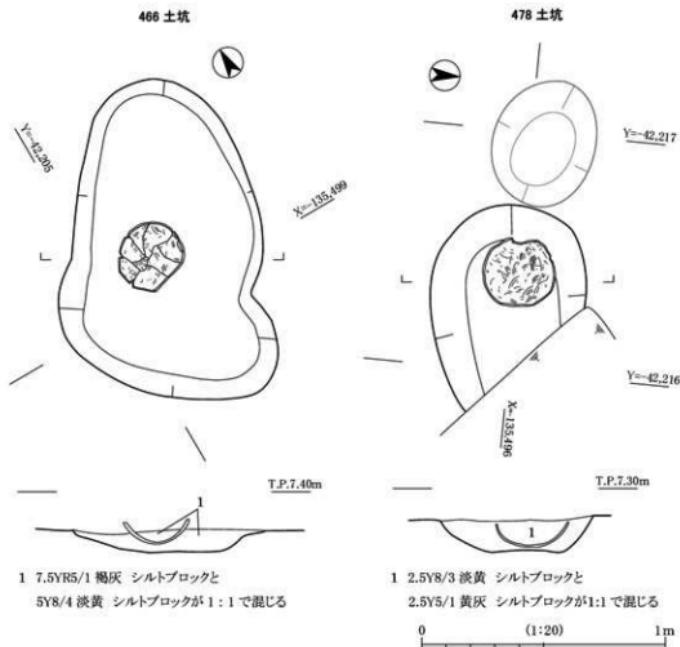


図55 466・478 土坑平面・断面図

335土坑からは148の土師器盤もしくは鉢が出土している(図49)。盤または鉢の高台片で、外面に赤彩がみられる。9世紀中ごろから後半にかけてのものか。

397土坑(図45・49) 掘立柱建物5の東側で検出した土坑。平面形は円形で柱痕跡を有する。柱痕跡の埋土は黒色の極細砂で、柱掘方の埋土は暗灰色の極細砂と黄色系のシルトがブロック状に混じる。調査区の外側(南)に展開する掘立柱建物の隅柱の可能性がある。

397土坑からは143(図版40)の土師器椀が出土している(図49)。10世紀前半のものと考えられる。

422土坑(図45・49) 掘立柱建物4の南側柱列のなかで検出した土坑。平面形は隅丸方形で柱痕跡を有

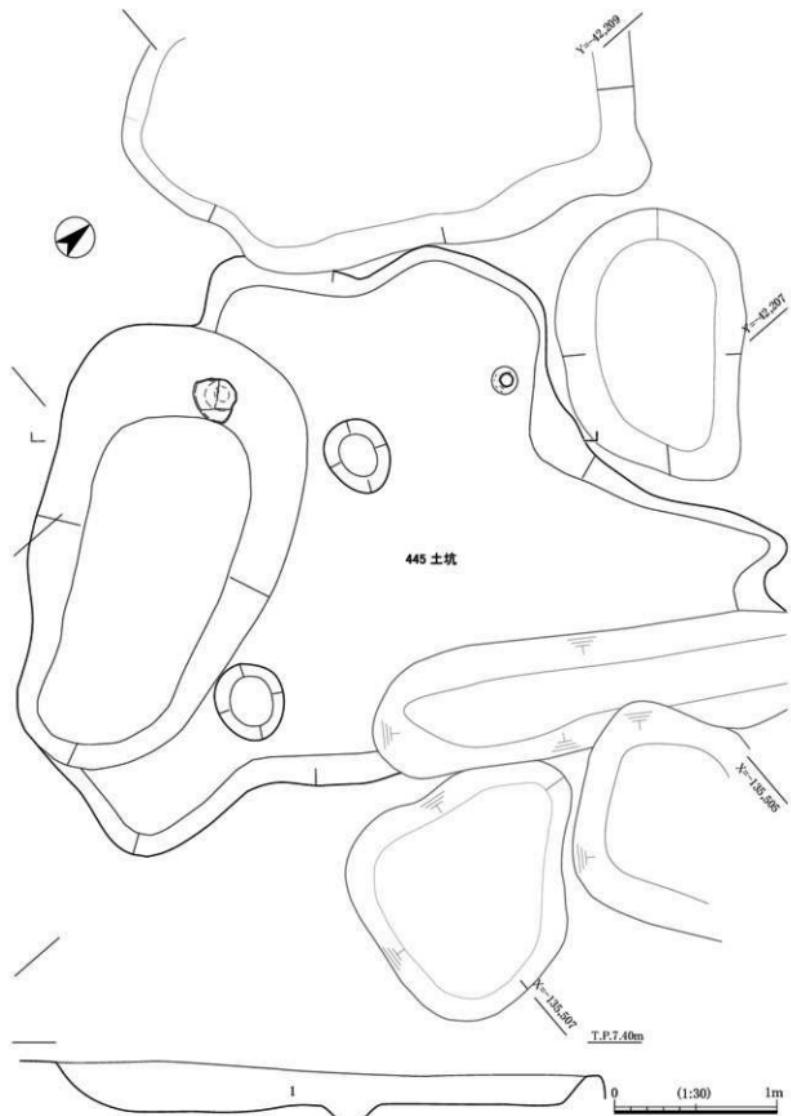


図 56 445 土坑平面・断面図

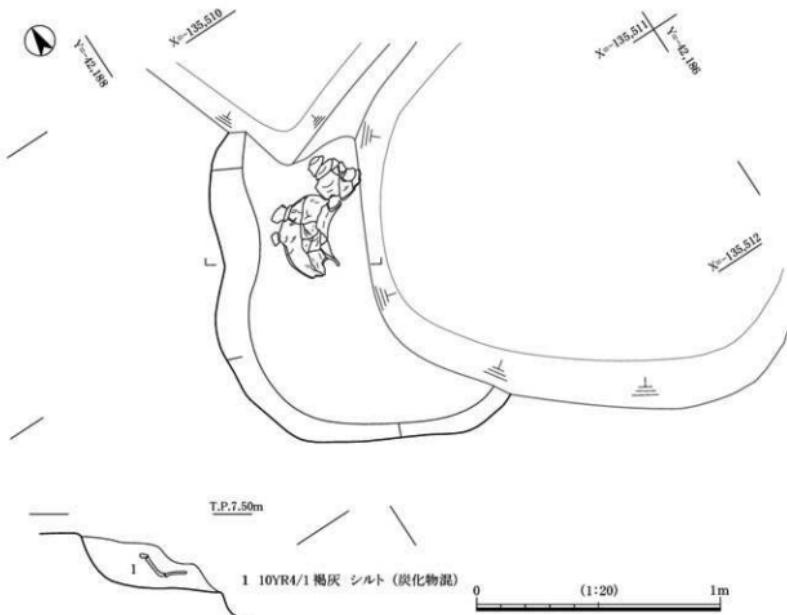


図57 506 土坑平面・断面図

する。柱痕跡の埋土は黒色の細砂で、柱掘方の埋土は灰黄褐色の極細砂である。柱痕跡を有するものの、掘立柱建物4の側柱としては不自然な位置にあるため、建物とは別の時期・機能を持つと考えられる。

422土坑の掘方からは144～147の土器が出土している（図49）。いずれも土師器の杯で、口縁から底部にかけての破片である。8世紀中頃のものである。

349溝（図11・46・47、図版28-1・37） 掘立柱建物4と7の北側で検出した溝。溝内から出土した土器から、上記の掘立柱建物と同じ時期に機能していたと考えられる。もともと建物群の周辺を巡っていたと推測されるが、その位置が上述の9溝（中世）と重なるため、9溝削削時にそのほとんどが削平されたと考えられる。今回検出できたのは、旧地形が低地にあたる場所で、溝の底の部分がかろうじて残存したものといえる。

349溝からは124～141の遺物が出土している（図47）。124（図版39）・125・126（図版39）・127・128（図版39）・130・131は須恵器杯身の口縁部から底部片であるが、124は7世紀中頃のもので、125～128・130・131は8世紀末～9世紀のもの、129は土師器杯身の口縁部片、132・133は須恵器壺の口縁部から胴部片、134は須恵器壺の胴部から底部片、135・136は土師器高杯の脚部片、137（図版39）は完形の土錘、138（図版39）・139（図版39）は軒丸瓦の外区部分と外縁部分の破片で七尾瓦窯で生産された後期難波宮所用軒丸瓦、140も軒丸瓦の外区部分であるが文様部分はない。141は須恵器壺の口縁部片である。

上記のうち124の須恵器杯身と141の須恵器壺を除くと、出土遺物の時期は8世紀中頃（125・138・139）から9世紀中頃（130）までに集中している。これはおそらく、掘立柱建物群の存続時期と関わつ

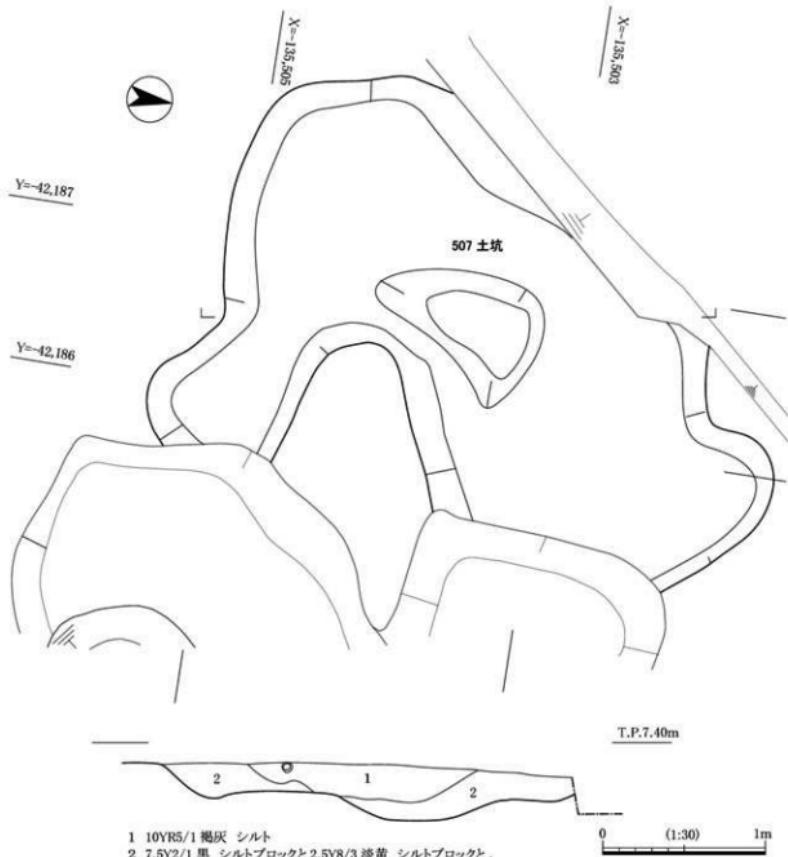


図58 507 土坑平面・断面図

てくるのだろう。

441溝（図48・49、図版28-2）掘立柱建物1と2の間で検出した溝。掘立柱建物1ないしは2の存続時に掘られた溝と考えられるが、方向的に建物の向きとは合わない。ただし溝を検出したのは一部分で、そのほとんどが調査区外に出るため、調査区外では建物の向きと合う可能性も考えられる。

441溝からは151の遺物が出土している（図49）。151は土師器の甕の口縁部から胴部片である。

### （3）古墳時代～古代初頭（図50～53、図版2-1・2、図版29・30）

調査地周辺の発掘調査では古墳時代から古代にかけての土坑群が数多く検出されている。今回の調査でも、同時期の土坑群を検出した。図50～53は、今回の調査で検出した土坑の配置図である。検出した

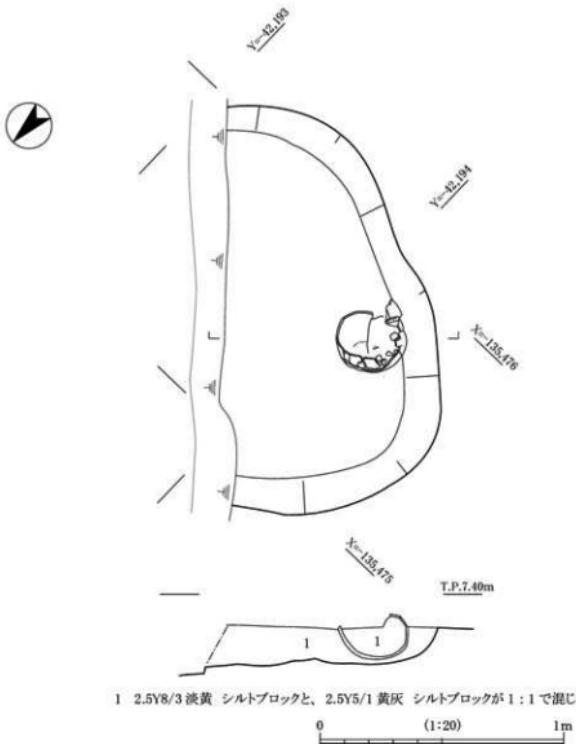


図 59 514 土坑平面・断面図

土坑のすべてに番号を付与したところ、総計で288基にのぼった（表3～8）。

群集土坑の性格等に関するこれまでの検討結果は、当センター既刊の『吹田操車場遺跡Ⅲ』（センター2008）第V章に詳細に述べられているので本書では省略する。2008（平成20）年以降に実施した調査は同報告書を参考としており、吹田操車場遺跡における同種の土坑についてはすべて群集土坑と呼称している。今回の調査についても、これまでに倣って群集土坑として取り扱うものとし、各個の遺構名については他と同様に通し番号—土坑（例：545土坑）の組み合わせとしている。

群集土坑の埋土については、前述の『吹田操車場遺跡Ⅲ』（センター2008）、『吹田操車場遺跡10・明和池遺跡3』（センター2014）、『吹田操車場遺跡12』（センター2016）でそれぞれ検討されたとおり、混合土（ブロック土）と自然堆積土の組み合わせにより構成される。個々の報告で内容は若干異なるものの、『吹田操車場遺跡Ⅲ』ではa～d、『吹田操車場遺跡10・明和池遺跡3』ではA～Dのいずれも4つのタイプに、『吹田操車場遺跡12』ではA～Cの3つに分類されている（図54）。今回の調査では『吹田操車場遺跡12』と同じ図54のようなA～Cの3つに分類し、現地において記録を実施した。Aタイプは

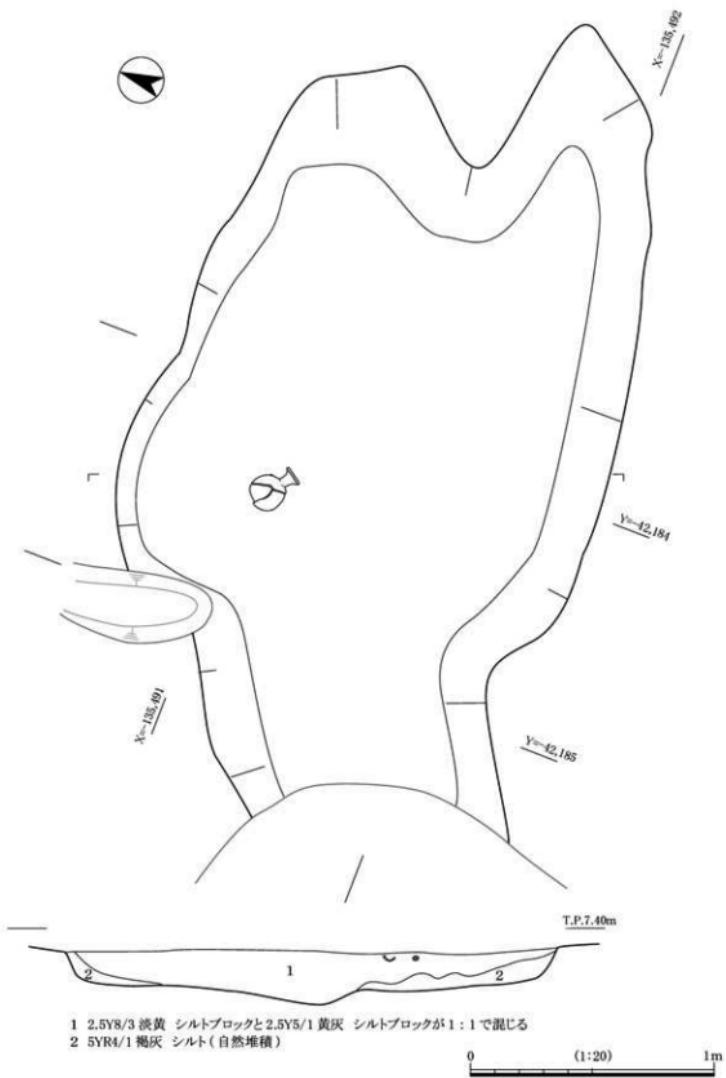


図 60 516 土坑平面・断面図

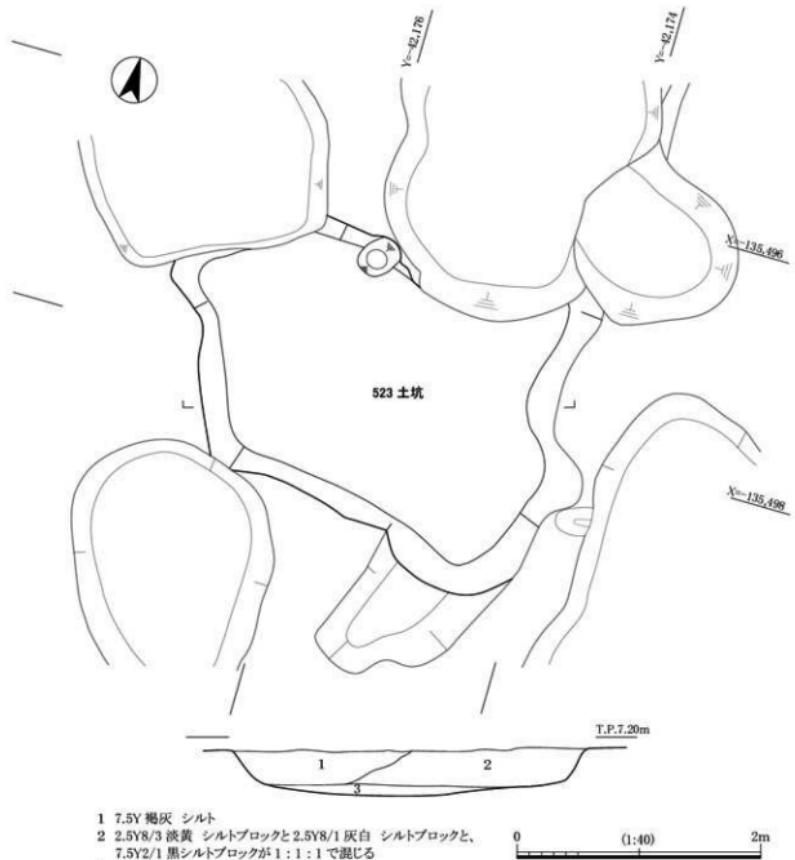


図 61 523 土坑平面・断面図

埋土がブロック土のみで構成されるもの、Bタイプは埋土の中位や上位に自然堆積層が認められるもの、Cタイプは底部に自然堆積層が認められるものとする。これらの違いは土坑の開削から埋没に至る過程に起因すると考えられる。Aは人為的に短期間のうちに完全に埋め戻されたもの（典型例は477土坑、図版34-1）。Bは土坑の半分程度が埋め戻され、その後放置期間があり、そこに流水土砂が堆積し、その後さらに埋め戻されたもの（典型例は422土坑、図版34-2）。もしくは、3分の2程度が埋め戻されたが、埋土の収縮によって陥没した場所へ流水土砂が堆積したもの（典型例は524土坑、図版34-6）。Cは埋戻しがまったく行われずに放置され、流水土砂がある程度堆積しその後埋め戻されたもの（典型例は523土坑、図60）と考えられる。ただしこれら3つの類型は各々が連動した結果分かれたものと想定される。一般的にはこれらの群集土坑は、粘土探掘土坑と理解されている。この場合、掘削した場所の土

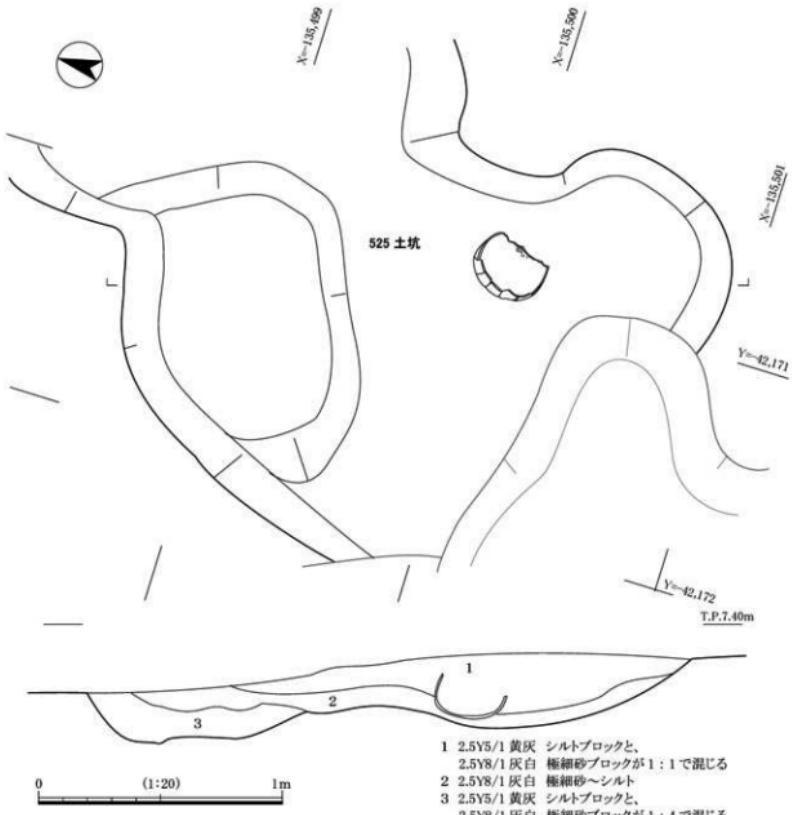


図 62 525 土坑平面・断面図

の一部はまったく違う場所に移動するため、掘削した穴を埋め戻すには土量の絶対量が足りない。そこで必然的に、不足量を補うために近辺の地面を掘り返す必要がある。すなわち、Aタイプのように土坑全体がブロック土で満たされている場合、埋め戻し土を確保するために新たに掘られた土坑、もしくは粘土採掘のために掘られたが、埋め戻されなかった土坑が近接することになる。これらの土坑が長期間放置され、雨水などがたまつた状態が続くとCタイプの土坑がうまれることになる。またAタイプのように全体を埋め戻すつもりが、できなかった場合にBタイプがうまれることになる。もちろんこれ以外のタイプの形成過程もあるはずだが、結論から言えばA・B・Cタイプはいずれも同じ目的を持って掘削された土坑であり、単に埋没過程が異なるだけである。

ただし、以下に個別に述べるように遺物が出土した土坑についてはある程度の傾向があるようと思われる。それは遺物の混入がみられるほとんどの土坑がAタイプであるということである。今回の調査では前述したとおり、288基の土坑を検出した、このうち遺物を含んでいた土坑は16基で、さらにタイ

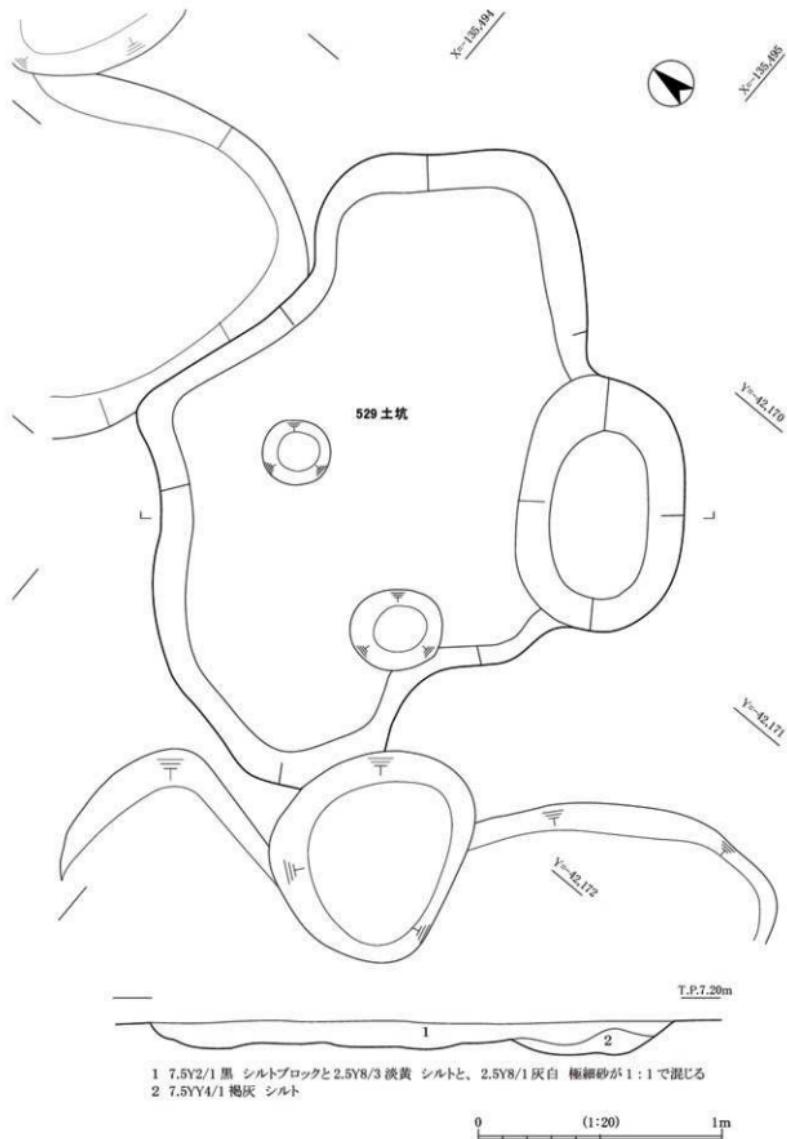


図 63 529 土坑平面・断面図

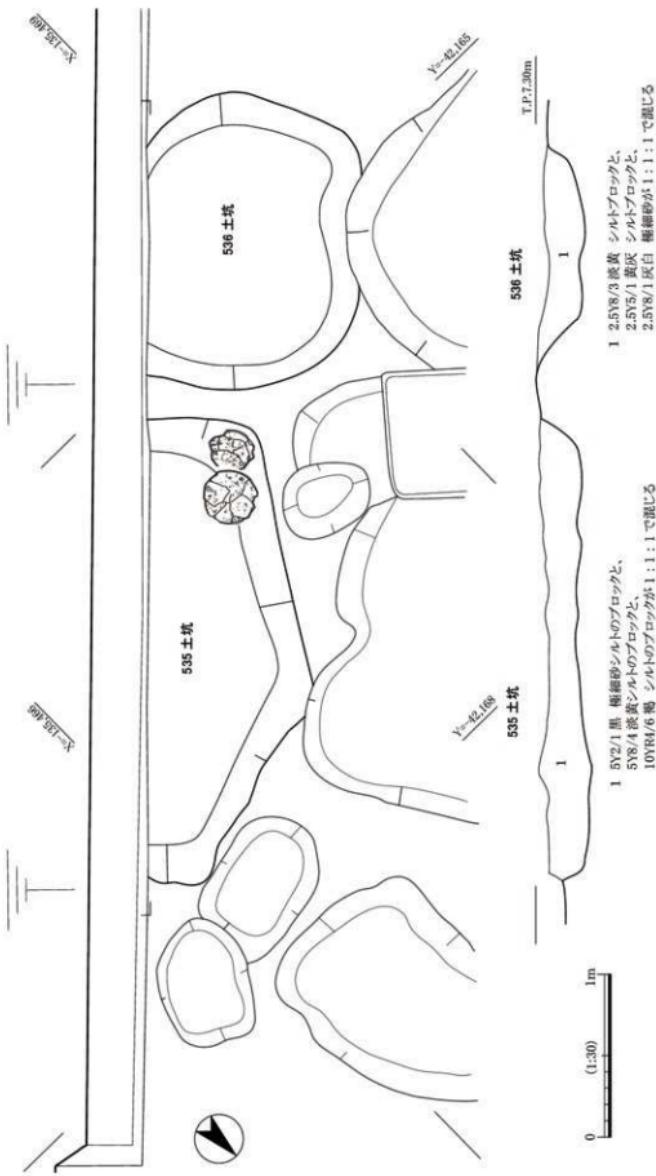


図 64 535・536 土坑平面・断面図

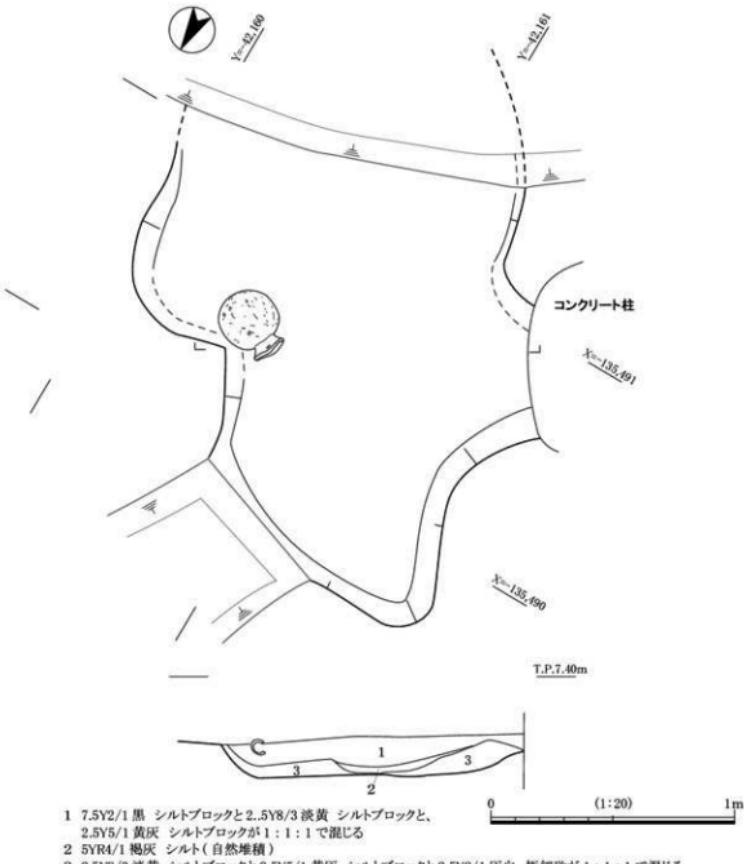
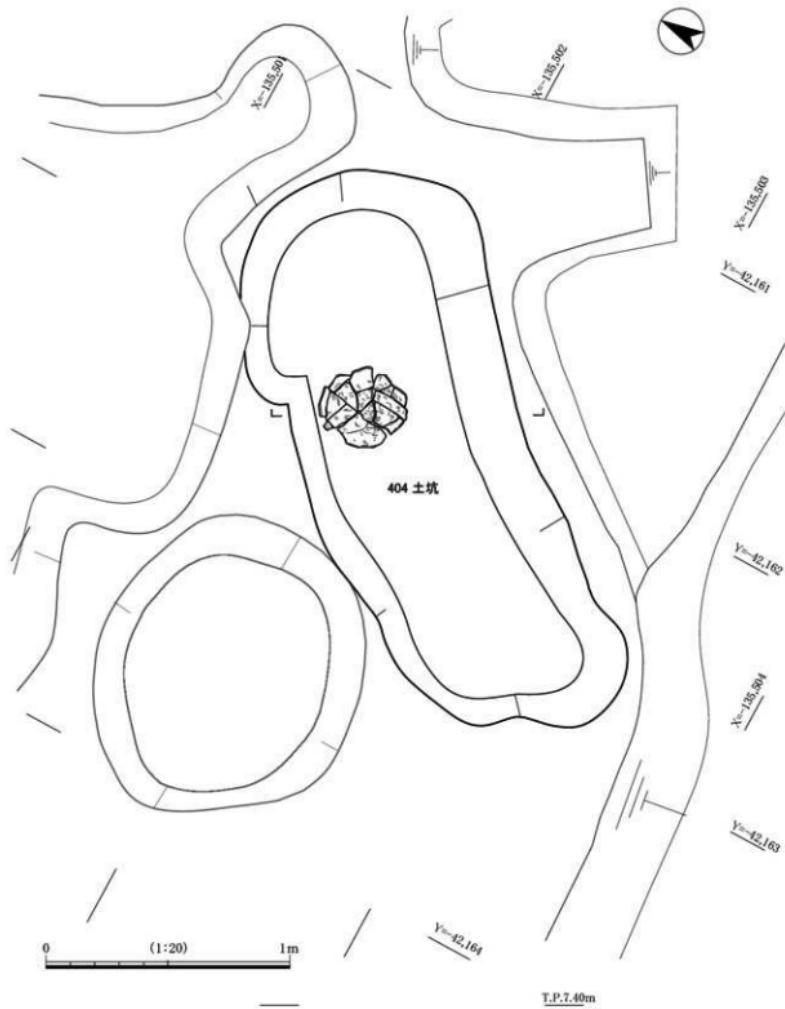


図 65 556 土坑平面・断面図

ブごとの内訳では A タイプが12基、B タイプが 2 基、C タイプが 2 基と A タイプが最も多い。このことから、遺物の投棄自体が意図的なもので、かつ遺物を投棄した土坑については、確實に埋め戻しをするという意図をうかがうことができる。なお288基全體のなかで A タイプは163基、B タイプは77基、C タイプは48基と、全体のなかでも A タイプが最も多かった。ただし A タイプが 6 割近くを占めるといつても、完全に埋め戻す A タイプと埋め戻さない B・C タイプとで分けて考えると、163 : 125 (1.3 : 1) となり A タイプがほとんどを占めるとはいえない。これは、採取された土の多くは他所に運ばれていたため、土坑を完全に埋め戻すためには、埋め戻し土の絶対量が足りなかったという事情を物語っている。

調査では遺物が出土した土坑や、残存状態の良好なもののなどを抽出して写真や実測の記録を実施したが、本報告では遺物が出土した土坑のみを図示し、残りの土坑については一覧表に掲げた(表3~8)。



1 10YR5/1 暗灰 シルト（淡黄色シルトブロック混）

図 66 404 土坑平面・断面図

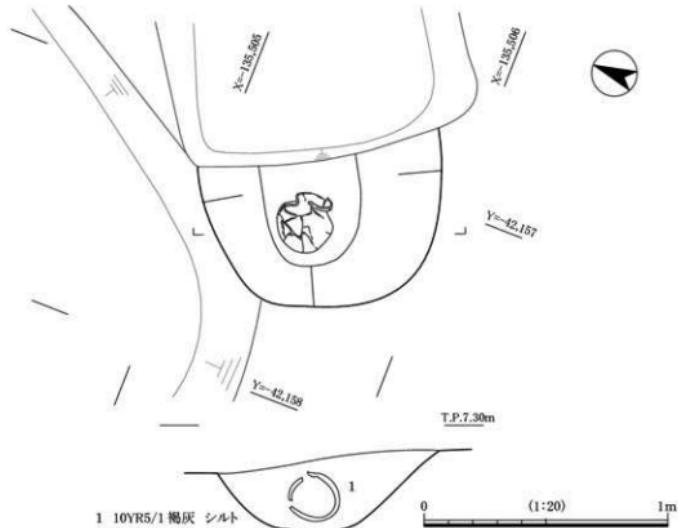


図 67 405 土坑平面・断面図

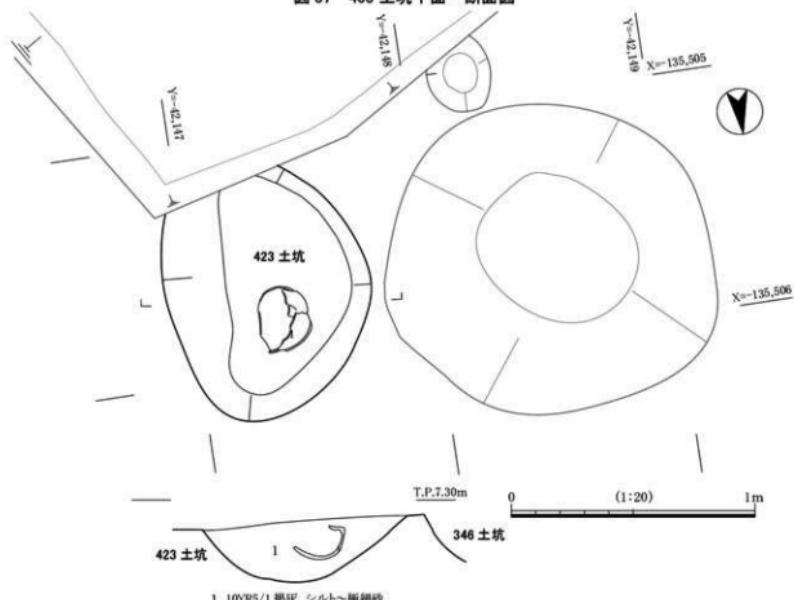


図 68 423 土坑平面・断面図

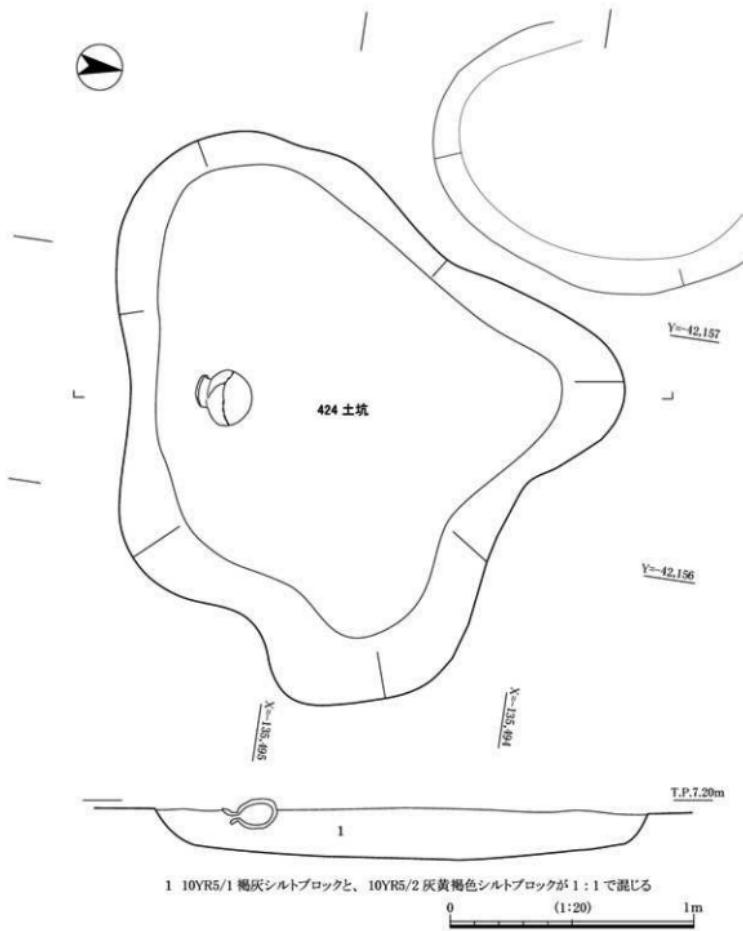
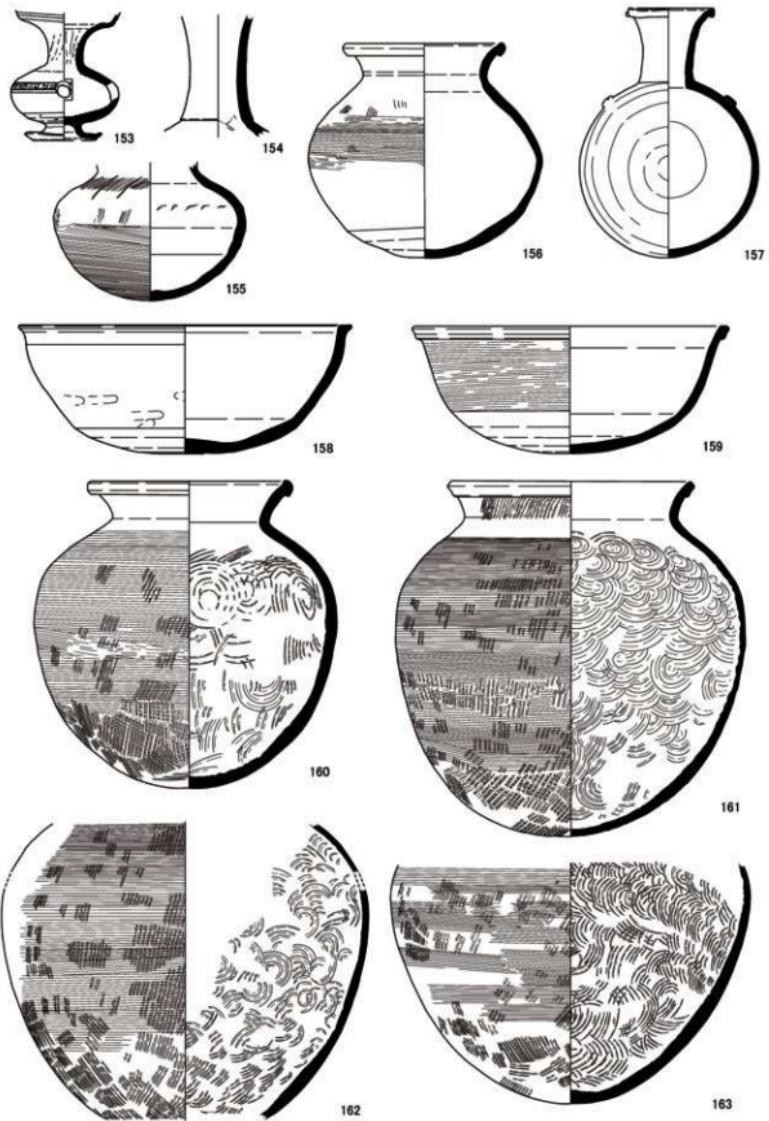


図 69 424 土坑平面・断面図

① 1 区

1 区のほぼ全域で不整形な土坑群が検出された。調査地外の東側でも同様の土坑が百基単位で検出されており（センター2014）、今回の土坑はその続きである。ただし、1区の南端部分では土坑は確認できなかった。関連性については次章で述べるが、ちょうど中世の9溝よりも北側に分布している傾向がある。

**445 土坑（図56・70、図版32—1・2・41）** 1区の西側で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑の南西部分のブロック土内からは159（図版41）の須恵器の鉢が1点、土坑の北部分のブロック土内

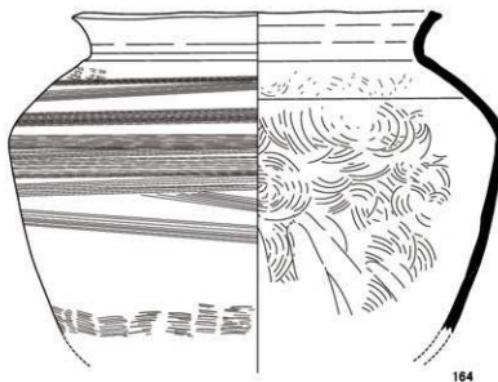


153 : 523 土坑、154 : 507 土坑、155 + 159 : 445 土坑、156 : 424 土坑、157 : 516 土坑 158 : 529 土坑

160 : 405 土坑、161 : 514 土坑、162 : 404 土坑、163 : 423 土坑

0 (1:4) 20cm

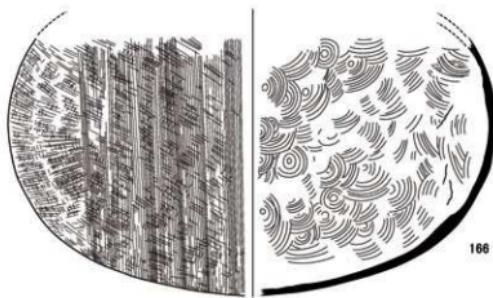
图 70 群集土坑出土遗物 1



164



165



166

164 : 506 土坑、165 : 556 土坑、166 : 466 土坑



图 71 群集土坑出土遗物 2

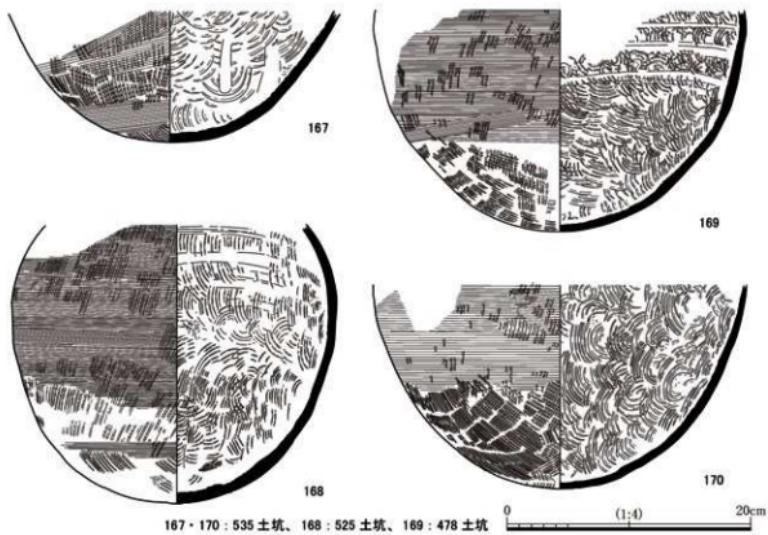


図72 群集土坑出土遺物3

から155(図版41)の須恵器の壺が1点出土している(図69)。159の鉢は口縁から底部まであり全形がわかるが、全体の60%程度の残存率、155の壺は頸部から下は完存するが頸部から上は失われている。

**466土坑(図55・71)** 1区の西側、445土坑の東で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑のブロック土内から166の須恵器の横瓶胴部片が1点出土している(図71)。166の横瓶は全体40%程度の残存率である。

**478土坑(図55・72、図版32-3)** 1区の西北端で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑のブロック土内から169の須恵器の壺が1点出土している(図72)。胸部から底部のみが残っており、全体の60%程度の残存率である。

**506土坑(図57・71、図版33-1・43)** 1区の南西、9溝の南側で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑の底部近くから164(図版43)の須恵器の壺が1点出土している(図71)。口縁から底部まであり全形がわかるが、全体の30%程度の残存率である。

**507土坑(図58・70、図版34-3)** 1区の南西、506の北側で検出した土坑で、埋土はAタイプである。埋土は2層に分かれ上層から154の須恵器高杯片が出土している(図69)。軸部のみの破片で、全体の30%程度の残存率である。

**514土坑(図59・70、図版34-4・44)** 1区の北側で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑の底部近くから161(図版44)の須恵器の壺が1点出土している(図69)。土坑の底部にブロック土を約5cm程度埋めた上に、須恵器の壺を寝かせて、そこからさらにブロック土を被せたようである。161の壺は口縁から底部まであり全形がわかるが、全体の60%程度の残存率である。

**516土坑(図60・70、図版34-5・41)** 1区のほぼ中央で検出した土坑で、埋土はCタイプである。土坑の底部から約20cmの高さで横倒しになった157(図版41)の須恵器の提瓶を1点検出した。土坑内に

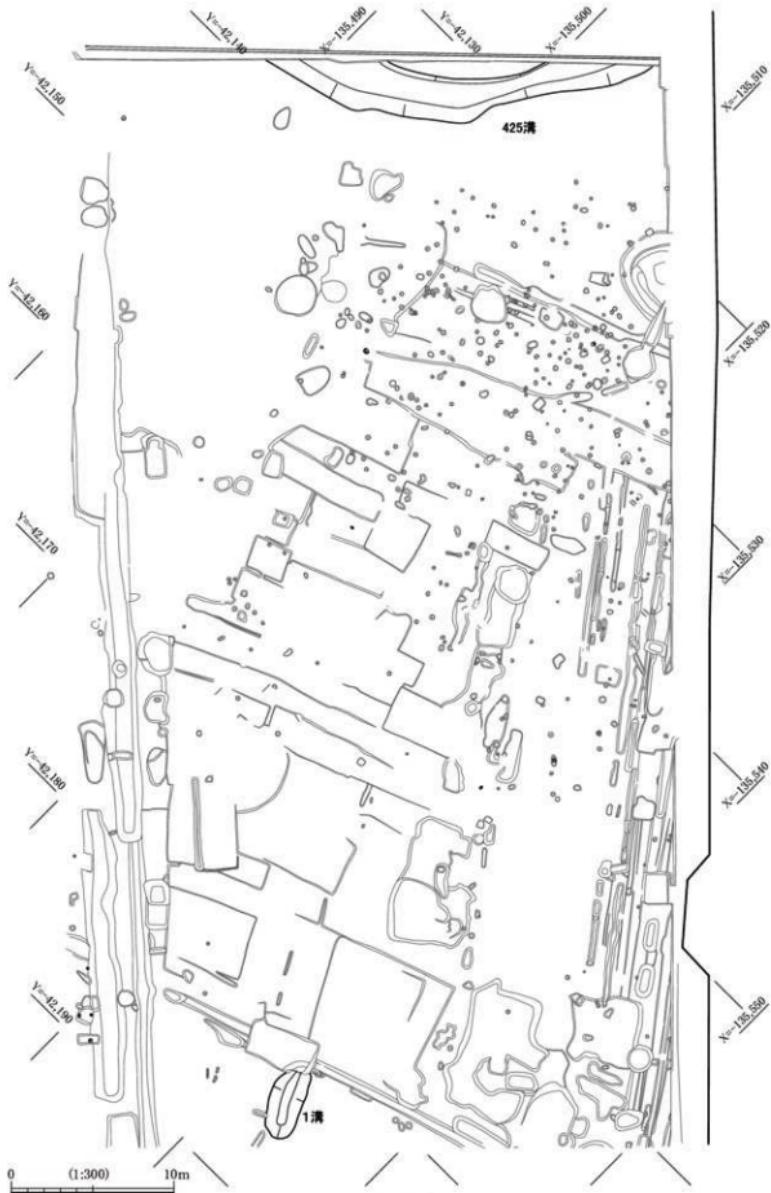


図 73 弥生時代遺構配置図

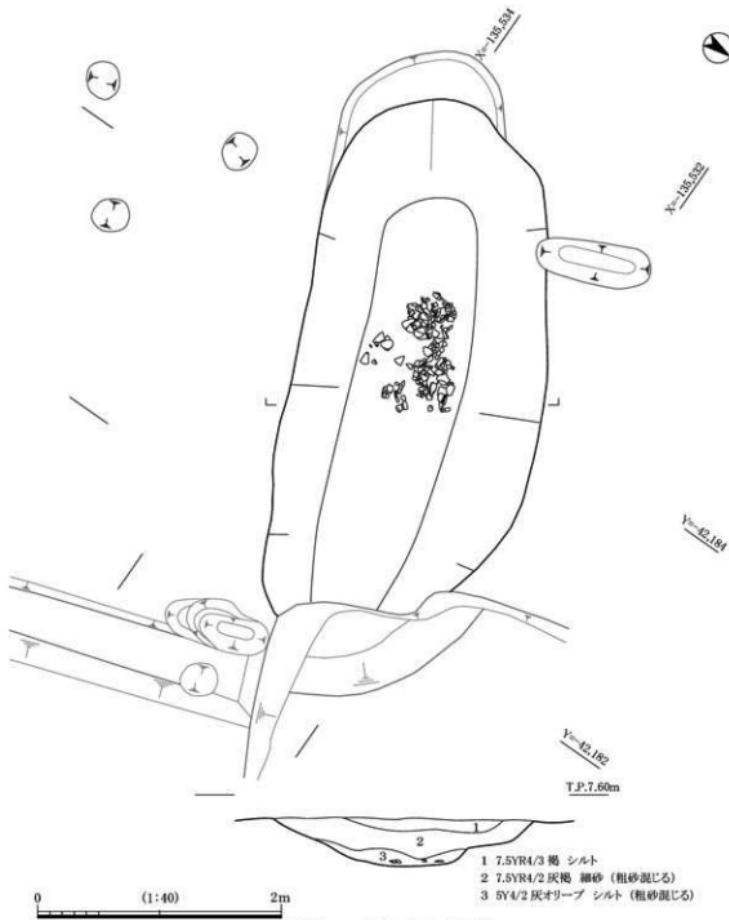


図 74 1 土坑平面・断面図

ブロック土を埋めるのと同じタイミングで投棄されたと考えられる。157の提瓶は口縁から底部まであり全体がわかる。胴部の一部が欠けており全体の95%程度の残存率である。

**523土坑**（図61・70、図版41）1区の調査区境付近で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑のブロック土内から153（図版41）の須恵器の台付甕が1点出土している。口縁部の約半分が欠けているが、口縁より下は完存している。

**525土坑**（図62・72、図版33-2・34-7）1区の東南で検出した土坑で、埋土はBタイプで、3層に分かれる。土坑の中央やや南寄りの底部から168（図版45）の須恵器の甕が1点出土している。出土層位は3層の埋土のうち最上層である。胴部から底部のみが残存しており、全体の60%程度の残存率であ

断面図は図8中にあり

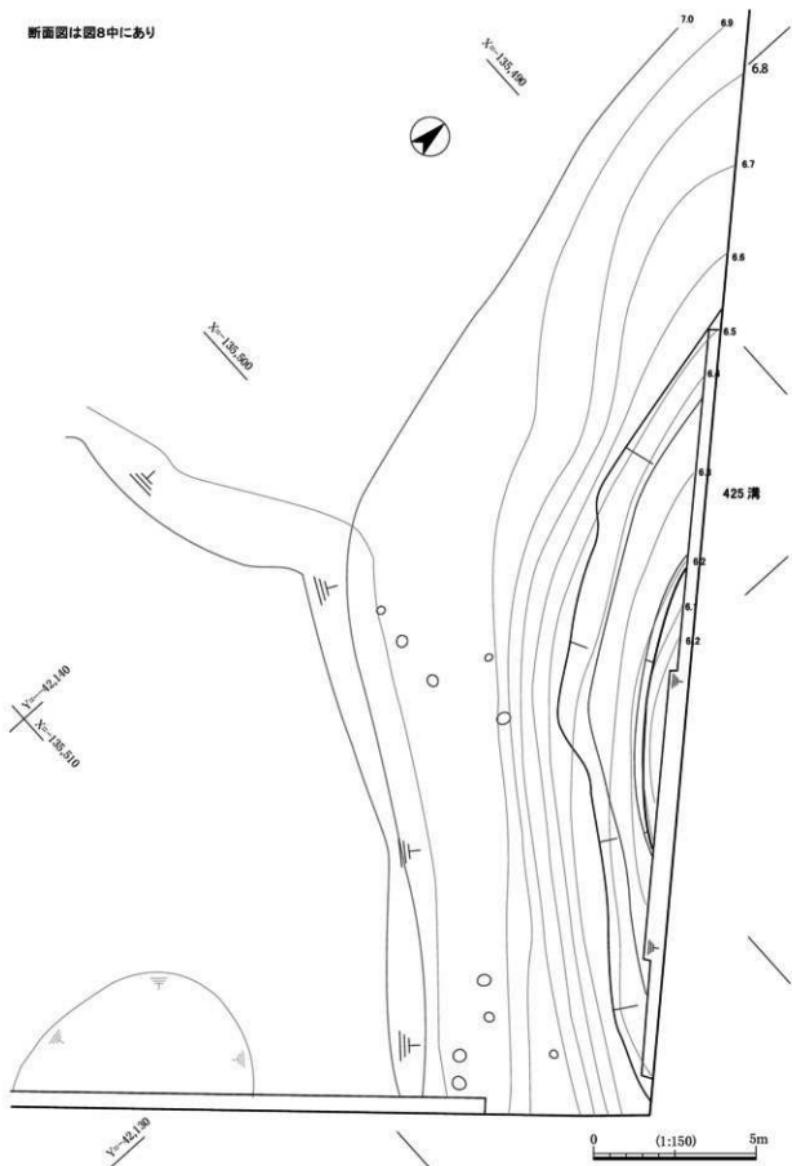


図 75 425 溝平面・断面図

る。

**529土坑**（図63・70、図版40） 1区の調査区境付近で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑のブロック土内から158（図版40）の須恵器の鉢が1点出土している（図70）。口縁部から底部まで残るが、全体の約半分が欠けている。

**535土坑**（図64・72、図版33-3） 1区の東壁にかかる形で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑の底部近くから167と170の須恵器の甕が2点並んで出土している（図72）。甕はいずれも胴部から底部のみが残存しており、167は全体の40%程度の残存率、170は全体の30%程度の残存率である。

**556土坑**（図65・71、図版34-8・43） 1区の東側で検出した土坑で、埋土はBタイプである。土坑の底部から約20cmの高さで横倒しになった165（図版43）の須恵器の横瓶を1点検出した（図71）。土坑にブロック土を埋めるのと同じタイミングで投棄されたと考えられる。横瓶は口縁部から底部まで残っているが、片側の胴部が欠損しており、全体の70%程度の残存率である。

## ② 2区

2区では調査区の北東部で土坑群が確認されており、これは1区でみられた群集状態の続きである。幾つかの例外を除いて、そのほとんどが中世の溝である9溝の北側に分布している。最南端に位置する群集土坑は後述する423土坑で、奈良時代の掘立柱建物4の北西に位置している。423土坑を例外として、1区では基本的に掘立柱建物の分布域と群集土坑の分布域は重ならない。要因は土地利用上の特徴にあると考えられるが、詳細は次章で述べる。

**404土坑**（図66・70、図版31-1） 2区の北側、9溝の北で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑の底部から約10cmの高さで162の須恵器の甕が1点出土した（図70）。胴部の一部と底部が残存しており、全体の20%程度の残存率である。

**405土坑**（図67・70、図版31-2・42） 2区の北側、9溝の南で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑の西側の肩口付近の底に貼りついた状況で160（図版42）の須恵器の壺1点を検出した（図70）。口縁部から底部までが残存しているが胴部の一部を欠いており、全体の90%程度の残存率である。

**423土坑**（図68・70、図版31-3・44） 2区の東側で検出した土坑で、前述したように今回検出した群集土坑のなかで最も南に位置する。埋土はAタイプである。土坑の底部から横倒しになった163（図版44）の須恵器の甕を1点検出した（図70）。胴部の張り出し部から底部までが残存しており、全体の60%程度の残存率である。

**424土坑**（図69・70、図版42） 2区の北東部で検出した土坑で、埋土はAタイプである。土坑の底部から横倒しになった156（図版42）の須恵器の壺1点が出土した（図70）。口縁部から底部までが残存しているが胴部の一部を欠いており、全体の95%程度の残存率である。

以上が今回検出した群集土坑のうち、出土遺物がみられた土坑の概要であるが、ここで出土遺物に共通すると思われる事項を述べておきたい。

1点目は、すべての遺物は須恵器で完形のものは皆無であるということである。須恵器甕で胴部から底部までの破片はさておき、甕や壺などで口縁部から底部まで残存しているものでも必ず口縁の一部や胴部の一部に欠損がみられる。例えば125・156の壺や157の提瓶などは、ほぼブロック土中に含まれた状況で検出している。すなわち、奈良時代以降の開発作業で削平されて欠損したり、もしくは欠損部を調査段階で見過ごしたといった要因が考え難いのである。このことから、群集土坑から出土している須恵器はいずれも投棄される段階では、何かしらの欠損状態にあったと推測される。

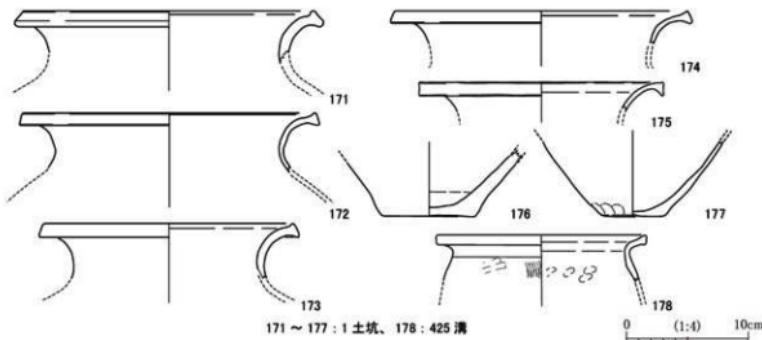


図 76 弥生時代の遺構出土遺物

もう 1 点は、今回検出した群集土坑内の遺物に共通するのは、いずれも土坑の底か、底から 10~20cm 程度埋め戻された段階で投棄されている。埋土のタイプが A から C に分かれるとはいえ、すべての群集土坑が人為的に埋め戻されていることには変わりなく、これらの須恵器はいずれも埋没過程の早い段階で投棄されたと解釈できるのである。これらの土坑が粘土探掘土坑であるということを前提とすると、対象となる土を採取してからほどなくして土坑は埋め戻されるのだが、出土した須恵器はその段階で投棄されたといえる。すなわち、探掘工人は埋め戻し時に何らかの理由で須恵器を持参したものと想定できる。

#### (4) 弥生時代

**1 土坑**（図74・76、図版1-1・35-1）2 区の西端で検出した土坑である。平面形は長軸4.8m短軸2.2mの縦長の楕円形状を呈する。埋土は3層に分かれ、上層が褐色のシルト、下層が灰オリーブ色のシルトで、その間に灰褐色の細砂が挟まる。上層中から弥生時代中期の土器が2個体分（図76-173・175）、下層中から同じく弥生時代中期の土器片が5個体分（図76-171・172・174・176・177）がまとまって出土した。

**425溝**（図75・76、図版35-2・3）2 区の東端で検出した溝である。基本層序の項で述べたように、2 区の東端は谷状地形になっており、東へ向かって落ち込む地形を呈していた。この地形の状況は、区画整理事業に伴う北側駅前広場建設に先立つ調査すでに確認されていたものであるが（センター 2014）、今回その谷状地形の東側の肩部分が検出されたわけである。425溝は、この谷状地形に流れ込む水流を規制することを目的として掘削されたと考えられる。今回の調査では、溝部分とその東側に施された堤状の盛り土を確認した。盛り土は基本層序の項で述べたように、第6-2・6-3層と7層を掘削して盛り上げられたものである。溝内に堆積した層から弥生時代中期の壺の口縁部から体部にかけての破片（図76-178）が出土している。

## 第5章 総括

今回の発掘調査で得られた成果について時代ごとに記しておく。

### (1) 弥生時代

2区の西端で土坑を、東端で溝を検出した。いずれの遺構も出土土器から弥生時代中期のものと考えられる。今回の調査および周辺の既往の調査では、同時期の竪穴建物といったような居住施設は検出されていない。しかし、今回の調査成果をみる限り、調査地の近辺に弥生時代中期の集落が展開していた可能性は十分にあり得る。また、調査区のはぼ中央の中世の包含層から、凹基式の石鍬（13）が出土している。13は共伴遺物がないため、詳細な時期は判然としないが、上述した弥生時代中期の土器よりも遡る可能性がある。同じタイプの石鍬はJR岸辺駅北側駅前広場を隔てた国立循環器病研究センターの移転地における発掘調査でもまとまって出土しており（センター2016）、周辺地における弥生時代中期以前の生業の実態を示唆するものといえる。

### (2) 古墳時代から古代初頭

調査区北半のはぼ全域で、群集土坑を170基以上検出した。これらの群集土坑は周辺の既往の調査で確認されたものと同一目的で掘られたと考えられ、今回の調査でその分布域の西限が判明したといえる。その時期は出土遺物から、6世紀代から7世紀前半までと考えられる。興味深いのは、土坑群の分布域が後代の奈良・平安時代の掘立柱建物群が集中している区域とは重ならないことである。実はこの状況は国立循環器病研究センター移転地の調査成果とも共通する。国立循環器病研究センター移転地の調査では群集土坑分布域の東限が判明しているが、その東限よりも東側で7世紀から8世紀代の掘立柱建物群が検出されており、群集土坑の分布域内には同時期の建物検出例は皆無であった（センター2016）。調査報告書ではこの要因を「群集土坑は（途中略）粘質土上に集中して掘削されているのに対し、群集土坑の認められない箇所は砂質の強いこと」に求めている。

今回の調査区でも同様の状況をうかがうことができ、群集土坑が分布する範囲は基盤層である第7層がシルト質であるのに対し、分布しない範囲は極細砂ないしは細砂である。この事実は、図示した基本層序には表れないが、例えば基盤層を掘り返して形成された掘立柱建物掘方の埋土のほとんどが、シルトではなく極細砂もしくは細砂であることからも類推される。

以上のように考えれば、掘立柱建物と群集土坑の分布域が重ならないという事実も、必然的なものとして理解できるだろう。すなわち、群集土坑は從来から考えられているように、粘土採掘を目的としていたと考えられるため、粘質の基盤層を掘削・採取する必要があった。その反対に、建物を複数棟建てるためには砂質地盤で水はけの良い場所を選ぶのが必定で、粘質地盤で水はけの悪い場所を選ぶことはない。群集土坑は粘質の水はけの悪いところを、建物は砂質の水はけの良いところ、双方の地勢を選ぶ目的と動機が異なるがために、分布域が重ならないのだといえよう。さらにこの解釈に従えば、ほぼ9溝を境にして群集土坑の有無が分かれるという事実もその背景が推測できる。おそらく9溝は、かつて群集土坑が集中して掘られた場所の水はけの悪さを解消するために、排水目的で掘られたものと考えられる。また北側の高所にありながら水はけが悪いという地勢的特徴は、中世以降の耕作域の段差を生じさせる結果にもなったともいえる。さらに前章で述べたように9溝は12世紀に機能していたものだが、その初源を8世紀に掘られた349溝に求めることができるため、上記のような排水計画は掘立柱建物群

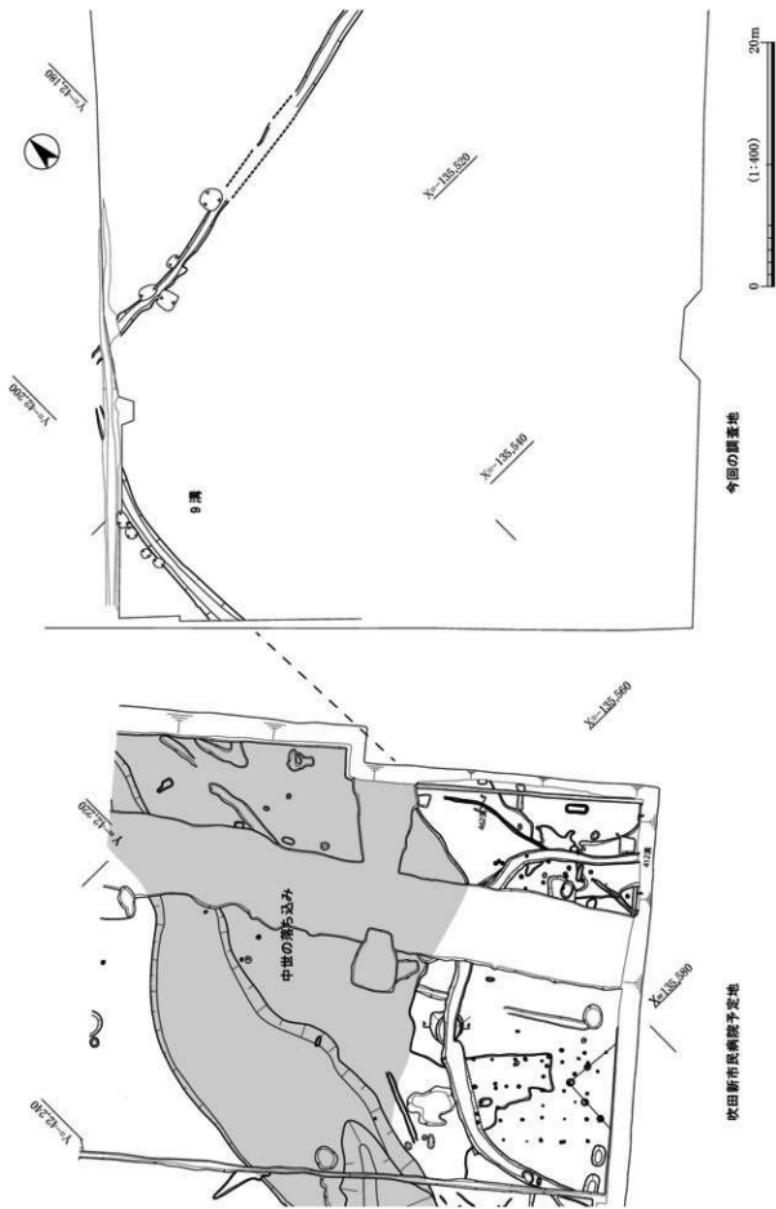


図 77 9 溝の延長部分

が形成された当初からあったと推測される。

#### (3) 古代

調査区の南半において、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物群が検出された。これらの建物群は、2時期に分かれ、掘立柱建物1・4・7～11が先行し、掘立柱建物2・3・5・6がそれに続く。なかでも特記すべきは後者の掘立柱建物2・3・5・6である。掘立柱建物2・3・5・6は四面廁建物とそれに伴う総柱建物、さらにその東に付属する建物から構成される。これらの建物は同時期における通有の掘立柱建物よりも格式の高い構造を採用していることから、一般庶民の住宅であったとは考えにくい。その性格については、上級貴族の邸宅や寺院や神社などの祭祀施設、郡衙正庁や駅家といった公的施設の中心建物などの可能性が考えられる。古代の建物群については、その造営・存続時期と建物構造について次章で詳しく検証する。

#### (4) 中世

調査区の西端付近に端を発し、途中90度向きを変え調査区の東南端に延びる9溝を検出した。前述したように9溝は、かつて群集土坑が掘られた水はけの悪い場所からの流水を排水することを目的として掘削されたと考えられる。この溝は今回の調査地の東端から西端にまでの広範囲にわたるものであるが、さらに調査区外の西側にも延びることがわかっている。今回の調査区に隣接する吹田新市民病院予定地の調査では、中世の落ち込みが検出されているが（センター2015）、この落ち込みの南側の肩部分が、9溝の南側の肩につながる可能性が高い。この落ち込みから出土している遺物の下限は、9溝と同時期であることから、両者は繋がっていたと考えて間違いないだろう。9溝の東端、または調査区の東南端付近では溝と同時期と考えられる244井戸を検出した。今回の調査および、周辺における既往の調査では同時期の建物は検出されていないことから、溝や井戸は集落に伴うものではなく、耕作に伴うものであったと推察される。

## 第6章 古代の掘立柱建物群について

上述した掘立柱建物2・3・5・6のうち、掘立柱建物2・3が格式の高い建物であることはすでに述べたが、この建物群は吹田操車場遺跡周辺のみならず、淀川北岸の古代史を考えるうえでも重要な調査事例であることは疑いない。そこで問題となってくるのは、この建物群の性格である。極端にいえば、この建物群の性格を語ることがこの調査報告の主目的といって過言ではない。そのためにはまず、①掘立柱建物群の造営年代とその変遷を明らかにする必要があり、そのなかで、②掘立柱建物2・3の存続時期を特定する必要がある。それを受けつつに、③平面形態の特徴から掘立柱建物2・3の建物構造を復元する。上記①～③の作業を経て初めて掘立柱建物2・3の性格を考えることができる。まず掘立柱建物群の造営年代とその変遷について検証する。

#### (1) 掘立柱建物群の変遷

今回検出した掘立柱建物の柱穴掘方の埋土は大きく分けて、灰褐色系の埋土のものと黒褐色系の埋土のものに分かれる（図版26－5）。灰褐色系の埋土の掘方を有するものは、掘立柱建物1・4・7～11で、黒褐色系のそれを有するものは、掘立柱建物2・3・5・6である。前者と後者の柱穴は、掘立柱建物3・9・10の柱筋が接触する場所で幾つもの重複関係がみられ、総じて前者が先で後者が後の関係にあ

る。また柱穴の平面形態も前者と後者で大きく異なり、前者がすべて隅丸方形を呈するのに対して、後者は隅丸方形と円形がほぼ1:1で混在するという特徴がある。さらに建物の柱筋も前者と後者ではつきりと分かれ、前者が座標上の北方向から5度東にふれるのに対し、後者は2度東にふれる。なお、柱穴痕跡の平面形はすべて円形であるため、柱材の形状は前後者ともに丸柱であったと考えられる。

以上の柱穴の重複関係・柱筋の方位・柱穴の平面形態・その埋土などの条件から、掘立柱建物1・4・7~11の後に掘立柱建物2・3・5・6が建てられたということは調査時点で判明している。以降、前者の建物群の機能時期を第Ⅰ期、後者のそれを第Ⅱ期とし、以下ではそれぞれの時期の中での建物変遷をみていきたい。

まず第Ⅰ期の建物群であるが、このうち掘立柱建物8~10については、個別建物の項目で説明したように、8→10→9の順になる。これらの建物は柱筋が重複することから同時併存するということはあり得ない。つぎに掘立柱建物4と7であるが、これらの建物には重複関係がなく、かつ軒先が接するということもないため同時併存の可能性が考えられる。掘立柱建物4の南側の側柱筋と、掘立柱建物7の北側の側柱筋が通っていることもこの2棟が同時併存していたと考えることの一証左となる。また、柱穴の重複関係や柱筋の一致といった状況がみられない掘立柱建物1・11は、他の建物との先後関係はわからない。ここでは、第Ⅰ期のなかで掘立柱建物8→10→9という変遷過程があり、この過程の中で掘立柱建物4・7の組み合わせが、そして掘立柱建物1と11が各々建てられたということを確認しておく。

つぎに第Ⅱ期の建物群であるが、柱筋が一致することや、建物間の中間位置に柱列を検出していることから、すでに報告したように掘立柱建物2と3は同時併存していた可能性が高い。続いて掘立柱建物5と6であるが、これらの建物は妻側の側柱が接近しすぎていることから、同時併存は考えにくい。掘立柱建物2・3の存続期間中に建て替えがあったと考えるのが無難である。さきに報告したように、掘立柱建物5の柱穴掘方からは、8世紀から9世紀後半までの遺物が出土している。したがって、掘立柱建物5の造営時期の上限は9世紀後半と考えられる。いっぽう掘立柱建物6の柱掘方からは、8世紀後半から10世紀初頭までの遺物が出土しており、あきらかに掘立柱建物5よりも新しい様相をうかがうことができる。掘立柱建物6の造営時期の上限は10世紀初頭と考えられ、確実に掘立柱建物5よりも後出する。

## (2) 208土坑について

建物の造営順序は上述したとおりだが、つぎにその造営時期と存続時期について考えたい。これについて大きな情報を与えてくれるのが208土坑から出土した土器群である。208土坑は前章で述べたように、掘立柱建物3の南西隅柱の西2.0mの地点、すなわち掘立柱建物3の南側柱の延長上にある。

まず最初に、208土坑の埋没過程について確認しておく。208土坑から出土している須恵器・土師器(61~67)は、ほぼ完形の65の須恵器杯身を除いてすべてが残存率60%以下の破片である。すなわち、これらの共膳具・煮炊具は使用した直後に土坑を掘削して投棄されたのではなく、使用後ある場所に一定期間散逸していたものを寄せ集めて投棄したという推測が成立立つ。さらに投棄後に一抱えほどの石を須恵器・土師器の上に投げ込んで、建物2・3の柱穴掘方と同じ埋土で埋め戻している。

つぎに、208土坑が掘削され埋め戻された時期について検証してみたい。208土坑から出土している土器類は、時期的に今回検出された掘立柱建物のいずれかの時期にあてはまるといえよう。したがって、掘削時期として想定されるのは以下の3つである。

### ①第Ⅰ期建物の造営時もしくは存続期間

## ②第Ⅱ期建物の造営時もしくは存続期間

### ③第Ⅱ期建物の廃絶時期

まず①については、第Ⅰ期に掘られていた208土坑が、偶然にも第Ⅱ期の掘立柱建物3の南側柱列の延長にあたったと想定しなければならない。もちろんこういった偶然が皆無だとは言い難いが、それでは埋土の説明がつかない。第Ⅰ期の建物と第Ⅱ期の建物とでは、あきらかに埋土が異なっており（図版26-5）、前章で報告したように208土坑の埋土は第Ⅱ期建物の柱掘方の埋土とほぼ同じである。このことから、第Ⅰ期に掘削され埋め戻された可能性は低いといえる。次に②の可能性であるが、これが最も理にかなった解釈だといえる。側柱の筋の延長上にあること、埋土が同じであることから考えて、208土坑が埋め戻された時期は掘立柱建物2・3の柱掘方が埋められた時期と相前後する可能性が考えられる。③については、後述する第Ⅱ期建物の下限（10世紀初頭）と矛盾することから可能性はほぼない。以上のように、208土坑の掘削と埋め戻しの時期は、第Ⅱ期建物の造営時を含めた存続期間のなかと捉えることができる。土坑の位置と埋土の類似性という、間接的な根拠はあるが、さきに挙げた三つの可能性のうち、上述の理解がもっとも蓋然性が高いといえる。

208土坑の性格について明言することは難しいが、例えば『枕草子』313段（能因本、初稿10世紀末）には、寝殿造り建物の建築現場において工匠達が食事を摂るさまが書かれている。また延慶2年（1309）に作成された『春日権現記絵』の第10巻第3段には、神社の建築現場で食事を摂っている工匠達が描かれている部分がある。以上の例から類推して、208土坑は建物建築に携わった工匠達の食器類が投棄された土坑であった可能性を指摘しておく。

### （3）掘立柱建物群の存続時期

208土坑が掘立柱建物3の存続時期を間接的に示すと考えると、その上限は8世紀末から9世紀初頭となる。したがって、第Ⅱ期（掘立柱建物2・3・6）の上限はこの頃と想定されよう。そこで、第Ⅱ期の存続時期を考証したうえで、それより前の第Ⅰ期（掘立柱建物1・4・7・8・9・10・11）の造営・存続時期もあわせて考えてみたい。

第Ⅱ期の年代を考えるうえで指標となるのは、緑釉・灰釉・白磁などの施釉陶器である。これらの施釉陶器は、建物の格式から考えて第Ⅰ期の建物存続時に使用されたと考えたよりも、四面廻建物をはじめとする第Ⅱ期に使用されたとみるほうが自然である。

まず施釉陶器のうち緑釉陶器からみてゆくと、古い様相を示すものは猿投窯産の5、平安京近郊産の35・73・75でいずれも9世紀中頃を降らないものである。これらに続くのが、猿投窯の78と平安京近郊窯の72で9世紀後半にあたる。新しい様相を示すものは、平安京近郊窯の36・2・52で10世紀初頭のものである。ここで緑釉陶器については、9世紀中頃から10世紀初頭頃までという時期分布を確認できる。つぎに灰釉陶器であるが、古い様相を示すものは10・42でいずれも9世紀中頃を降らないもの、これらに続いて、4・7・12が9世紀後半のもの、新しい様相を示すものとして6・37で10世紀初頭のものが挙げられる。ここで灰釉陶器も緑釉陶器同様に、9世紀中頃から10世紀初頭頃までという時期分布が確認できる。以上の検討から、施釉陶器の時期分布は9世紀中頃から10世紀初頭までに限られることわかる。

さらに今回の調査事例ではないが、調査地の東側に隣接する遊歩道建設時の調査で検出された井戸についてとりあげたい（センター2014）。この調査では、掘立柱建物6の東10mほどの場所で横板組の井戸枠を持つ1012井戸が検出されている（図79）。この井戸の井戸枠内からは、10世紀中頃を下限とする

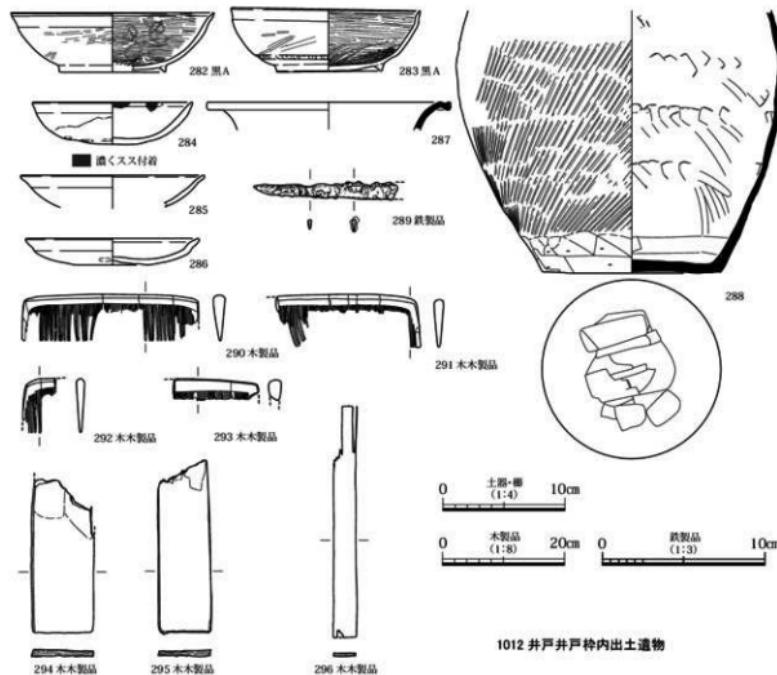
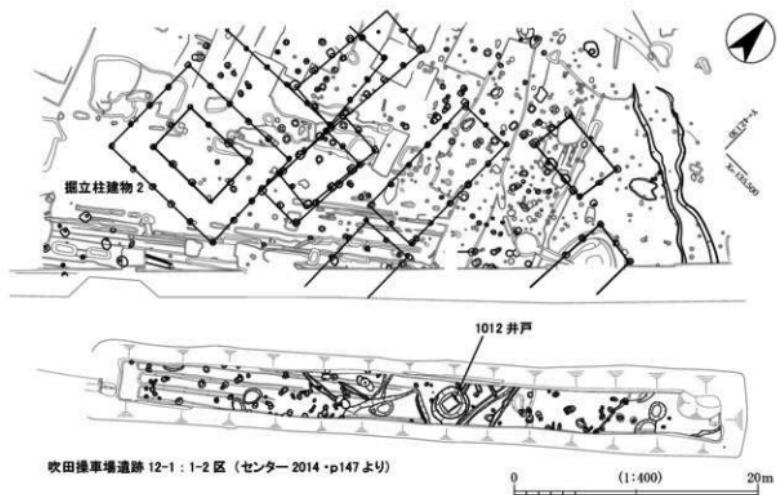


図 78 1012 井戸位置図・出土遺物 (センター 2014 より)

黒色土器や土師器皿、須恵器壺などが出土している。通有の井戸枠よりも格式の高い、横板組の井戸枠を持つこの井戸は四面廁建物に付属する井戸に相応しく、おそらく第Ⅱ期の建物群が存続していた時期に機能していた井戸と考えて差し支えない。出土層位から考えて、井戸枠内の遺物は井戸の廃絶時に投棄されたもので、廃絶の要因は第Ⅱ期の建物群の破却であろう。このことから、第Ⅱ期の建物群の下限を10世紀中頃に想定することができる。

これに208土坑で出土した資料が、8世紀末から9世紀初頭に限定されるということを併せて考えると、第Ⅱ期の建物群の存続時期についてある程度想定することができる。すなわち、四面廁建物を中心とする第Ⅱ期の建物群は8世紀末から9世紀の初頭に建てられ、10世紀中頃まで存続していたと推察できる。この時期の中で、当初は掘立柱建物2・3・5の組み合わせであったものが、途中掘立柱建物2・3・6の組み合わせに変わったのだろう。

つぎに第Ⅰ期の建物群が造営された時期についてであるが、これについては第Ⅱ期の造営開始時期である8世紀末から9世紀初頭がその下限となる。第Ⅰ期の建物のうち、柱穴掘方から時期を特定できる遺物が出土しているのは掘立柱建物9の154柱穴のみである。154柱穴の掘方埋土内からは8世紀中ごろの土師器杯が出土している。ただし、この一点だけをもって第Ⅰ期の建物群の造営時期を決定するのは心許ない。そこで349溝や包含層から出土している古代の資料のうち、どの時期が多くを占めているのかを確認してみると、8世紀中頃から後半にかけての一群と、8世紀末から9世紀代の一群とに分かれることがわかる。このうち前者の一群が第Ⅰ期の建物存続時の遺物と考えられ、後者の一群は第Ⅱ期のものと考えられる。となるとやはり、154柱穴出土土師器杯の時期は第Ⅰ期の一定点としてとらえて差し支えないようである。ここでは第Ⅰ期建物の造営開始時期を8世紀中頃とし、その存続は8世紀末から9世紀初頭までととらえておく。

#### (4) 掘立柱建物2・3の建物構造

以上で、今回検出された掘立柱建物の造営年代とその変遷があきらかになり、そのなかで四面廁建物を中心とする第Ⅱ期の造営年代と存続年代もある程度あきらかになった。つぎに、掘立柱建物2・3の構造的特徴を検証することによって、本建物群の性格を考える一助としたい。

今回の調査であきらかになった掘立柱建物2・3の特徴をあらためて以下で確認すると。

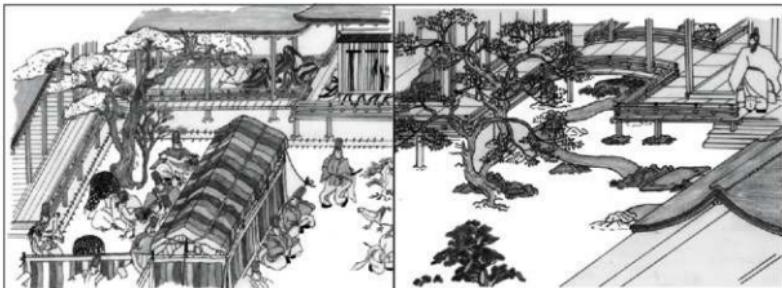
- ・掘立柱建物2は身舎の柱間よりも廁間のほうが広い、8世紀後半から9世紀にかけてみられる典型的な四面廁建物である。

- ・掘立柱建物3は総柱構造を有するが、内部の柱が床東と考えられることから床張建物だと考えられる。
- ・掘立柱建物2・3の間に柱穴列があり、両建物を繋ぐなんらかの施設があったと考えられる。

となる。とくに三番目の建物間の柱穴列に対する解釈は掘立柱建物2・3を考えるうえで最も重要な要素といえ、これを無視するわけにはいかない。調査期間中には複数の建築史の専門家に来訪いただき、この柱穴列の機能を考えるうえで、幾つかの可能性をご教示いただいた。その可能性を列記すると以下のようになる。

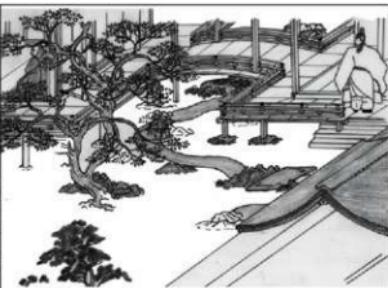
①廊下状の構造物 建物の柱筋を延長し柱を立て廊下状の構造物を敷設する。柱穴列はこの構造を支える柱であった可能性がある。なおこの場合、掘立柱建物3が床張りであるため、繋がれた双方の建物はいずれも床張りということが前提となる。

②谷樋 掘立柱建物2と3は近接しており、両建物の軒先はほぼ接していたであろうとの指摘を受けた。その場合、降雨時には両建物の間には雨水が集中することになるため、軒が接する部分に樋を東西方向



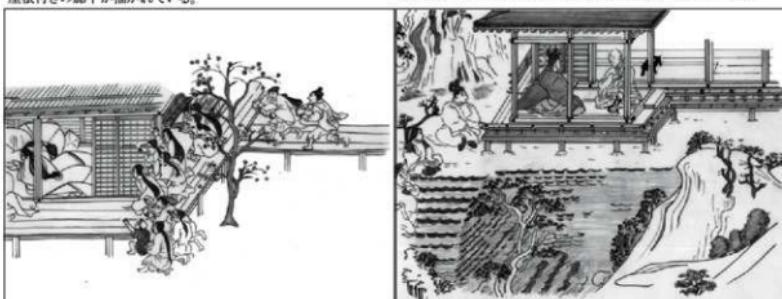
①年中行事絵巻3月3日

3月3日の節日におこなわれる開廟のようす。寝殿造建物を南からみた絵で、右奥に正殿左端に脇殿を描く。その間に屋根付きの廊下が描かかれている。



②春日權現駿記絵

一乘寺の増譽が知足院の病気平癒をしたため、星敷にて禊を賜る場面。西からみた寝殿造と推され、左奥が正殿で右が脇殿となる。正殿と前殿の間に屋根付きの反橋、その下に造水。



③粉河寺縁起絵巻

河内国讚良郡にある長者の宅を童の行者が尋ねる場面。描かれていないが右側に入り口奥の前殿があると考えられ、左の建物は正殿。建物に取り付く屋根なしの廊下がある。

④信貴山縁起絵巻

延喜加持の巻の一場面。信貴山寺の命運のものにも、病床にある醍醐天皇の使いが祈祷を依頼しに来る。勅使を迎えている部屋は屋根を持つ張り出し建築（出屋）になっている。



⑤東大寺法華堂

法華堂の西側面。左側（北側）の建物が正堂で、右側（南側）の建物が礼堂。もともと正堂と礼堂は別棟であった（報告者撮影）。

⑥法華堂谷縫部分

法華堂の西側面。左側の正堂と右側の礼堂の軒先の接合部分には縫がかけられている（報告者撮影）。

図 79 建物間を繋ぐ連結施設の具体例

に渡し、それを柱で支える必要がある。これを谷樋と呼ぶが、柱穴列はこの谷樋を支えた柱の可能性がある。

③廊下状の構造物と谷樋の複合建築 谷樋はそもそも、そこを通行することを前提としている。したがって廊下状の構造物を敷設した場合、谷樋も必要となる。

④掘立柱建物2の張り出し構造物 出屋と呼ばれるもので、掘立柱建物2の北側2間分が北に張り出した構造をとっていた可能性がある。

報告者は建築史の専門家ではないため、上記4つの可能性は専門家から指摘頂いた内容をそのまま記したにすぎない。したがって、かりに誤解があるならばそれはすべて筆者の誤認であるため、これについてはご容赦頂きたい。ただし、字面だけで4つの可能性を説いたとしても、具体的・三次元的なイメージが湧いてこないのは否めない事実である。実際に上記の例は、離宮や御所などの現存建築ならいくつか事例があり具体的なイメージを想像することができるが、近世以降の建築であるため今回の調査事例との同時代性という意味では難がある。そこで、上記の事例を平安時代後期以降に製作された絵巻物にもとめて具体像を提示し、そのうえで上記のうちどの構造の可能性がより高いかを考えてみたい。<sup>(註4)</sup>

①廊下状の構造物 『年中行事絵巻』は平安時代後期に後白河法皇の勅命により製作された絵巻物であるが、そこには宮中や公家の邸宅の様子が詳細に描かれている。図79-1はその中で、3月3日の闘鶴の様子（住吉本）を描いたものである。場所は公家の邸宅で、寝殿造り建物を前庭の南側から見た構図となっている。図に描かれた右側の建物が正殿で、正殿から西方向に屋根付きの廊下が描かれているのがわかる。その西は複廊の回廊とみられ、廊下によって主殿と回廊が繋がる構造であったとみられる。

図79-2は208土坑の性格を考える際にとりあげた『春日権現駿記絵』第三巻の一場面である。図の場面は一乗寺の増譽僧正の加持祈祷により病氣平癒した閑白知足院が、禄を賜うために自らの邸宅に増譽を呼んだ場面である。図は寝殿造りの知足院邸を南東からみたものと考えられ、左端の増譽が座している建物が正殿、右端が脇殿と考えられる。正殿と脇殿の間には屋根付きと思われる反り橋がかかり、その下に遣水が流れている。先の例が正殿と東西に並ぶ回廊を繋ぐ施設であったのに対し、本例は東西に並ぶ正殿と脇殿を繋ぐ例となっている。

図79-3は12世紀代に成立した『粉河寺縁起絵巻』の第4段の一場面で、童の行者が河内国讚良郡にある長者の屋敷を訪れ、長者の娘の病気を治す一幕が描かれている。図にあるのは長者の娘の病気が治ったことに驚いた屋敷の住人が、行者と娘のいる建物に駆け込んできている場面である。方位はわからぬ。絵図の前後の流れから考えて図の右外側が入り口の門で、左の建物が娘のいる正殿である。正殿の右に床東で固定された屋根を持たない廊下状の施設があり、ここには建物との繋がりが描かれていないものの、門の内側にある前殿と繋がっていたと推測される。本例はさきにみた公家宅の2例とは違い、土着の富豪層の邸宅である。そのためか、屋根も檜皮葺ではなく板葺きで、建物の周囲には縁が巡っているものの、廂を四方に巡らせるような寝殿造りの類ではない。廊下に屋根がかからないのは建物の格式に由来するものと考えられる。

なお以上の絵巻の例よりもやや新しくなるが、現存建物としては法隆寺東院伽藍の舍利殿絵馬殿道も、舍利殿絵馬殿と伝法堂を繋ぐ連結敷設として挙げられる。舍利殿絵殿は桟木に建保7年（1219）の銘があり、連結敷設も同時期ととらえると、今回の調査例よりも4世紀後のものになる。

②谷樋 谷樋に関しては報告者の管見にもよるが、絵図での例はみあたらない。ただし、現存の古代建築で最適な例を探すと東大寺の法華堂が挙げられる（図79-5）。東大寺法華堂は北側の正堂と南側の礼

堂が一体となった、双堂建築と呼ばれる奈良時代後半以降に盛行する建築様式を採用している。その創建は、法華堂に葺かれていた人名瓦を検証した上原真人により、慈仁宮造営時とほぼ同時期の天平12・13年頃（740年代前半）と考えるのが通説となっている（上原1984）。現在の法華堂は正堂と礼堂が一つ屋根の下にあり一体となっているようみえるが、元来正堂と礼堂はそれぞれ別の屋根を持っていた。その軒先の接触部分に渡されている谷樋を、現在でも確認することができ、図79-6に掲げた写真がこれにあたる。写真からは、礼堂の北側の軒先と正堂の南の軒先が接する箇所に谷樋が設けられているのがわかる。ただし、現状での法華堂は二棟一体建築であり、礼堂は床張り正堂は土間という複雑な構造をとっており、谷樋の真下に当たる箇所は土間に降る段差にあたり廊下ではない。

③廊下状の構造物と谷樋の複合建築 絵図や現存建築で確認できた例はない。上述の絵図の例はいずれも廊下そのものに屋根がかかっており、谷樋を固定するとみられる柱もない。

④掘立柱建物2の張り出し構造物 図79-4は12世紀代に成立した『信貴山縁起絵巻』の第二巻「延喜加持の巻」の一場面である。描かれているのは、当時重病を患っていた醍醐天皇が、朝護孫子寺（信貴山寺）の僧命蓮の靈験を聞き、勅使を向かわせて加持祈禱の依頼をしている様子である。図の建物内にいる右側の人物が命蓮で、その左側が勅使、建物の外に侍するのが勅使の従者である。命蓮と勅使の座している場所は、建物から張り出した出屋になっている。ここからわかるのは、出屋が勅使と相対するような空間であったということである。

以上絵図と現存建築を参考に、今回検出した建物が三次元的にどのような構造になるのかを見てきたわけだが、以下では上述の例のなかで今回の調査例にそぐわない幾つかのものを排除してゆきたい。まず図79-1・2の屋根を持つ廊下であるが、これらは三間ないしはそれ以上の長さを有するものであり、廊下自体に屋根が架かっている。今回検出した掘立柱建物2・3は、二棟の屋根が近接しているため、その間に廊下を渡してさらにその上に屋根を架ける間隔はない。図79-1・2は寝殿造り建築に不可欠な、池に注ぐ遣り水と、寝殿・脇殿の配置関係が必然的に組み合わさった構造のもので、今回の調査で検出した建物の直接的な類例とはできない。

つぎに図79-3の屋根を伴わない廊下の例であるが、これは建物の格式に拘るものと考えられ、今回の調査例にはそぐわないといえる。とはいっても、この可能性を否定できるような調査事実があるわけでもないため、考慮すべき事例としては残るもの、選択肢としての優先順位は低い。

つぎに、図79-4の出屋については、絵図からうかがうことのできる状況を整理してみたい。まず前述したように、この出屋は僧命蓮が勅使と会合した空間であったことに留意したい。すなわち、出屋は勅旨との会合に相応しい空間であったのである。さらにこの出屋の前面では、崖が切り立っている状況がわかる。朝護孫子寺の現在の立地を考えれば、出屋の前面は絵図が描くとおり崖が切り立っている状況で、出屋はかなりの眺望が効く空間であったと推測される。このような空間であるからこそ、勅旨を迎えることができたのであり、出屋はこの建物の中で最も格式の高い空間であったといえよう。逆に言えば、崖沿いのその眺望を利用するに、建物を張り出させたとも考えられる。このような条件を鑑みれば、今回の調査で検出された柱穴列の場所には、同様の条件を見出すことができない。先の例と同様、否定はできないが選択肢としての優先順位は低い。

以上のように考えると、図79-5・6に示した東大寺法華堂の正堂と礼堂の例が今回の掘立柱建物2・3に最も近いものといえる。前述したように法華堂の建築構造は、礼堂が床張り、正堂が土間という一見複雑なものであるが、これは正堂側が高く礼堂側が低いという法華堂近辺の旧地形に合わせたもので

あり、この建築構造の特殊さをもって今回の検出例との異質性を説く必要は全くない。そして谷樋を通して廊下状の構造物が設けられた可能性を考慮する必要があるだろう。ここでは掘立柱建物2・3は、谷樋と廊下を併せ持った建築構造であった可能性が最も高いことを指摘しておきたい。

#### (5) 掘立柱建物2・3の性格

前項で掘立柱建物2・3の造営時期と存続時期が限定でき、さらにその建築構造が推測された。最後にこれらの検討を受けて、掘立柱建物2・3の性格について考察したい。

今回の建物群のような四面廂建物やその付属建物が発掘調査で検出された場合一般的に想定されているのは以下の可能性である（奈良文化財研究所2012）。

- ①国衙や郡衙、駅家など官衙の正殿、もしくは末端官衙
- ②寺院建築
- ③神社建築
- ④莊園管理をおこなう莊屋
- ⑤貴族の邸宅

もちろん上記以外にも離宮や頤宮、来朝使節を迎える迎賓館の建物などが考えられるが、それほどまでの施設なら何らかの文献史料が残っているべきで、また逆に史料がない以上そういう施設にあてることもできない。さしつけ、上記5つのなかにその可能性が内包されていると考えたい。

①官衙の正殿、もしくは末端官衙 調査地は延暦12年以降摂津国となるが、それ以前は摂津職であった。今回検出された建物は、摂津国の時代のものとも摂津職の時代のものともいえるが、職もしくは国の国府所在地は西成郡、現在の大都市内に比定されている。したがって、今回検出した建物が摂津職もしくは摂津国の国府関連遺構であるとは考えがたい。

続いて郡衙正庁の可能性についてであるが、調査地は摂津職（国）島下郡にあたり、この郡衙については茨木市の名神高速道路茨木インター近辺にある郡遺跡が有力な比定地とされている。そのため、今回の調査事例が摂津国島下郡衙関連の遺構になる可能性はまずない。さらに、古代官道の駅家についてであるが、調査地近辺に置かれた山陽道の駅家に関する史料は皆無であるため、これも候補からは外れることになる。そもそも国衙・郡衙・駅家といった官衙施設では、律令制下の文書行政を職掌とする場所であるため、今回の調査例のように木簡や墨書き土器などの文書行政の痕跡が窺われない場合は、官衙として認定するのはきわめて難しい。したがって、郡衙や駅家の末端施設の可能性も極めて低いといえよう。

②寺院建築 前項で掘立柱建物2・3のあきらかな類似例は東大寺法華堂であると述べた。となると、掘立柱建物2・3は寺院建築であったという可能性が想起されるがこれについても難しい。日本古代の寺院建築には一般的に瓦葺き堂舎を用いる。確かに東国（奈良）の四面廂建物の例では、瓦葺きを採用しない村落内の寺堂が多々見られることは事例としてある（奈良文化財研究所2006）。とはいえ、畿内およびその周辺の寺院建築のほぼすべてにおいて瓦葺きを採用していることを考えると、瓦の出土に乏しい掘立柱建物2・3が寺院建築であったと証明することは難しい。また瓦葺の是非に関わらず、寺院建築では僧侶の持物である鉢や数珠などの法具類や、持仏堂内に置かれた堆仏や土製塔などの什具類、悔過などの法会で使用された燈明皿等の出土が通有の例である。こういった遺物の類も出土しておらず、寺院建築と認定する条件は皆無といってよい。さらに、掘立柱建物2は身舎の柱間よりも廂間が広いことを

報告したが、これも仏堂ではありえない。仏堂の身舎には本尊を設置し、その南面に扉を付けるため身舎の柱間は廊間よりも広くなるのが必定である。

③神社建築 多くの神社は遷宮を繰り返すため、古代の神社建築が現存している例は皆無である。したがってその参考例は発掘調査成果に拠らねばならない。2006年までの調査事例を対象とした合田幸美による神社遺構の集成によると（合田2006）、奈良・平安時代の神社推定建物は出雲大社を例外としてすべてが60m以下の平面規模である。したがって100m近い掘立柱建物2の平面規模は神社としては大きすぎる。さらに掘立柱建物2・3は連結していた可能性が高く、同時併存していたといえるが、奈良・平安時代の神社建築は本殿のみで構成され、今回の調査事例のような複数の建物が組み合わさるというような建築構成を持たない。したがって今回の調査事例が神社建築である可能性は低い。

④莊園関連建物 調査地近辺には古くから吉志部という地名が残っており、『醍醐雜事記』に書かれた「吉志庄」（以下括弧書き省略、庄・莊の区別は原典のまま、それ以外は莊で統一）は付近一帯がその候補地とされる。『醍醐雜事記』によると吉志庄は、承平7（937）年に下野守藤原忠紀から醍醐天皇の中宮藤原隱子の家政機関である中宮職に売られ、その後11世紀中頃に醍醐寺の末寺宝塔院の所領になったとされる。この内容から逆算すると、吉志庄は中宮職に売られる承平7年よりも前に成立しており、その領主は藤原忠紀であった。掘立柱建物2・3の検出当初はその時期を限定する遺構・遺物が少なく、先述の1012井戸（図79）の調査成果と包含層出土遺物から10世紀頃に建立されたと漠然と捉えていた。実際、現地説明会当時においても同様の説明をおこなっている。そのため、当初掘立柱建物2・3と吉志庄は、ややまとすると密接につながるものと考えられ、これらの建物群を吉志庄関連ものと考えるむきもあった。しかし前述したように調査の進展によって、掘立柱建物2・3の建立時期は8世紀末から9世紀初頭であることがほぼ確実視され、『醍醐雜事記』に記された吉志庄よりもはるかに遡ることがあきらかになったのである。もちろん掘立柱建物2・3が、吉志庄立券当初時の関連施設であった可能性はある。とはいっても、地名と莊園名が通じるからといって、調査地を吉志庄ないしはその関連地とするのはいさざか早計といえる。例えば、摂津國島上郡に成立した東大寺の初期莊園である水無瀬莊の立地を参考にしてみよう。水無瀬莊は天平勝宝8歳（756）に成立した東大寺の莊園であるが、その名前から水無瀬離宮の後身である現在の水無瀬神宮（阪急水無瀬駅北東）あたりをその地に想像しがちである。しかし水無瀬莊には天平勝宝8歳（756）の年紀を有する莊園絵図が正倉院に伝わっており、絵図の現地比定と地名考証からそこよりも1km以上北西の山裾にある、島本町字東大寺の地に同莊園があったことが確実視されている（出田1996）。水無瀬莊の例をみても莊園名となる地名が示す範囲は以外にも広大で、例えば吉志庄が丘陵裾部の現在の吉志部神社付近にあったとしても何ら不思議はないのである。ここでは以上の理由により、掘立柱建物2・3が吉志庄関連施設である可能性については留保しておきたい。

ただし、今回検出した建物群が吉志庄との関連が積極的に説けないとはいっても、史実に残らなかった莊園に関連する可能性は否定できない。そこで、文献史料や絵画資料にみられる莊園管理施設である、莊屋の実態を確認しておく必要がある。文献史料で莊屋について記録が残っているのは、正倉院文書中の越前国足羽郡桑原莊関連文書が挙げられる。例えば天平勝宝8歳（756）の年紀を持つ『越前国司解』（『大日本古文書』4巻-111頁）には、「東大寺越前国来原（桑原）莊券」として桑原莊内にある莊屋の記載がある。そこには、「板屋二間」とありその内訳に「一間長三丈六尺、広二丈八尺」（桁行36尺・梁間28尺）、「一間長二丈、広一丈三尺」（桁行20尺、梁間13尺）と書かれ、桑原莊の莊屋の平面形態がわかる。

ほかにも同文書の中には複数の荘屋の構造が書かれているが、いずれも上記とほぼ同様の規模である。上記の荘屋の2建物は、桁行36尺・梁間28尺（約11m×8.4m）、桁行20尺・梁間13尺（約6m×4m）と掘立柱建物2の規模よりも小さいものであったことがわかる。他にも正倉院文書中には桑原荘の荘屋についての平面規模の記載があるが（『大日本古文書』4巻-52頁・4巻-219頁、4巻-246頁）、いずれも上記とほぼ同じ規模のものばかりである。つぎに絵図資料としては、正倉院に所蔵されていた「道守莊開田地図」に荘屋の描写がある（東京大学史料編纂所1965）。道守莊はさきの桑原荘と同じ越前国足羽郡に位置した荘園で、絵図中には天平神護2（766）年の紀年があるが、この絵図の北東部分に東西方向2列に立ち並ぶ荘屋が6棟描かれている。この「道守莊開田地図」の荘屋の描写も、上記の桑原荘の荘屋と同様の規模で、今回対象とする掘立柱建物2よりも小さいものである。

以上のように、掘立柱建物2はその平面規模から考えて初期荘園の管理施設である荘屋とは考えがたい。ただし、荘園領主の邸宅であった可能性は残るが、これについては貴族の邸宅の範疇にあるため次項で検証する。

⑤貴族の邸宅 最後に残った可能性が貴族の邸宅である。貴族の邸宅というと、漠然とした性格となるがおそらくこの可能性が最も高いといえる。すでに報告したように、四面廁建物で身合柱間よりも廁間を広くとる構造は、平安京では現段階での検出例の65.8%で採用されており（家原2012）、京内の貴族の邸宅の主流であったと考えられる。また木簡や墨書き器の出土がないことも、文書行政とはかけ離れた個人宅の様相を示していると考えたい。さらに饗宴などのハレの場で使用される施釉陶器類がまとまって出土していることも理由として挙げられよう。もちろん、長々と資料・史料を掲げて①～④の可能性を否定してきたわけだが、これらの可能性が全く無いと断言することはできない。また貴族の邸宅という性格は、漠然としておりどのような貴族層なのかという限定が難しい。例えば上述したような平安京内に本宅を構える荘園領主の別邸を考えることもでき、平安京内に住する貴族が荘園とは関係なく別邸を構えたと考えることもできる。可能性としては、掘立柱建物2・3の創建が8世紀末から9世紀初頭であるという推察から、平安遷都に携わった貴族の別邸という解釈もできるだろう。付近に平安宮所用瓦窯である吉志部瓦窯があること、周辺の調査で吉志部瓦窯産の瓦類がまとまって出土していること（センター2016）もその推測の一助となるかもしれない。

どのような可能性にせよ、今回の調査成果は吹田市域のみならず淀川北岸の古代史を考えるうえで重要な調査成果であることには変わりない。この報告書が、同地域の歴史研究の一資料となれば幸いである。

後註 余談ではあるが、折口信夫は平安貴族の邸宅を復元するには絵巻物が最も参考になると説いている（折口1975）。

#### 参考文献

- 家原圭太2012「都城と周辺地域の四面廁建物」第15回古代官衙・集落研究会報告書7『四面廁建物を考える』奈良文化財研究所  
出田和久1996「摂津職島上郡水無瀬荘園」金田章裕・石上栄一・鎌田元一・柴原永遠男編『日本古代荘園図』東京大学出版会  
上原真人1984「天平12、13年の瓦工房」『研究論集VII』奈良国立文化財研究所学報第41冊 奈良国立文化財研究所  
折口信夫1975「王朝」『折口信夫対話1 古典と現代』角川書店

- 木村理恵2010「薬師寺西僧房出土須恵器小考」『奈良文化財研究所紀要』奈良文化財研究所
- 合田幸美2006「神社遺構集成」『研究調査報告 第4集』財団法人大阪府文化財センター
- センター1999『吹田操車場遺跡』(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第42集
- センター2001『吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第66集
- センター2006『片山荒池遺跡』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第145集
- センター2008『吹田操車場遺跡III』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第180集
- センター2010『吹田操車場遺跡IV』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第201集
- センター2011『吹田操車場遺跡V』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第216集
- センター2012『明和池遺跡1 吹田操車場遺跡8 西の庄東遺跡』(公財) 大阪府文化財センター調査報告書 第232集
- センター2012『明和池遺跡2』(公財) 大阪府文化財センター調査報告書 第226集
- センター2013『吹田操車場遺跡9』(公財) 大阪府文化財センター調査報告書 第240集
- センター2014『吹田操車場遺跡10・明和池遺跡3』(公財) 大阪府文化財センター調査報告書 第248集
- センター2015『吹田操車場遺跡11』(公財) 大阪府文化財センター調査報告書 第262集
- センター2016『吹田操車場遺跡12』(公財) 大阪府文化財センター調査報告書 第270集
- 東京大学史料編纂所1965『東大寺開田図』東京大学出版会
- 奈良文化財研究所2006『在地社会と仏教』
- 奈良文化財研究所2012『四面廁建物を考える』
- 箱崎和久2012『身舎外周列の解釈と上部構造』第15回古代官衙・集落研究会報告書『四面廁建物を考える』奈良文化財研究所
- 山下峰司1995『灰釉陶器・山茶椀』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

表3 群集土坑一覽表1

土坑番号	長径	短径	検出高(T.P.m)	底面高(T.P.m)	深さ(m)	地区割	埋土	遺物出土	挿図	写真図版
351	1.3	1	6.85	6.71	0.14	2E-5i	A			
352	2	1.6	6.99	6.7	0.29	2E-5i,5j	C			
353	2.7	2.3	6.86	6.7	0.16	2E-5i,5j	B			
354	2.4	1.3	7	6.67	0.33	2E-5j	A			
366	1.3	0.8	7.09	6.82	0.27	2E-5i	B			
367	1.6	1.2	7.05	6.73	0.32	2E-5i	C			
368	0.9	0.8	7.14	6.97	0.17	2E-6j	A			
369	0.9	0.7	7.19	6.83	0.36	2E-6j	A			
370	1.2	0.8	7.13	6.94	0.19	2E-6j	C			
371	2.2	1.4	7.14	6.77	0.37	2E-5i,6i	A			
372	1.6	1.6	7.14	6.77	0.37	2E-5i,6i	B			
374	1.5	1.3	7.12	6.8	0.32	2E-6j	B			
401	2.8	2.3	7.31	7.15	0.16	2E-7a	A			
402	1.8	1.5	7.25	7.05	0.2	2E-7a	C			
403	3.2	1.8	7.24	6.94	0.3	2E-7a	A			
404	2.5	1	7.18	7.08	0.1	2E-7a	A	○	図版31-1	
405	1	0.7	7.2	6.98	0.22	2E-6a	A	○	図版67	図版31-2
406	1.1	1.1	7.12	7.09	0.03	2E-6j	B			
408	3.4	1	7.12	6.92	0.2	2E-7a	B			
423	1.1	0.86	7.22	6.94	0.28	2E-5a	A	○	図版68	図版31-3
424	2.5	2.2	7.17	7.01	0.16	2E-6j	A	○	図版69	
442	2	1.3	7.4	6.9	0.5	3E-2i,3j	A			図版34-2
443	2.9	2.6	7.3	6.64	0.46	3E-2a	A			
444	5.6	3.3	7.23	6.8	0.43	3E-2a	A			
445	4.8	3.5	7.25	7.15	0.1	2E-1a	A	○	図版56	図版32-1+2
455	5.2	3.8	7.3	7.09	0.21	3E-2a	A			
456	3.3	1.4	7.36	7.24	0.12	3E-1h	B			
457	1.7	1.2	7.36	7.25	0.11	3E-1h	B			
458	3.6	1.4	7.42	7.27	0.15	3E-1h	C			
459	1.3	1	7.4	7.2	0.2	3E-1h	A			
460	3.6	2.9	7.39	7.23	0.16	3E-1i	A			
462	6	2.1	7.4	7.05	0.35	3E-1i	C			
465	2.2	1.6	7.16	7.01	0.15	2E-1j	B			
466	0.8	0.8	7.21	7.05	0.15	2E-1j	A	○	図版55	
467	2	0.8	7.13	7.05	0.08	2E-1j	C			
468	2.9	1.4	7.17	6.88	0.29	2E-7j	B			
469	2.1	1.8	7.23	7.06	0.17	2E-1j	A			
470	1	0.9	7.2	7.05	0.15	2E-7j	A			
472	2.6	1.2	7.08	6.84	0.24	2E-1i,2E-10j	B			
473	1.2	1.1	7.19	6.85	0.34	2E-7j	A			
474	2	1	7.17	6.99	0.18	2E-10j	B			
475	1.1	0.8	7.17	6.93	0.24	2E-10j	A			
477	1.8	1.3	7.06	6.74	0.32	3E-2j	C		図版34-1	
478	0.8	0.6	7.4	7.18	0.22	2E-1j	A	○	図版55	図版32-3
479	1.4	1.3	7.08	7.01	0.07	3E-2j	A			
480	1.2	0.8	7.21	7.06	0.15	3E-2j	B			
481	2.2	2.1	7.12	6.81	0.31	3E-2j	C			
482	1.7	1.5	7.16	6.77	0.39	3E-2j	A			
483	2.3	1.3	7.15	7.03	0.12	2E-1a	A			
484	1.8	1.3	7.2	7.03	0.17	2E-1a	C			
485	1.6	1.5	7.26	7.02	0.24	2E-1a	B			
486	1.5	1.3	7.26	7.12	0.14	2E-1a	A			
487	2.2	1.5	7.27	7.07	0.2	2E-1a	A			

表4 群集土坑一覽表2

土坑番号	長径	短径	検出高(T.P.m)	底面高(T.P.m)	深さ(m)	地区割	埋土	遺物出土	博団	写真図版
488	3.2	1.4	7.32	7.18	0.14	2E-10j,10s	B			
489	1.3	1	7.26	7.17	0.09	2E-10j	C			
490	1.1	0.8	7.23	7.03	0.2	2E-10j	A			
491	2.6	2.2	7.19	7.13	0.06	2E-10j	B			
493	1.9	1.2	7.37	7.24	0.13	2E-10j	A			
494	1.5	0.8	7.35	7.01	0.34	2E-10j	C			
495	1.9	1.3	7.27	7.09	0.18	2E-1a	A			
496	1.6	1.1	7.25	7.15	0.1	2E-1a	B			
497	1.6	0.9	7.27	7.13	0.14	2E-1a	A			
498	1.8	1.5	7.28	6.96	0.32	2E-1a	A			
499	1.7	1	7.25	7.14	0.11	2E-1a	C			
500	2.4	2.1	7.26	7.05	0.21	2F-10a	B			
501	1.4	1.1	7.19	7.04	0.15	2F-10a	A			
502	1.3	1.3	7.2	7.1	0.1	2F-9a	A			
503	2.3	1.5	7.21	7.03	0.18	2E-10j	B			
505	3.3	2.6	7.27	7.04	0.23	2E-1a,3F-2a	A			
506	1.5	0.7	7.38	7.18	0.2	2F-9b	A	○	図57	図版33-1
507	4	1.5	7.2	7.09	0.11	2F-9a	A	○	図58	図版34-3
508	2.4	2.3	7.27	6.98	0.29	2F-9a	A			
509	3.5	2.7	7.26	6.94	0.32	2F-9a	C			
511	1.8	1.1	7.31	7.04	0.27	2F-9a,9b	B			
512	1.2	0.7	7.32	7.05	0.27	2F-9b	A			
513	3.7	3	7.23	6.87	0.36	2F-9a	A			
514	1.8	1.1	7.26	7.12	0.14	2E-10s	A	○	図59	図版34-4
516	3.2	2	7.21	7.1	0.11	2E-9j	C	○	図60	図版34-5
517	1.9	1.6	7.17	6.96	0.21	2F-10a	A			
520	1.9	1.2	7.41	7.14	0.27	2E-9i	B			
521	2.5	2	7.41	7.08	0.33	2E-9i	A			
522	3.2	2.5	7.19	7.05	0.14	2E-9j	C			
523	3.8	1.9	7.15	6.86	0.29	2E-8j	C	○	図61	
524	3.2	2.8	7.21	6.6	0.61	2E-8a	B			図版34-6
525	4.6	2	7.3	6.94	0.36	2E-7a,b,8a	B	○	図62	図版33-2 図版34-7
526	2.2	1.9	7.23	6.98	0.25	2F-8a,8j	A			
527	1.9	1.9	7.17	6.88	0.29	2E-8j	C			
528	7.7	2.2	7.13	6.87	0.26	2E-8j	B			
529	2.8	1.9	7.1	6.98	0.12	2E-8j	A	○	図63	
530	2.2	1.7	7.01	6.87	0.14	2F-8a,8j	A			
531	3.5	1.7	7.17	6.9	0.27	2F-8a,8j	B			
532	1.9	1.2	7.14	6.97	0.17	2E-8i,j	A			
533	2	1.8	7.17	6.99	0.18	2E-8b	C			
535	2.9	1.2	7.23	6.91	0.32	2E-7g	A	○	図64	図版33-3
536	2	1.8	7.15	7.05	0.1	2E-7g	A		図64	
537	3	1.7	7.28	7.1	0.18	2E-7h,8h	A			
538	2.3	1.9	7.28	7.04	0.24	2E-7h,8h	A			
539	3.2	1.4	7.3	7.13	0.17	2E-8b	B			
542	3	2.3	7.23	7.08	0.15	2E-8b,8i	A			
543	1.9	1.1	7.29	7.05	0.24	2E-8i	A			
546	4.3	1.5	7.21	7.03	0.18	2E-8g,8h	A			
547	3.2	2.6	7.15	7.01	0.14	2E-8g	B			
550	4.7	1.5	7.14	7.04	0.1	2E-6h,6i	A			
551	1.4	0.8	7.12	6.86	0.26	2E-6b	C			
552	1.2	1.1	7.11	6.9	0.21	2E-6b	B			
553	2.4	0.9	7.11	6.92	0.19	2E-6h,6i	C			

表5 群集土坑一覧表3

土坑番号	長径	短径	検出高(T.P.m)	底面高(T.P.m)	深さ(m)	地区割	埋土	遺物出土	挿図	写真図版
554	5	2.5	7.09	6.84	0.25	2E-5a,2E-5i	A			
555	7	2.9	7.16	6.82	0.34	2E-6i,2E-5i	A			
556	2.3	1.6	7.11	6.98	0.13	2E-7i,7j	B	○	5965	国版34-8
557	2.7	2.5	7.18	6.97	0.21	2E-8j	A			
567	1.5	1	6.96	6.68	0.28	3E-2a	B			
568	2.7	1.4	7.04	6.84	0.2	3F-2a	A			
569	3.3	3	7.04	6.68	0.36	3F-2a	C			
570	1.6	1.4	7.05	6.76	0.29	3F-2a	B			
571	1.4	1	7.01	6.67	0.34	3F-2a	A			
572	2	1.3	7.13	7.04	0.09	2E-7j	C			
573	1.3	0.8	7.12	7.0	0.12	2E-7j	B			
574	1.7	1.3	7.23	6.97	0.26	2E-2i	A			
575	1	0.7	7.27	7.2	0.07	3E-1i	B			
576	1.3	0.9	7.24	6.86	0.38	2E-1j	B			
577	1.3	0.8	7.33	7.25	0.08	2E-2i	A			
578	0.8	0.8	7.32	7.3	0.02	2E-2i	A			
579	1.2	0.7	7.35	7.29	0.06	2E-2i	A			
580	1.3	0.7	7.32	7.18	0.14	2E-2i	A			
581	1.2	0.7	7.31	7.11	0.2	2E-2i	B			
582	3.2	1.7	7.3	7.19	0.11	3E-1i	A			
583	1.2	0.7	7.32	7.21	0.11	3E-1i	A			
584	2	1.3	7.33	7.22	0.11	3E-1i	A			
585	1.6	1.2	7.35	7.25	0.1	3E-1b,ii	B			
586	1.5	1.1	7.37	7.28	0.09	3E-1b,ii	C			
587	3.1	2.3	7.12	6.89	0.23	3F-2b	A			
588	1.8	1.4	7.22	6.84	0.38	2E-1b,3F-2b	B			
589	2.2	1.8	7.23	6.9	0.33	2E-1a,3F-2a	B			
590	2.4	1.5	7.15	7.01	0.14	2E-1a	B			
591	1.5	1.4	7.24	7.1	0.14	2E-1a	C			
592	2.1	1.6	7.3	7.11	0.19	2E-1a	A			
593	1.2	0.8	7.25	7.11	0.14	2E-1a	A			
594	2	1.8	7.25	7.15	0.1	2E-1a	C			
595	1.3	1.3	7.23	6.98	0.25	2E-1a	B			
596	1.6	0.9	7.27	7.14	0.13	2E-1a	A			
597	1.5	0.8	7.28	7.0	0.28	2E-1a	A			
598	3.5	2	7.34	7.15	0.19	2E-1a,2E-10j	A			
599	1.4	0.7	7.26	7.19	0.07	2E-1j	A			
600	1	0.9	7.32	7.07	0.25	2E-1j	A			
601	1.1	1	7.32	7.25	0.07	2E-10j	B			
602	1.1	0.9	7.33	7.18	0.15	2E-10j	A			
603	1.6	1	7.31	7.15	0.16	2E-10j	A			
604	2	1.8	7.28	7.09	0.19	2E-10j	C			
605	1	0.9	7.29	7.14	0.15	2E-10j	A			
606	2.5	1.5	7.22	7.11	0.11	2E-10j	A			
607	3.7	1.5	7.2	7.15	0.05	2E-10j	C			
608	1.5	1	7.18	7.01	0.17	2E-10j	B			
609	0.8	0.5	7.22	7.12	0.1	2E-10j	A			
610	1.3	1.1	7.12	7.08	0.04	2E-10j	A			
611	2	1	7.26	7.16	0.1	2E-10j	A			
612	1.2	0.7	7.24	7.04	0.2	2E-10j	A			
613	2	1.7	7.12	7.01	0.11	2E-10j	C			
614	1.5	1.2	7.14	7.05	0.09	2E-9j	B			
615	1.9	1.2	7.22	6.94	0.28	2E-9j	A			

表 6 群集土坑一覧表 4

土坑番号	長径	短径	検出高(T.P.m)	底面高(T.P.m)	深さ(m)	地区割	埋土	遺物出土	挿図	写真図版
616	0.7	0.7	7.23	7.16	0.07	2E-9j	A			
617	2.1	2	7.26	7.05	0.21	2E-9j	B			
618	1.7	1.3	7.43	7.1	0.33	2E-9h	A			
619	3.5	1.2	7.24	7.09	0.15	2E-9i	C			
620	1.9	1.2	7.43	7.31	0.12	2E-9i	B			
621	1.4	0.8	7.4	7.18	0.22	2E-9i	A			
622	1.3	0.8	7.22	7.08	0.14	2E-9i	A			
623	1.5	1.3	7.21	7.08	0.13	2E-9i	C			
624	1.3	1.2	7.33	7.17	0.16	2E-9i	A			
625	1.7	1.7	7.27	7.18	0.09	2E-8i	A			
626	1.3	1.2	7.27	7.15	0.12	2E-8i	C			
627	2.3	1.9	7.28	7.17	0.11	2E-8i	A			
628	0.9	0.8	7.18	6.98	0.2	2E-8i	B			
629	1.5	1.5	7.27	7.07	0.2	2E-8i	A			
630	1.2	0.8	7.33	7.1	0.23	2E-9i	A			
631	1.3	1.2	7.22	7.09	0.13	2E-9i	C			
632	2	1.2	7.21	7.11	0.1	2E-9i	B			
633	1.6	0.8	7.18	7.09	0.09	2E-9i	A			
634	2.5	2.3	7.28	7.1	0.18	2E-9j	A			
635	1.3	1.2	7.28	7.14	0.14	2E-9j	B			
636	2.3	2	7.26	7.1	0.16	2E-9j	A			
637	1.8	1.8	7.25	7	0.25	2E-9j	B			
638	2.1	1.5	7.26	7.05	0.21	2E-9j	A			
639	1.9	1.4	7.23	6.98	0.25	2E-9j	A			
640	1.4	0.8	7.11	7	0.11	2E-9j	A			
641	3.6	3	7.26	7.09	0.17	2E-9j	C			
642	2.2	1.6	7.21	6.86	0.35	2E-9j	B			
643	0.9	0.6	7.18	7.09	0.09	2E-8i	A			
644	1.3	0.7	7.15	7.1	0.05	2E-8j	A			
645	3.9	2	7.28	7.06	0.22	2E-8i	B			
646	3.1	2.2	7.27	7.09	0.18	2E-8h	A			
647	0.9	0.6	7.29	7.12	0.17	2E-8h	A			
648	1.4	0.8	7.31	7.18	0.13	2E-8h	C			
649	1.6	1.2	7.24	7.05	0.19	2E-8i	B			
650	1.6	1	7.16	6.99	0.17	2E-8i	A			
651	1.7	1.3	7.09	6.93	0.16	2E-8i	A			
652	1	0.6	7.07	7	0.07	2E-8i	A			
653	1.4	1.2	7.09	6.98	0.11	2E-8i	A			
654	1.2	0.9	7.29	7.03	0.26	2E-7h	B			
655	1.3	1	7.09	6.97	0.12	2E-7h	A			
656	3.6	0.6	7.17	7.11	0.06	2E-8h	C			
657	3.5	2.6	7.27	7.01	0.26	2E-7h	A			
658	2.6	1.6	7.29	6.96	0.33	2E-7g	A			
659	1.6	1.2	7.21	6.97	0.24	2E-7g	C			
660	3.3	1.3	7.19	6.97	0.22	2E-7g	B			
661	2.1	1.4	7.09	6.97	0.12	2E-7g	C			
662	1.7	1.7	7.1	6.93	0.17	2E-7h	A			
663	1.9	0.7	7.16	7.07	0.09	2E-7h	A			
664	1.9	1.1	7.09	6.96	0.13	2E-7h	A			
665	1.7	0.8	7.1	6.89	0.21	2E-7h	B			
666	1.9	0.6	7.06	6.96	0.1	2E-7h	A			
667	2	1.1	7.09	6.93	0.16	2E-7h	B			
668	1.1	0.9	7.09	6.93	0.16	2E-7h	A			

表7 群集土坑一覧表5

土坑番号	長径	短径	検出高(T.P.m)	底面高(T.P.m)	深さ(m)	地区別	埋土	遺物出土	挿図	写真図版
669	2.2	1.4	7.17	6.93	0.24	2E-6b,7h	A			
670	2	1.7	7.13	6.96	0.17	2E-7h	C			
671	1.2	0.8	7.13	7	0.13	2E-7h	B			
672	1.8	0.9	7.12	7	0.12	2E-7h	A			
673	4.6	2.6	7.12	6.99	0.13	2E-6b,7h	A			
674	1.4	0.7	7.11	6.92	0.19	2E-6h	B			
675	1.9	1.4	7.13	6.87	0.26	2E-6h	A			
676	0.8	0.8	7.09	7.03	0.06	2E-7h,7i	C			
677	1.2	0.8	7.08	6.94	0.14	2E-7h,7i	A			
678	1.2	0.7	7.09	6.94	0.15	2E-7i	B			
679	1.6	1.3	7.15	7.02	0.13	2E-6i	A			
680	2.4	1.6	7.11	6.93	0.18	2E-6i	A			
681	3.6	2.4	7.09	6.92	0.17	2E-6i	B			
682	2.3	1.2	7.01	6.89	0.12	2E-6i	A			
683	1.7	1.7	7.1	6.91	0.19	2E-6i	A			
684	2	1.4	7.02	6.89	0.13	2E-7i	B			
685	1.8	1.1	7.11	6.96	0.15	2E-7i	A			
686	2.4	1.7	7.12	7.03	0.09	2E-7i	A			
687	2.1	2	7.14	6.96	0.18	2E-7l,7j	C			
688	5	3.6	7.16	7	0.16	2E-7l,7j	B			
689	3.7	2.2	6.99	6.82	0.17	2E-7i	A			
690	2.4	2.4	7.12	6.95	0.17	2E-7i	A			
691	2	1.3	7.05	6.86	0.19	2E-7i	A			
692	2.5	2.3	7.14	6.94	0.2	2E-7i	A			
693	2.1	1.6	7.12	7.01	0.11	2E-8i	B			
694	4.2	2.4	7.14	6.99	0.15	2E-8l,8j	A			
695	2.1	2.1	7.21	7.07	0.14	2E-7j	A			
696	3.2	1.8	7.17	7.02	0.15	2E-7j	B			
697	2	1.6	7.15	6.99	0.16	2E-7j	A			
698	4	3.2	7.18	6.92	0.26	2E-7j	A			
699	1.9	1.7	7.29	7	0.29	2E-7j	B			
700	1.3	1	7.18	7.08	0.1	2E-7j	C			
701	3	2	7.18	6.98	0.2	2F-8a	A			
702	1.5	0.8	7.17	7.07	0.1	2E-8j	A			
703	1.7	1.4	7.13	7.07	0.06	2E-8j	A			
704	3.3	1.2	7.08	6.98	0.1	2E-8j	B			
705	4.1	3.9	7.19	6.91	0.28	2E-8l,9j	A			
706	2	1.7	7.22	6.99	0.23	2E-9j	C			
707	2	1.4	7.8	6.94	0.86	2F-8a	B			
708	2.7	2.2	7.18	6.94	0.24	2F-8a	A			
709	1.6	1.3	7.16	6.97	0.19	2F-8a	C			
710	0.9	0.7	7.15	6.89	0.26	2F-8a	B			
711	2.8	1.5	7.26	7.14	0.12	2F-8a	C			
712	1.1	1.1	7.12	6.88	0.24	2F-9a	A			
713	1.3	0.9	7.11	6.99	0.12	2F-9a	B			
714	3.6	2.2	7.21	6.87	0.34	2F-9a	A			
715	3	1.7	7.28	6.97	0.31	2F-9a	A			
716	2.1	1	7.16	6.93	0.23	2F-9a	A			
717	2.9	2.6	7.22	7.11	0.11	2F-9a	B			
718	1.3	0.8	7.34	7.22	0.12	2F-9a	A			
719	1.3	1.2	7.3	7.03	0.27	2F-10a	A			
720	1.5	1.4	7.12	6.72	0.4	2E-5i	A			
721	2.7	2.1	7.13	6.57	0.56	2E-5i	A			

表8 群集土坑一覽表6

土坑番号	長径	短径	検出高(T.P.m)	底面高(T.P.m)	深さ(m)	地区割	埋土	遺物出土	挿図	写真図版
722	2	2	7.16	6.7	0.46	2E-5i	A			
723	1.6	1.5	7.12	6.78	0.34	2E-5i	B			
724	1.9	1.7	7.13	6.99	0.14	2E-5i	C			
725	2.8	1.6	7.16	7	0.16	2E-6j	A			
726	1.4	1.2	7.16	6.92	0.24	2E-6j	A			
727	1.7	1.3	7.13	6.98	0.15	2E-6j	C			
728	1.6	1.3	7.19	7	0.19	2E-6j	A			
729	1	0.6	7.17	6.98	0.19	2E-6j	B			
730	1	1	7.18	7.03	0.15	2E-6j	B			
731	1	0.7	7.08	7.04	0.04	2E-6j	A			
732	1.2	0.9	7.18	7	0.18	2E-6j	A			
733	1.7	0.8	7.21	6.99	0.22	2E-6j	A			
734	1.8	1.1	7.23	6.95	0.28	2E-6j	A			
735	1.5	1.3	7.21	7.08	0.13	2E-6j	A			
736	1.6	1.2	7.18	7.05	0.13	2E-6a	B			
737	1.8	0.7	7.23	7.04	0.19	2E-6a	B			
738	2.5	1	7.21	7.07	0.14	2E-6a	A			
739	1.8	1.4	7.19	7.02	0.17	2E-7a	A			
740	1.8	1.4	7.2	6.95	0.25	2E-7a	A			
741	1.2	0.9	7.31	7.14	0.17	2E-7a	A			
742	1.9	1.4	7.32	7.06	0.26	2E-7a	C			
743	1.7	0.9	7.3	7.03	0.27	2E-6a	B			
744	1.2	1.2	7.19	7.02	0.17	2E-7a	B			

表9 遺物観察表1

遺物番号	実測番号	種別	器形	残存率	出土層名	出土遺構	第III区画	第IV区画	内外調整
1	178	縁輪陶器	楕	10%以下	第2層		2E	7j	外面：ナデ、貼り付け高台、施釉 内面：ナデ、施釉
2	192	縁輪陶器	楕	10%以下	第2層		2E	7i	外面：ナデ、施釉 内面：ナデ、施釉
3	160	灰輪陶器	楕	10%以下	第2層		2F	7a	外面：削り出し高台 内面：施釉
4	165	灰輪陶器	楕	10%	第2層		2E	7j	外面：不明 内面：施釉
5	6	縁輪陶器	壺	10%以下	第2層		2F	9d	外面：施釉 内面：施釉
6	172	灰輪陶器	楕	10%以下	第2層		2F	10a	外面：ナデ、貼り付け高台 内面：ナデ、施釉
7	188	灰輪陶器	楕	20%	第2層		2E	8j	外面：ナデ 内面：ナデ
8	179	白磁	楕	10%以下	第2層		2E	7j	外面：露胎+回転ナデ、施釉 内面：ナデ、施釉
9	163	灰輪陶器	壺	10%以下	第2層		2E	7j	外面：施釉 内面：回転ナデ
10	182	灰輪陶器	壺	10%以下	第2層		2F	9a	外面：ナデ 内面：ナデ
11	164	白磁	楕		第2層		2E	7j	定・素盞系 外面：削り出し高台
12	175	灰輪陶器	壺	80%	第2層		2E	6j	外面：施釉、ナデ 内面：ナデ、自然釉
13	239	石製品	石磨		第2層		2E	8j	風化している
14	170	土師器	杯	40%	第2層		2F	4b	外面：回転ナデ、ナデ+指オサエ 内面：回転ナデ
15	171	土師器	皿	40%	第2層		2F	4b	外面：横ナデ、細かいヘラ削り 内面：横ナデ
16	233	瓦器	楕	30%	第2層		2F	3a	外面：ナデ後剥き、指オサエ後剥き、貼り付け高台 内面：ナデ後剥き
17	199	須恵器	杯蓋	25%	第2層		2E	11	外面：ナデ、回転ヘラ削り、回転ナデ 内面：回転ナデ
18	202	須恵器	楕	10%	第2層		2E	11	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：横ナデ、回転ナデ
19	201	須恵器	杯	15%	第2層		2E	11	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
20	173	須恵器	壺	20%	第2層		2F	10a	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ
21	185	須恵器	杯蓋	25%	第2層		2E	8i	外面：回転ナデ、回転ヘラ削り 内面：回転ナデ
22	184	須恵器	杯	50%	第2層		2E	8i	外面：回転ナデ、回転ヘラ削り 内面：回転ナデ
23	167	須恵器	壺	10%	第2層		2E	6j	外面：自然釉、ナデ、削り後ナデ 内面：ナデ
24	183	須恵器	鉢	20%	第2層		2F	9a	外面：回転ナデ、削り 内面：回転ナデ
25	191	須恵器	壺	10%以下	第2層		2E	7i	外面：指オサエ+ナデ、ハケ+ナデ、ナデ 内面：指オサエ+ナデ
26	193	須恵器	壺	10%以下	第2層		2E	8j	外面：ナデ、貼り付け安審 内面：ナデ
27	180	須恵器	棍瓶	40%	第2層		2E	9j	外面：回転ナデ、回転ヘラ削り、自然釉 内面：回転ナデ、自然釉
28	174	折腹土器	壺	10%以下	第2層		2E	6j	外面：沈痕、スタンプ文 内面：ナデ
29	200	須恵器	鉢	10%以下	第2層		2E	11	外面：ハケ目 内面：回転ナデ
30	205	須恵器	鉢	30%	第2層		2E	11	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ
31	181	須恵器	甕	60%	第2層		2F	9a	外面：同心円状のタタキ、タタキ後ハケ、タタキ 内面：不明
32	177	須恵器	壺	20%	第2層		2F	5a	外面：回転ナデ、タタキ後ナデ、タタキ 内面：回転ナデ、同心円状のタタキ
33	208	灰輪陶器	楕	10%以下	第3層		2F	5j	外面：回転ナデ、ナデ、貼り付け高台 内面：ナデ、施釉
34	237	縁輪陶器	楕	10%以下	第3層		2F	3a・3b	外面：ナデ、施釉 内面：ナデ、施釉
35	206	縁輪陶器	楕	20%	第3層		2E	5i	外面：ナデ、削り、施釉 内面：ナデ、施釉
36	238	縁輪陶器	楕	10%以下	第3層		2F	3a・3b	外面：回転ナデ 内面：ナデ、施釉
37	232	灰輪陶器	楕	10%	第3層		2F	3a	外面：回転ナデ、施釉

表 10 遺物観察表 2

遺物番号	実測番号	種別	器形	残存率	出土層名	出土遺構	第Ⅲ区画	第Ⅳ区画	内外面調整	
									外面	内面
38	217	土師器	皿	45%	第3層		2E	5J	外側：指サエ+ナデ。回転ナデ 内面：ナデ	
39	214	黒色土器	輪	10%	第3層		2E	5J	外側：ナデ。貼り付け高台 内面：磨き	
40	213	黒色土器	輪	10%以下	第3層		2E	5J	外側：ナデ。指サエ。貼り付け高台 内面：磨文	
41	68	須恵器	平瓶	10%以下	第3層		2E	5J	外側：ナデ。カキメ後ナデ 内面：ナデ	
42	226	灰釉陶器	輪	15%	第4-1層		2E	3J	外側：ナデ。回転ナデ。貼り付け高台 内面：磨跡	
43	227	土師器	皿	20%	第4-1層		2E	3J	外側：回転ナデ。回転ナデ+指オサエ 内面：回転ナデ、ナデ	
44	218	須恵器	皿	20%	第4-1層		2E	4J	外側：回転ナデ、ナデ 内面：ナデ	
45	215	須恵器	皿	15%	第4-1層		2E	4J	外側：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	
46	223	土師器	高环	20%	第4-1層		2F	6a	外側：ナデ+指オサエ、ヘラ削り 内面：匕口日	
47	225	灰釉陶器	皿	20%	第4-1層		2F	6a	外側：回転ナデ、ヘラ削り。露胎 内面：回転ナデ、輪付着	
48	216	須恵器	鉢	10%以下	第4-1層		2E	4J	外側：回転ナデ、貼り付け突起 内面：回転ナデ	
49	220	平瓦	平瓦	20%	第4-1層		2F	4a	外側：不明 内面：不明	
50	219	平瓦	平瓦	20%	第4-1層		2F	4a	外側：不明 内面：不明	
51	221	平瓦	平瓦	20%	第4-1層		2F	4a	外側：不明 内面：不明	
52	74	縦縫陶器	輪	10%以下		244井戸	2F	4b	外側：縦縫 内面：縦縫	
53	75	土師器	皿	20%		244井戸 <sup>2</sup>	2F	4b	外側：指オサエ 内面：不明	
54	77	瓦器	輪	10%以下		244井戸	2F	4b	外側：ナデ。横ナデ 内面：磨き	
55	76	瓦器	輪	10%以下		244井戸	2F	4b	外側：ナデ+指オサエ 内面：磨き	
56	85	瓦器	輪	10%		244井戸	2F	4b	外側：ナデ 内面：磨き	
57	88	須恵器	皿	10%		244井戸	2F	4b	外側：横ナデ。強い横ナデ。自然積 内面：横ナデ。自然積	
58	86	瓦器	輪	20%		244井戸	2F	4b	外側：ナデ+磨き。指オサエ+磨き 内面：不明	
59	79	瓦器	輪	20%		244井戸	2F	4b	外側：ナデ。指オサエ後磨き 内面：磨き	
60	83	瓦器	輪	20%		244井戸	2F	4b	外側：ナデ。磨き 内面：ナデ	
61	84	瓦器	輪	10%		244井戸	2F	4b	外側：指オサエ後磨き。強い横ナデ。磨き 内面：磨き	
62	82	瓦器	輪	20%		244井戸 <sup>2</sup>	2F	4b	外側：横ナデ後磨き。指オサエ後磨き 内面：横ナデ後磨き	
63	87	瓦器	輪	30%		244井戸	2F	4b	外側：不明 内面：不明	
64	80	瓦器	輪	90%		244井戸	2F	4b	外側：ナデ。磨き+指オサエ 内面：磨き	
65	81	瓦器	輪	30%		244井戸	2F	4b	外側：回転ナデ。指オサエ。磨き 内面：磨き	
66	71	金属製品	刀	80%		244井戸	2F	4b	外側：不明 内面：不明	
67	42	土師器	皿	98%	98土坑	2F	5a	外側：回転ナデ。指オサエ+ナデ 内面：回転ナデ、ナデ		
68	43	土師器	皿	99%	98土坑	2F	5a	外側：指オサエ+ナデ回転ナデ 内面：ナデ		
69	94	瓦器	輪	10%	292土坑	2F	4a	外側：ナデ 内面：磨き		
70	93	瓦器	輪	10%以下	292土坑	2F	4a	外側：不明 内面：磨き		
71	91	瓦器	輪	10%	299土坑	2F	4a	外側：指オサエ後磨き。強いナデ 内面：磨き。ナデ		
72	30	縦縫陶器	輪	10%以下	9清	2E	4J	外側：輪 底面系切り 内面：縦縫		
73	10	縦縫陶器	輪	10%以下	9清	2E	4J	外側：縦縫 内面：縦縫		
74	24	灰釉陶器	皿	10%以下	9清	2E	5J	外側：堅輪（少） 内面：堅輪（少）		

表 11 遺物観察表3

遺物番号	実測番号	種別	器形	残存率	出土層名	出土遺構	第Ⅲ区画	第Ⅳ区画	内外面調整	
									外面	内面
75	32	縦輪陶器	桜	10%以下	9溝	2E	4j		外面：施釉 内面：施釉	
76	23	灰釉陶器	壺	10%以下	9溝	2E	5j		外面：回転ナデ、施釉 内面：回転ナデ	
77	15	灰釉陶器	桜	10%以下	9溝	2F	3a		外面：施釉 内面：施釉	
78	48	縦輪陶器	壺	10%以下	9溝	2F	3a		外面：ナデ、施釉 内面：ナデ、施釉	
79	26	白磁	桜	10%以下	9溝	2E	6j		外面：回転ナデ、施釉 内面：施釉	
80	33	瓦器	桜	10%以下	9溝	2E	6j		外面：不明 内面：不明	
81	20	黒色土器	桜	10%以下	9溝	2E	5j		外面：不明 内面：不明	
82	13	黒色土器	桜	10%以下	9溝	2F	3a		外面：横ナデ 内面：焼文あり	
83	14	土師器	杯	20%	9溝	2F	3a		外面：不明 内面：不明	
84	36	土師器	皿	10%以下	9溝	2E	6j		外面：ナデ、横ナデ 内面：横ナデ	
85	21	黒色土器	桜	10%以下	9溝	2E	5j		外面：不明 内面：不明	
86	19	黒色土器	桜	70%	9溝	2E	5j		外面：ナデ、磨き。貼り付け高台 内面：磨き	
87	22	須恵器	杯蓋	10%以下	9溝	2E	5j		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
88	38	須恵器	鉢	10%以下	9溝	2F	10b		外面：回転ヘラ削り。回転ナデ 内面：ナデ	
89	27	須恵器	壺	10%以下	9溝	2E	6j		外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、袖（一部）	
90	35	須恵器	壺	10%以下	9溝	2E	6j		外面：ナデ、回転ナデ 内面：回転ヘラ削り	
91	29	須恵器	円面鏡	10%以下	9溝	2F	10c		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
92	28	須恵器	甕	10%以下	9溝	2E	4j		外面：不明 内面：不明	
93	37	須恵器	甕	10%以下	9溝	2F	10b		外面：タタキ、ナデ 内面：横ナデ、同心円当て具痕	
94	47	灰釉陶器	桜	10%以下	9柱穴	2F	7c		外面：横ナデ、施釉 内面：施釉	
95	45	灰釉陶器	桜	10%以下	9柱穴	2F	7c		外面：回転ナデ、回転ヘラ削り 内面：施釉	
96	46	黒色土器	桜	10%以下	9柱穴	2F	7c		外面：回転ナデ、粗オサエ 内面：磨き	
97	126	須恵器	杯	10%以下	409柱穴	2F	5b		外面：不明 内面：不明	
98	127	須恵器	桜	10%以下	409柱穴	2F	5b		外面：ナデ 内面：ナデ	
99	44	土師器	壺	10%以下	87柱穴	2F	7c		外面：回転ナデ、粗オサエ 内面：ナデ	
100	89	土師器	甕	10%以下	255柱穴	2F	4b		外面：縦ハケ後横ナデ、縦ハケ 内面：横ナデ、ハラ削り	
101	90	土師器	甕	10%	255柱穴	2F	4b		外面：回転ナデ、ハケ目 内面：ナデ、ハケ目	
102	55	須恵器	杯	10%	174柱穴	2F	5b		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
103	60	黒色土器	桜	10%以下	185柱穴	2F	5b		外面：ナデ 内面：不明	
104	58	土師器	壺	10%以下	182柱穴	2F	5c		外面：不明 内面：不明	
105	56	土師器	瓶	10%以下	181柱穴	2F	5c		外面：横ナデ、板ナデ 内面：ナデ	
106	59	瓦	平瓦	10%以下	183柱穴	2F	5c		外面： 内面：	
107	57	土師器	羽釜	10%以下	181柱穴	2F	5c		外面：ナデ；回転ナデ、粗オサエ 内面：ハケ目、ナデ	
108	50	土師器	皿	10%以下	169柱穴	2F	5c		外面：粗オサエ 内面：ナデ	
109	51	土師器	皿	50%	169柱穴	2F	5c		外面：粗オサエ、ナデ 内面：ナデ	
110	52	須恵器	杯蓋	10%以下	169柱穴	2F	5c		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
111	49	土師器	杯	20%	154柱穴	2F	6c		外面：不明擦 内面：不明擦	

表 12 遺物観察表 4

遺物番号	実測番号	種別	器形	残存率	出土層名	出土構造	第Ⅲ区画	第Ⅳ区画	内外面調整
112	128	土師器	杯	10%以下		412柱穴	2F	4b	外面：不明 内面：不明
113	129	土師器	杯	10%以下		413柱穴	2F	4b	外面：ナデ 内面：ナデ
114	53	須恵器	甕	10%以下		170柱穴	2F	5c	外面：横ナデ 内面：横ナデ
115	54	須恵器	甕	10%以下		171柱穴	2F	5c	外面：タタキ、横ナデ 内面：横ナデ
116	65	須恵器	杯	99%		208柱穴	2F	8c	外面：横ナデ 内面：ナデ
117	66	須恵器	杯	45%		208柱穴	2F	8c	外面：回転ナデ。回転ヘラ削り 内面：不明
118	67	土師器	皿	60%		208柱穴	2F	8c	外面：ナデ 内面：不明
119	64	土師器	羽釜	10%以下		208柱穴	2F	8c	外面：ナデ 内面：ナデ
120	40	土師器	甕	10%		208柱穴	2F	8c	外面：回転ナデ。ハケ目 内面：ハケ目ナデ。回転ナデ
121	62	土師器	把手付 鉢	30%		208柱穴	2F	8c	外面：横ハケ、ナデ 内面：ナデ。不明
122	63	土師器	甕	10%		208柱穴	2F	8c	外面：ナデ。ナデ+ハケ目、ハケ目 内面：指オサエコナデ。ハケ
123	61	土師器	甕	70%		208柱穴	2F	8c	外面：横ハケ、横ナデ。指オサエ 内面：ハケ。指オサエ
124	113	須恵器	杯	45%		349甕	2E	6j	外面：回転ナデ。回転ヘラ削り 内面：回転ナデ。
125	119	須恵器	杯	15%		349甕	2F	3a	外面：回転ナデ。貼り付け高台 内面：回転ナデ
126	112	須恵器	杯	25%		349甕	2E	6j	外面：回転ナデ。回転ヘラ削り 貼り付け高台 内面：回転ヘラ削り
127	109	須恵器	杯	10%以下		349甕	2E	5j	外面：ナデ。付着物あり 内面：ナデ
128	106	須恵器	杯	30%		349甕	2E	5j	外面：ナデ 内面：ナデ
129	111	土師器	杯	10%		349甕	2E	5j	外面：ナデ。強いナデ 内面：ナデ
130	105	須恵器	杯	10%		349甕	2E	5j	外面：ナデ 内面：ナデ
131	103	須恵器	杯	30%		349甕	2E	4j	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
132	102	須恵器	甕	10%		349甕	2E	4j	外面：ナデ 内面：ナデ
133	108	須恵器	甕	20%		349甕	2E	5j	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
134	114	須恵器	甕	10%以下		349甕	2E	6j	外面：ナデ 内面：回転ナデ
135	107	土師器	高环	10%以下		349甕	2E	5j	外面：凸角形、面取り 内面：ナデ。しばり目
136	115	土師器	高环	20%		349甕	2E	6j	外面：不明 10面面取り 内面：不明
137	116	土製品	土鍤	100%		349甕	2E	6j	外面： 内面：
138	104	瓦	軒丸瓦	10%以下		349甕	2E	5j	外面：削り 内面：
139	117	瓦	軒丸瓦	10%以下		349甕	2F	3a	外面：ヘラ削り。ナデ 内面：
140	118	瓦	軒丸瓦	10%以下		349甕	2F	3a	外面：ヘラ削り 内面：
141	120	須恵器	甕	10%以下		349甕	2F	3a	外面：ナデ。回転ナデ。貼り付け 内面：ハケ目
142	69	須恵器	杯	10%以下		230土坑	2F	5a	外面：回転ナデ 内面：指オサエ。回転ナデ 内面：ナデ
143	123	土師器	椀	50%		397土坑	2F	4b・4c	外面：ナデ。強いナデ 内面：ナデ
144	133	土師器	杯	10%以下		422土坑	2F	4b	外面：指オサエ後ナデ。ナデ 内面：ナデ
145	135	土師器	杯	20%		422土坑	2F	4b	外面：ナデ。回転ナデ 内面：ナデ
146	136	土師器	杯	10%以下		422土坑	2F	4b	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ
147	132	土師器	皿	10%		422土坑	2F	4b	外面：指頭压痕。ナデ 内面：ナデ。埴文
148	99	土師器	甕	20%		335土坑	2F	4b	外面：ナデ。赤軸彩 内面：ナデ

表 13 遺物観察表 5

遺物番号	実測番号	種別	器形	残存率	出土層名	出土遺構	第Ⅲ区画	第Ⅳ区画	外側調整	
									外面	内面
149	148	土師器	杯	70%		515土坑	2F	10h	外面：回転ナデ。削り	内面：回転ナデ
150	149	土師器	皿	60%		515土坑	2F	10h	外面：ナデ。横頭正直	内面：ナデ。縦文
151	140	土師器	甕	15%	441溝	2F	6e		外面：ナデ。ハケ目	内面：指オサエ+ナデ
152	98	須恵器	鉢	20%	334土坑	2F	4b		外面：横ナデ。へラ削り	内面：横ナデ。ナデ
153	152	須恵器	台付甕	70%		525土坑	2F	8j	外面：ナデ。削り。波状文	内面：ナデ
154	146	須恵器	甕	20%		507土坑	2F	9a	外面：回転ナデ	内面：ナデ
155	142	須恵器	甕	80%		445土坑	2E	1a	外面：ナデ。タタキ。タタキ後ナデ消し。カキメ	内面：工具痕。ナデ
156	138	須恵器	甕	99%		424土坑	2E	6j	外面：タタキ後ナデ。ハケ目。回転ヘラ削り	内面：不明
157	151	須恵器	横瓶	98%		516土坑	2F	9j	外面：回転ナデ。回転ヘラ削り。ナデ。円板貼り付け	内面：回転ナデ
158	154	須恵器	鉢	45%		529土坑	2F	8j	外面：回転ナデ。ナデ。回転ヘラ削り	内面：回転ナデ。ナデ
159	141	須恵器	鉢	60%		445土坑	2E	1a	外面：回転ナデ。ハケ目。回転ヘラ削り	内面：回転ナデ
160	125	須恵器	甕	90%		405土坑	2F	6a	外面：同心円状のタタキ後ナデ。タタキ後ハケ	内面：回転ナデ
161	147	須恵器	甕	60%		514土坑	2F	10h	外面：タタキ後ハケ。タタキ後ナデ	内面：ナデ
162	124	須恵器	甕	20%		404土坑	2F	7a	外面：同心円状のタタキ。タタキ後ハケ	内面：不明
163	137	須恵器	甕	60%		423土坑	2F	5a	外面：ハケ目+タタキ	内面：同心円状のタタキ
164	145	須恵器	甕	30%		506土坑	2F	9b	外面：横ナデ。カキメ。ナデ。タタキ	内面：横ナデ。同心円凸て具痕
165	158	須恵器	横瓶	65%		556土坑	2F	7i + 7j	外面：タタキ後ハケ。回転ナデ	内面：回転ナデ
166	143	須恵器	横瓶	30%		466土坑	2E	1j	外面：格子目タタキ。格子目タタキ後カキメ	内面：同心円状凸て具痕
167	157	須恵器	甕	30%		535土坑	2F	7g	外面：同心円状のタタキ。タタキ後ナデ	内面：不明
168	153	須恵器	甕	60%		525土坑	2F	8j + 7j + 8a	外面：同心円状のタタキ。タタキ後ハケ目	内面：不明
169	144	須恵器	甕	30%		478土坑	2E	2j	外面：ナデ。タタキ後ハケ	内面：不明
170	156	須恵器	甕	40%		535土坑	2F	7g	外面：同心円状のタタキ。タタキ後ハケ	内面：不明
171	6	弥生土器	甕	10%以下	1土坑	2F	9d	外面：ナデ	内面：ナデ	
172	4	弥生土器	甕	10%以下	1土坑	2F	9d	外面：ナデ	内面：ナデ	
173	7	弥生土器	甕	10%以下	1土坑	2F	9d	外面：ナデ	内面：ナデ	
174	8	弥生土器	甕	10%以下	1土坑	2F	9d	外面：ナデ	内面：ナデ	
175	3	弥生土器	甕	10%以下	1土坑	2F	9d	外面：ナデ。横ナデ	内面：ナデ。横ナデ	
176	2	弥生土器	甕	10%以下	1土坑	2F	9d	外面：横ナデ	内面：不明	
177	5	弥生土器	甕	10%以下	1土坑	2F	9d	外面：不明	内面：不明	
178	1	弥生土器	甕	30%	1土坑	2F	9d	外面：横付着	内面：不明	
179	139	弥生土器	甕	10%以下		425溝	2E	3a	外面：ナデ。板ナデ	内面：ナデ。指オサエ後ナデ
180	236	白磁	桜	10%以下	東側溝 (第2層)		2F	3a + 3b	外面：施釉	内面：施釉
181	211	緑釉陶器	桜	10%以下	第3層		2F	4b	外面：施釉	内面：施釉
182	212	緑釉陶器	桜	10%以下	第3層		2F	4b	外面：施釉	内面：施釉
183	73	緑釉陶器	桜	10%以下	244井戸	2F	4b	外面：施釉	内面：施釉	
184	11	緑釉陶器	桜	10%以下		9溝	2E	4j	外面：施釉	内面：施釉
185	207	緑釉陶器	桜	10%以下	第3層		2E	5i	外面：施釉	内面：施釉

表 14 遺物観察表 6

遺物番号	実測番号	種別	器形	残存率	出土層名	出土遺構	第Ⅲ区画	第Ⅳ区画	内外面調整
185	16	灰釉陶器		10%以下	第2層		2E	7J	外面：施釉 内面：施釉
186	162	灰釉陶器	碗	10%以下	第3層		2E	7J	外面：施釉 内面：施釉
187	209	灰釉陶器	碗	10%以下	第3層		2F	5J	外面：施釉 内面：施釉
188	168	灰釉陶器		10%以下	第2層		2F	4b	外面：施釉 内面：施釉
189	195	灰釉陶器	壺	10%以下	第2層		3F	1a	外面：施釉 内面：施釉
190	166	灰釉陶器	碗	10%以下	第2層		2F	4a	外面：施釉 内面：施釉
191	169	灰釉陶器	壺	10%以下	第2層		2F	4b	外面：施釉 内面：施釉
192	31	灰釉陶器		10%以下		9溝	2E	3a	外面：施釉 内面：施釉
193	16	灰釉陶器		10%以下		9溝	2F	3a	外面：施釉 内面：施釉
194	25	灰釉陶器		10%以下		9溝	2E	5J	外面：施釉 内面：施釉
195	210	灰釉陶器	碗	10%以下	第3層		2F	4b	外面：施釉 内面：施釉
196	17	灰釉陶器		10%以下		9溝	2F	3a	外面：施釉 内面：施釉
197	159	灰釉陶器		10%以下	第2層		2F	8b	外面：施釉 内面：施釉
198	18	灰釉陶器	碗	10%以下		9溝	2F	3a	外面：施釉 内面：施釉
199	230	頃壺器	鉢	10%以下	東側溝（第2層）		2F	3a	外面：ナゲ。肩付着 内面：ナゲ
200	229	金属製品		不明	第4-1層		2E	3J	外面：銹化 内面：銹化



# 写 真 図 版





1. 2区西半弥生時代～古代遺構面全景（北西から）

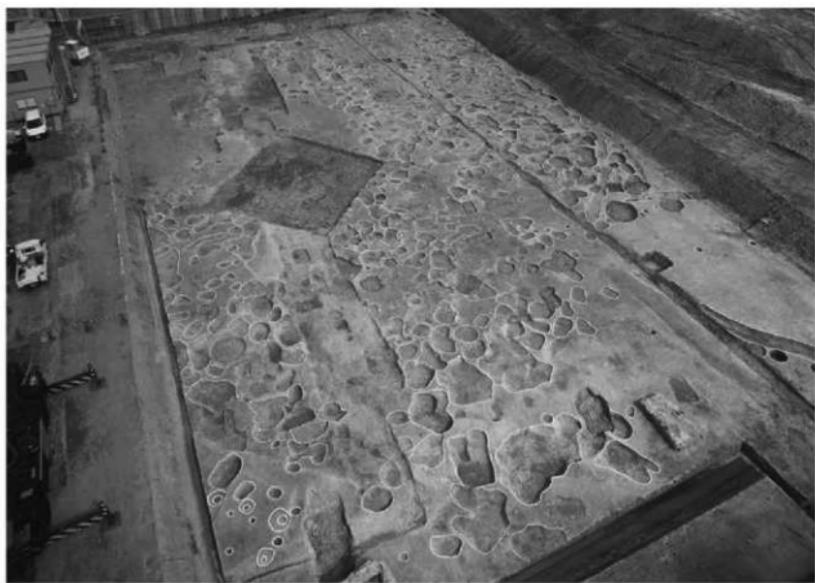


2. 2区東半古墳時代～古代遺構面全景（北西から）

図版2



1. 2区東半古墳時代～古代遺構面全景（北から）



2. 1区東半古墳時代～古代遺構面全景（北西から）

1. 1区 西壁断面（東から）



2. 1区 北壁断面（東から）



3. 1区 東壁断面（北東から）



図版4



1. 2区 南壁断面①  
(244 井戸付近、西から)



2. 2区 南壁断面②  
(東端、西から)



3. 2区 東端落ち込み断面  
(北西から)



1. 1区9溝完掘状況（西から）



2. 2区東端中世造構面（東から）

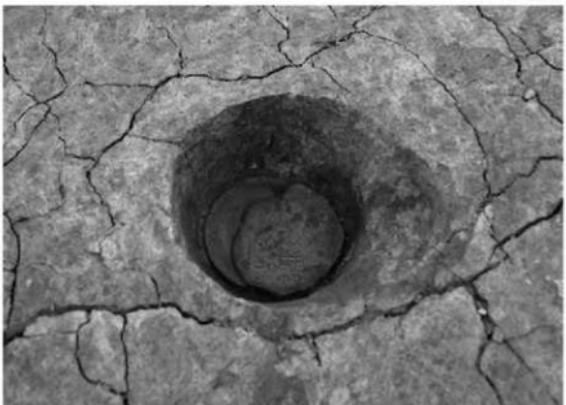
図版6



1. 1区東側中世遺構検出状況（南から）



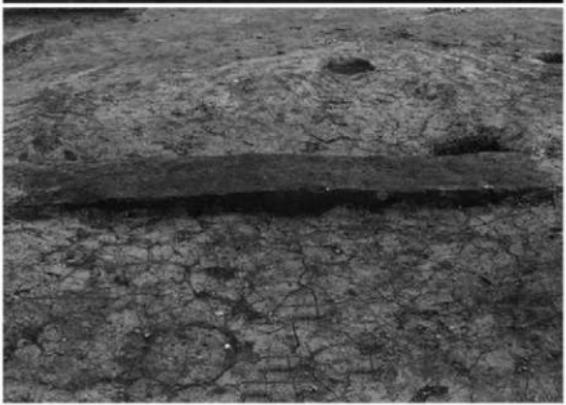
2. 1区東端中世遺構面（南から）



1. 2 区 58 土坑土器出土状況  
(東から)



2. 2 区 5 土坑断面 (北西から)



3. 2 区 292 土坑断面 (西から)

図版8



1. 2区 244 井戸断面  
(北東から)



2. 1区 9 溝完掘状況（南から）



3. 1区 9 溝南北断面（南から）



1. 2区 9溝断面（東から）



2. 2区 9溝内土器出土状況  
(南から)



3. 1区 454溝（西から）

図版 10



2.2区 建物群全景写真（上が北東）



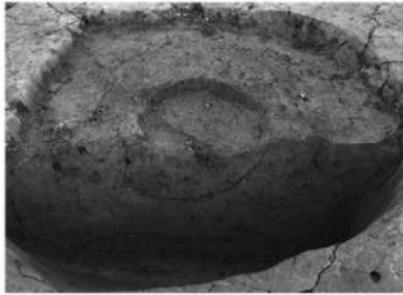
1. 2区 建物 1 全景 (南から)



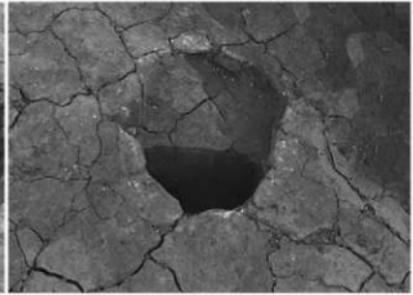
2. 199 柱穴断面 (西から)



3. 200 柱穴断面 (西から)



4. 201 柱穴断面 (西から)

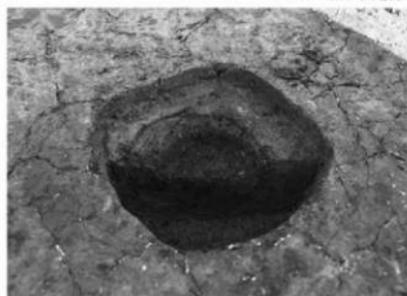


5. 202 柱穴断面 (西から)

図版 12



1. 2区 挖立柱建物2（南から）



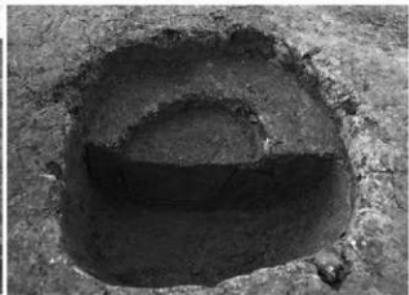
2. 87 柱穴断面（西から）



3. 88 柱穴断面（西から）



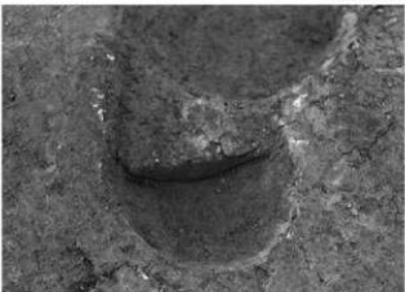
4. 89 柱穴断面（東から）



5. 90 柱穴断面（東から）



1. 91 柱穴断面（西から）



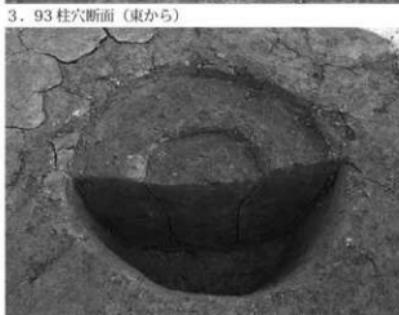
2. 92 柱穴断面（東から）



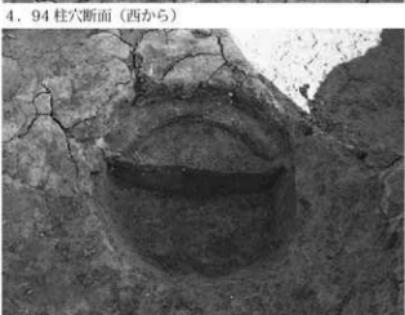
3. 93 柱穴断面（東から）



4. 94 柱穴断面（西から）



5. 95 柱穴断面（西から）



6. 96 柱穴断面（西から）

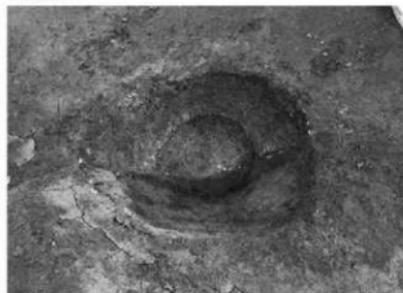


7. 69 柱穴断面（西から）



8. 70 柱穴断面（西から）

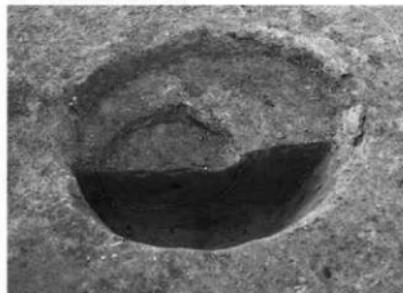
図版 14



1. 71 柱穴断面（西から）



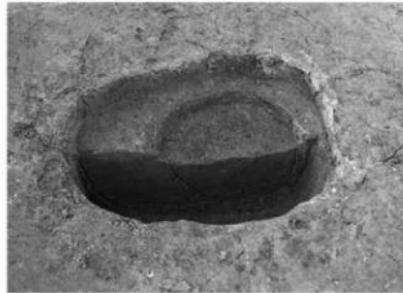
2. 72 柱穴断面（東から）



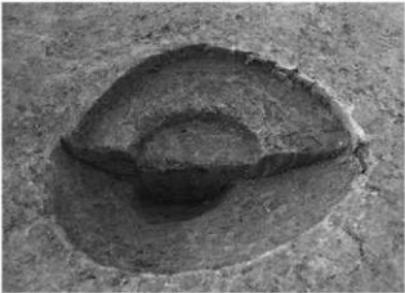
3. 73 柱穴断面（東から）



4. 74 柱穴断面（東から）



5. 75 柱穴断面（東から）



6. 77 柱穴断面（東から）



7. 78 柱穴断面（東から）



8. 79 柱穴断面（東から）



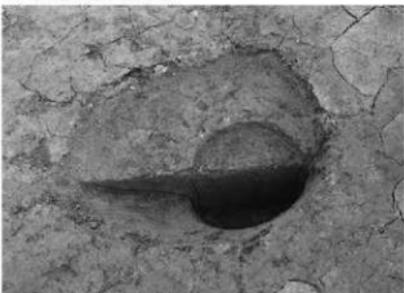
1. 245 柱穴断面（東から）



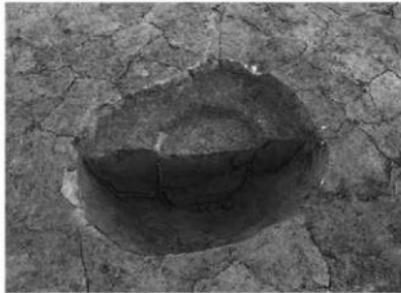
2. 81 柱穴断面（西から）



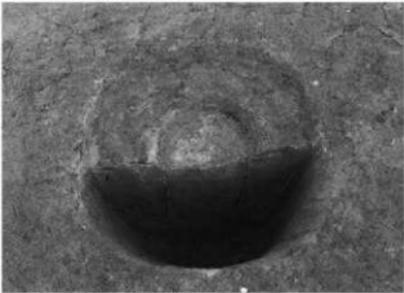
3. 82 柱穴断面（西から）



4. 83 柱穴断面（西から）



5. 84 柱穴断面（西から）



6. 85 柱穴断面（西から）

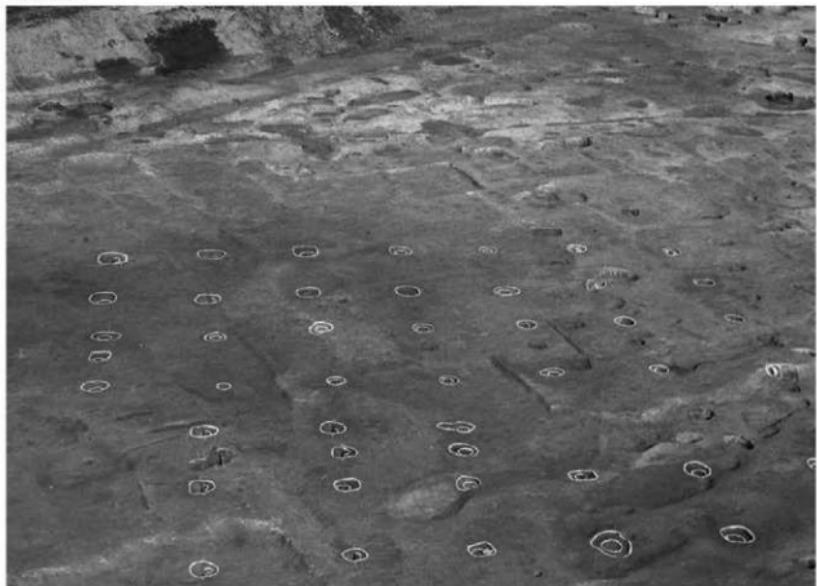


7. 86 柱穴断面（西から）

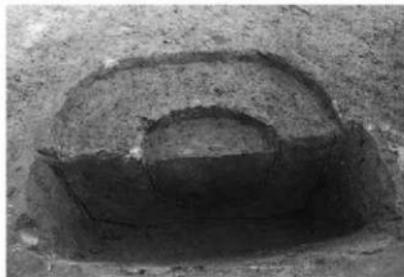


8. 39 柱穴断面（西から）

図版 16



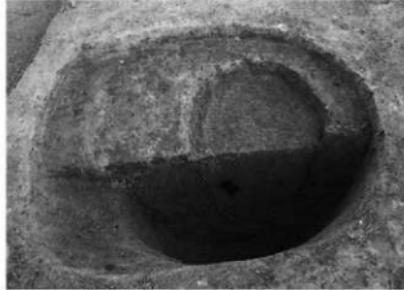
1. 2区 挖立柱建物3（奥）と連結敷設（手前）（南から）



2. 101柱穴断面（西から）



3. 120柱穴断面（北から）



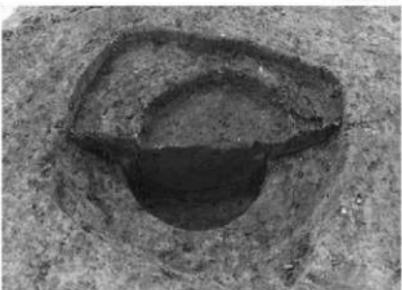
4. 119柱穴断面（西から）



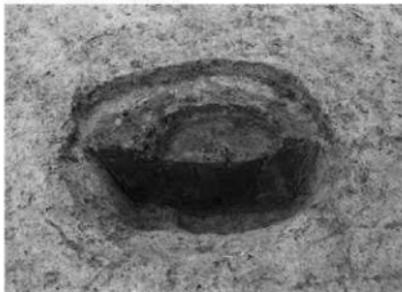
5. 118柱穴断面（西から）



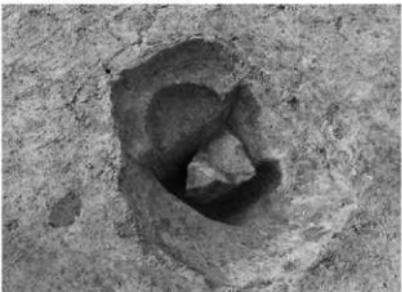
1. 117 柱穴断面（東から）



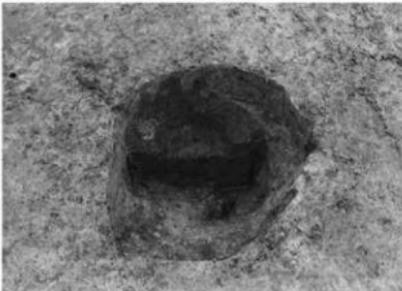
2. 116 柱穴断面（東から）



3. 115 柱穴断面（北東隅柱・東から）



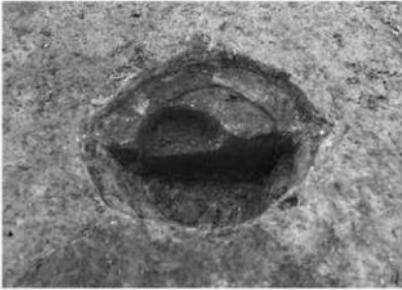
4. 114 柱穴断面（東から）



5. 113 柱穴断面（東から）



6. 112 柱穴断面（東から）



7. 111 柱穴断面（東から）

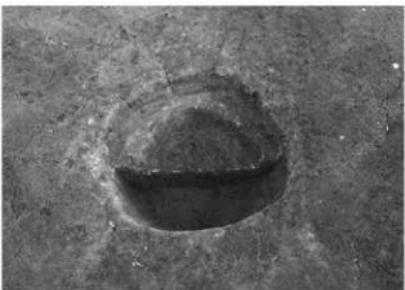


8. 110 柱穴断面（東から）

図版 18



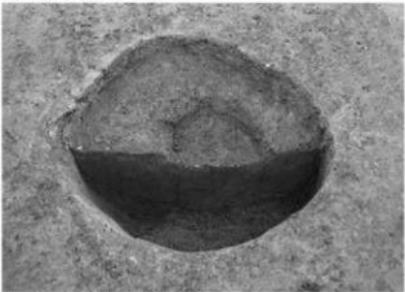
1. 109 柱穴断面（西から）



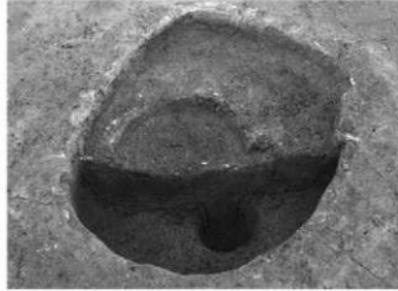
2. 108 柱穴断面（西から）



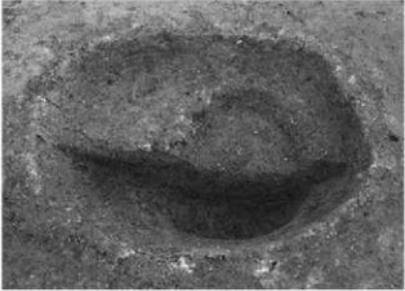
3. 106 柱穴断面（西から）



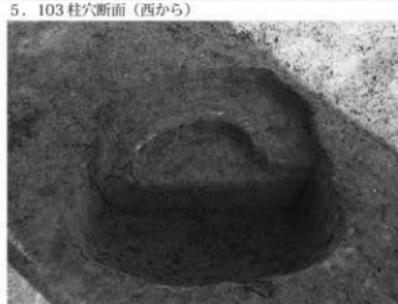
4. 105 柱穴断面（西から）



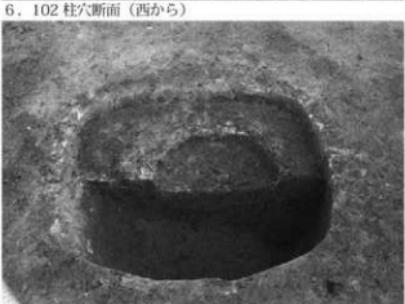
5. 103 柱穴断面（西から）



6. 102 柱穴断面（西から）



7. 121 柱穴断面（西から）



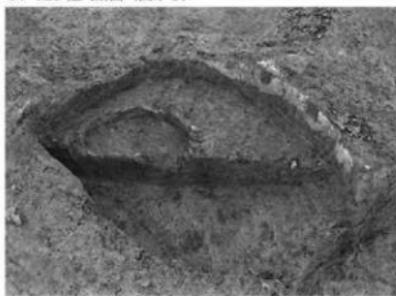
8. 122 柱穴断面（西から）



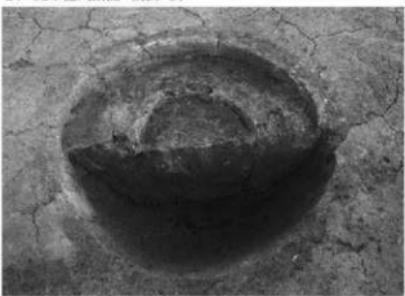
1. 123 柱穴断面（西から）



2. 124 柱穴断面（東から）



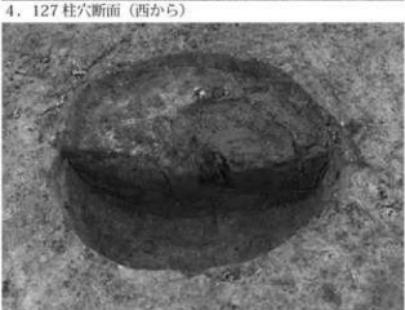
3. 125 柱穴断面（東から）



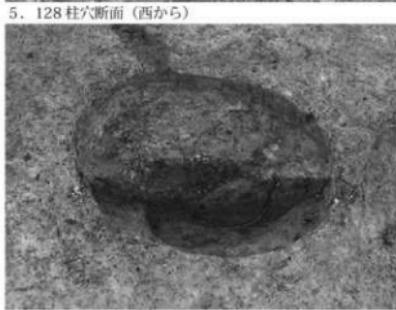
4. 127 柱穴断面（西から）



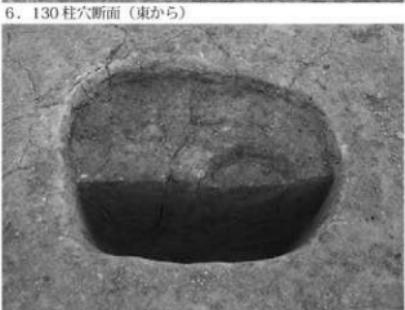
5. 128 柱穴断面（西から）



6. 130 柱穴断面（東から）

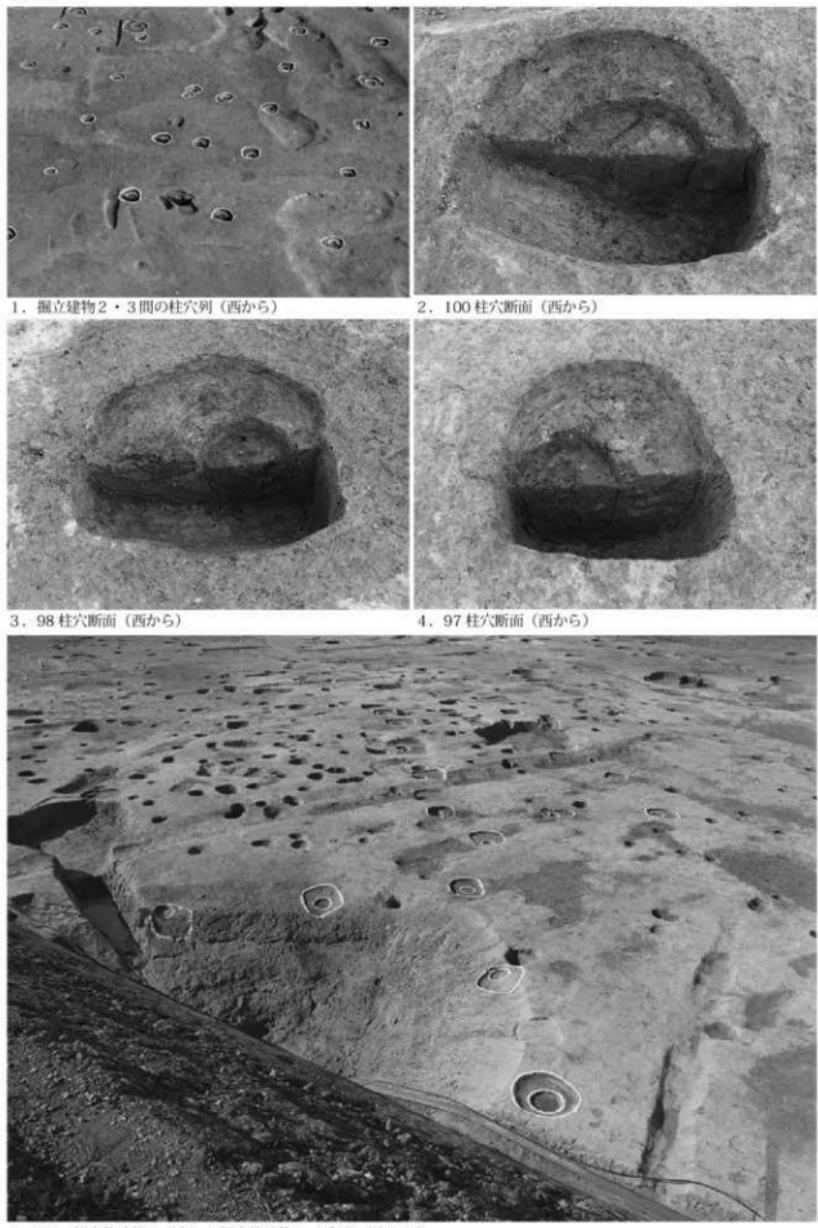


7. 133 柱穴断面（東から）



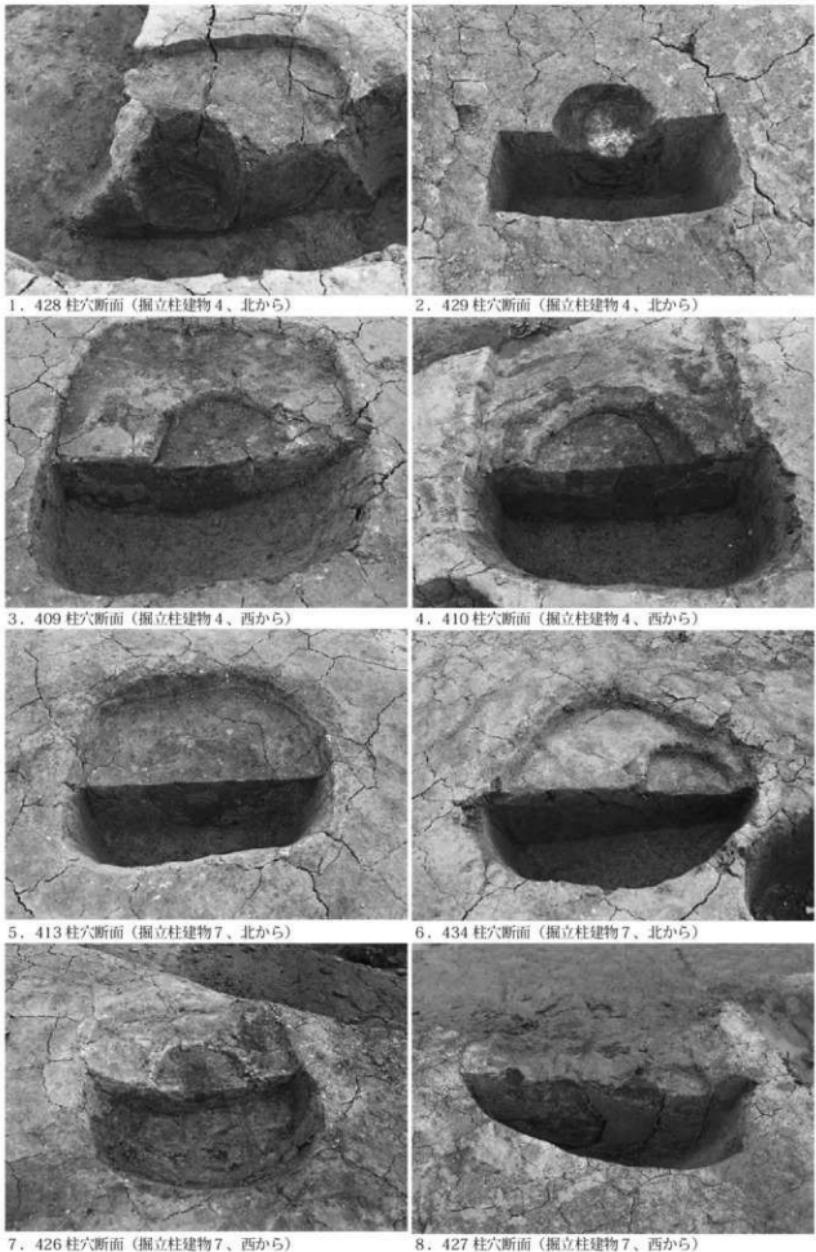
8. 104 柱穴断面（西から）

図版 20



5. 2 区 挖立柱建物 4 (奥) と 挖立柱建物 7 (手前) (東から)

図版 21



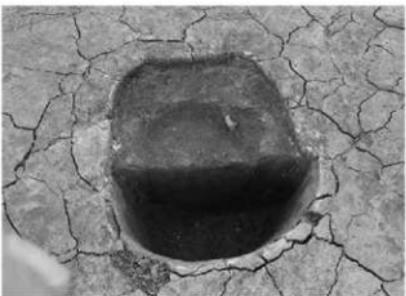
図版 22



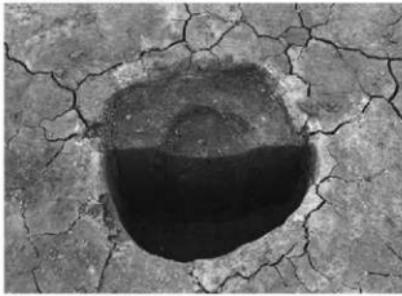
1. 2区 挖立柱建物5（奥）と掘立柱建物6（手前）（南から）



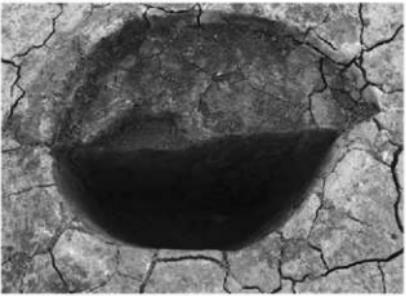
2. 174 柱穴断面（西から）



3. 175 柱穴断面（北から）



4. 176 柱穴断面（東から）



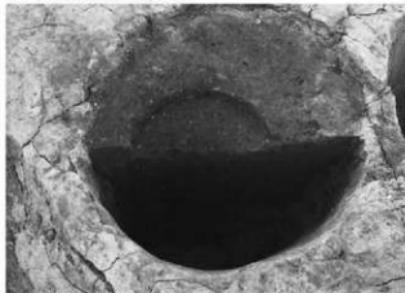
5. 177 柱穴断面（東から）



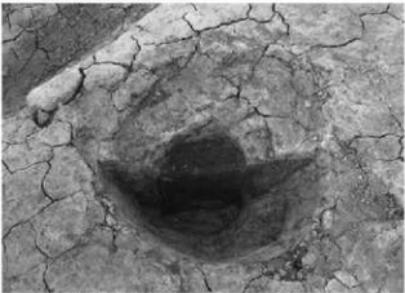
1. 178 柱穴断面（東から）



2. 180 柱穴断面（東から）



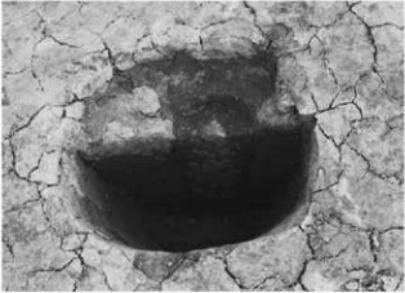
3. 181 柱穴断面（東から）



4. 182 柱穴断面（北から）



5. 183 柱穴断面（西から）



6. 185 柱穴断面（西から）



7. 186 柱穴断面（西から）



8. 187 柱穴断面（西から）

図版 24



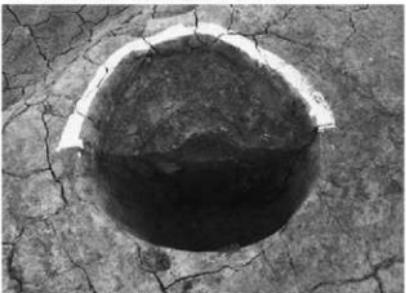
1. 169 柱穴断面（掘立柱建物 6、西から）



2. 170 柱穴断面（掘立柱建物 6、西から）



3. 171 柱穴断面（掘立柱建物 4、西から）



4. 172 柱穴断面（掘立柱建物 6、北から）



5. 134 柱穴断面（掘立柱建物 8、西から）



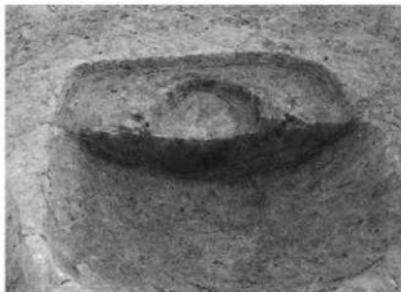
6. 135 柱穴断面（掘立柱建物 8、西から）



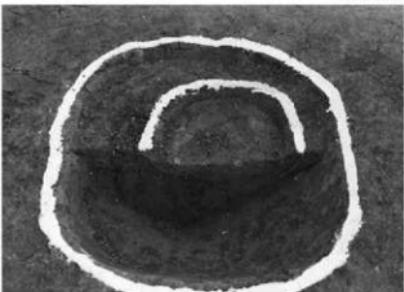
7. 136 柱穴断面（掘立柱建物 8、西から）



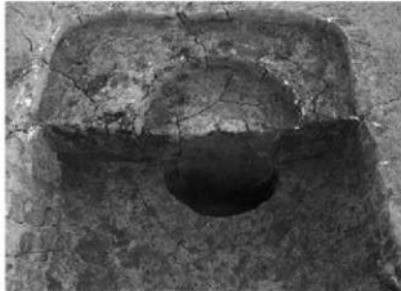
8. 138 柱穴断面（掘立柱建物 8、東から）



1. 143 柱穴断面（掘立柱建物 8、西から）



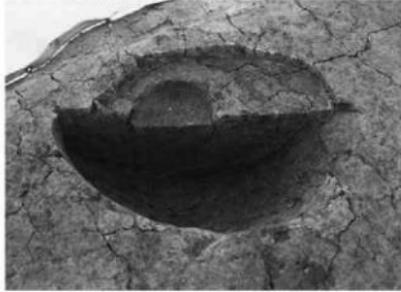
2. 146 柱穴断面（掘立柱建物 8、西から）



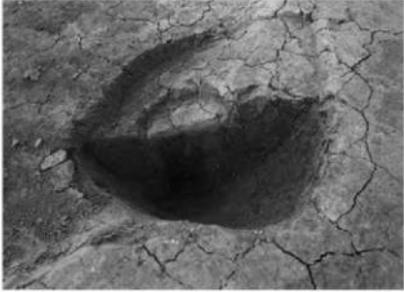
3. 147 柱穴断面（掘立柱建物 8、西から）



4. 141・162 柱穴断面（掘立柱建物 8・10、東から）



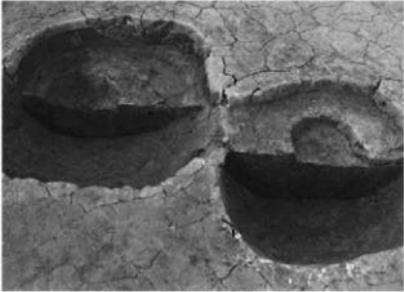
5. 151 柱穴断面（掘立柱建物 9、北から）



6. 152 柱穴断面（掘立柱建物 9、東から）

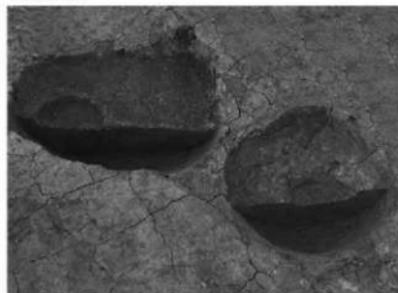


7. 153・164 柱穴断面（掘立柱建物 9・10、東から）

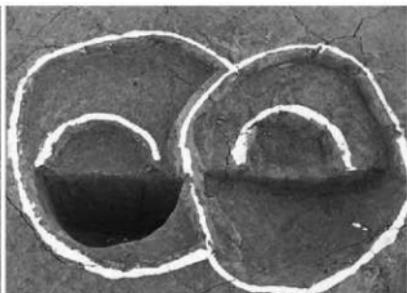


8. 154・165 柱穴断面（掘立柱建物 9・10、東から）

図版 26



1. 155・166 柱穴断面（掘立柱建物 9・10、東から）



2. 159・160 柱穴断面（掘立柱建物 9・10、西から）



3. 167 柱穴断面（掘立柱建物 10、東から）



4. 76 柱穴断面（掘立柱建物 10、西から）



5. 典型的な柱穴の重複関係



6. 208 土坑断面（西から）



7. 230 土坑断面（南から）



8. 563 柱穴断面（掘立柱建物 11、南から）



1. I 区 挖立柱建物 11 (西から)



2. 560 柱穴断面 (東から)



3. 561 柱穴断面 (南東から)



4. 562 柱穴断面 (南から)



5. 452 柱穴断面 (南から)

図版 28



1. 2区東半 古墳時代～古代の  
遺構面（東から）



2. 2区 441溝内土器出土状況  
(西から)



3. 1区 515土坑 土器出土状  
況（北西から）



1. 1区西側 古墳時代～古代の遺構面（西から）



2. 1区東側 古墳時代～古代の遺構面（西から）

図版 30



1. 1区東側 古墳時代～古代の遺構面（南から）



2. 2区東側 古墳時代～古代の遺構面（北から）

1. 2 区 404 土器出土状況  
(東から)



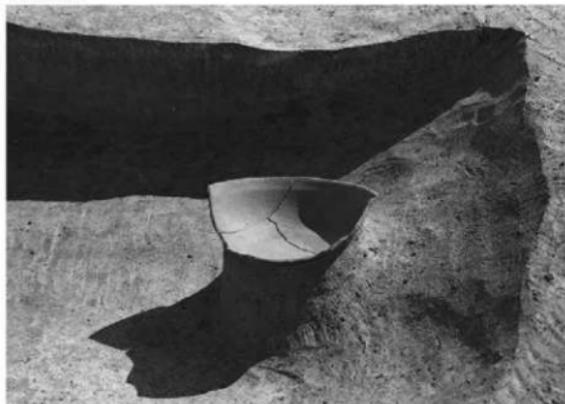
2. 2 区 405 土坑土器出土状況  
(西から)



3. 2 区 423 土坑土器出土状況  
(南から)



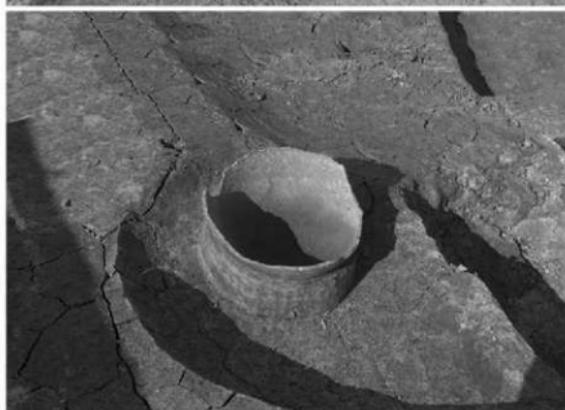
図版 32



1. 1区 445 土坑土器出土状況①  
(北から)



2. 1区 445 土坑土器出土状況②  
(北から)



3. 1区 478 土坑土器出土状況  
(南から)



1. 1区 506 土坑土器出土状況  
(東から)



2. 1区 525 土坑土器出土状況  
(西から)



3. 1区 535 土坑土器出土状況  
(北から)

図版 34



1. 2区 477 土坑断面（南東から）



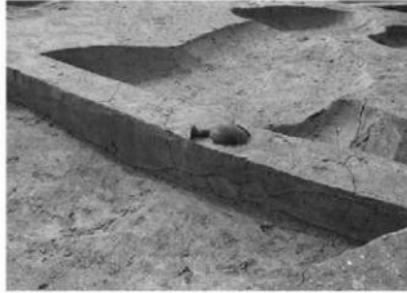
2. 1区 442 土坑断面（東から）



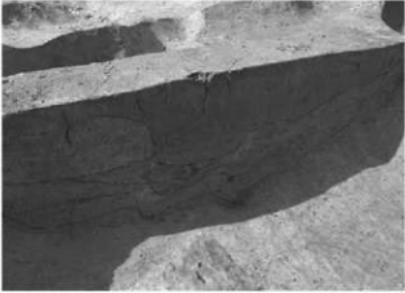
3. 1区 507 土坑断面・土器出土状況（東から）



4. 1区 514 土坑断面・土器出土状況（北から）



5. 1区 516 土坑断面・土器出土状況（北東から）



6. 1区 524 土坑断面（南東から）



7. 1区 525 土坑断面・土器出土状況（西から）



8. 1区 556 土坑断面・土器出土状況（北から）



1. 2区 1土坑土器出土状況  
(南西から)



2. 2区 425溝完掘状況  
(北西から)



3. 2区 425溝堤状遺構断面  
(北西から)

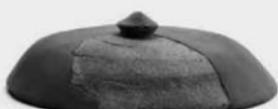
図版 36



64（左）63（中）65（右）



38



17



14



12



24



200



28



15

図版 38



123



121



116



117



118



119



124



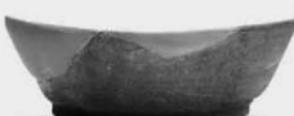
139



126



138



128

図版 40



109



99



149



144



150



158



27



155



153



157



159

図 42



160



156



164



165

図版 44



163



161



168



31



## 報告書抄録

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第274集

## 吹田操車場遺跡13

吹田操車場跡地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2016年12月28日

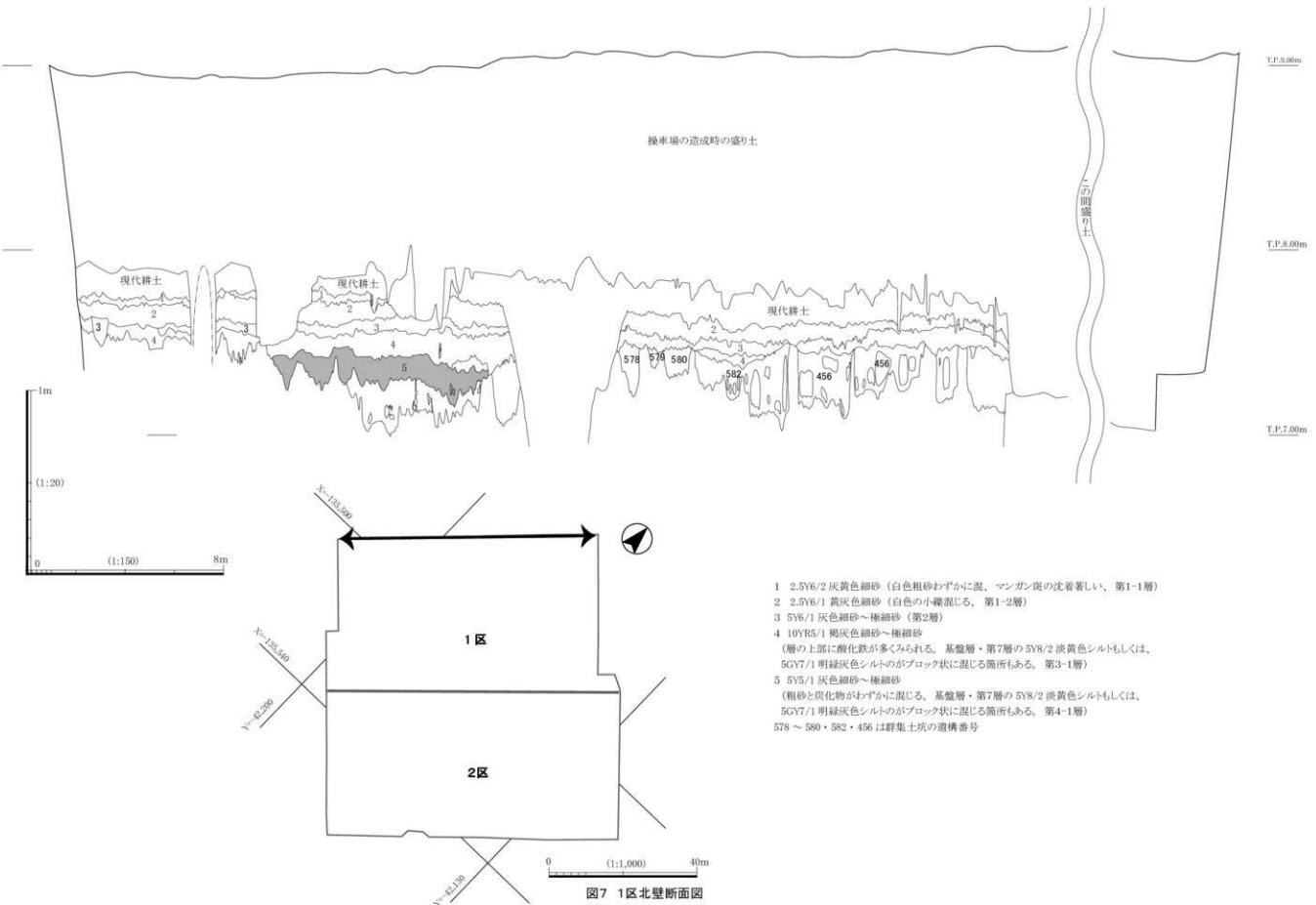
編集・発行／公益財団法人 大阪府文化財センター

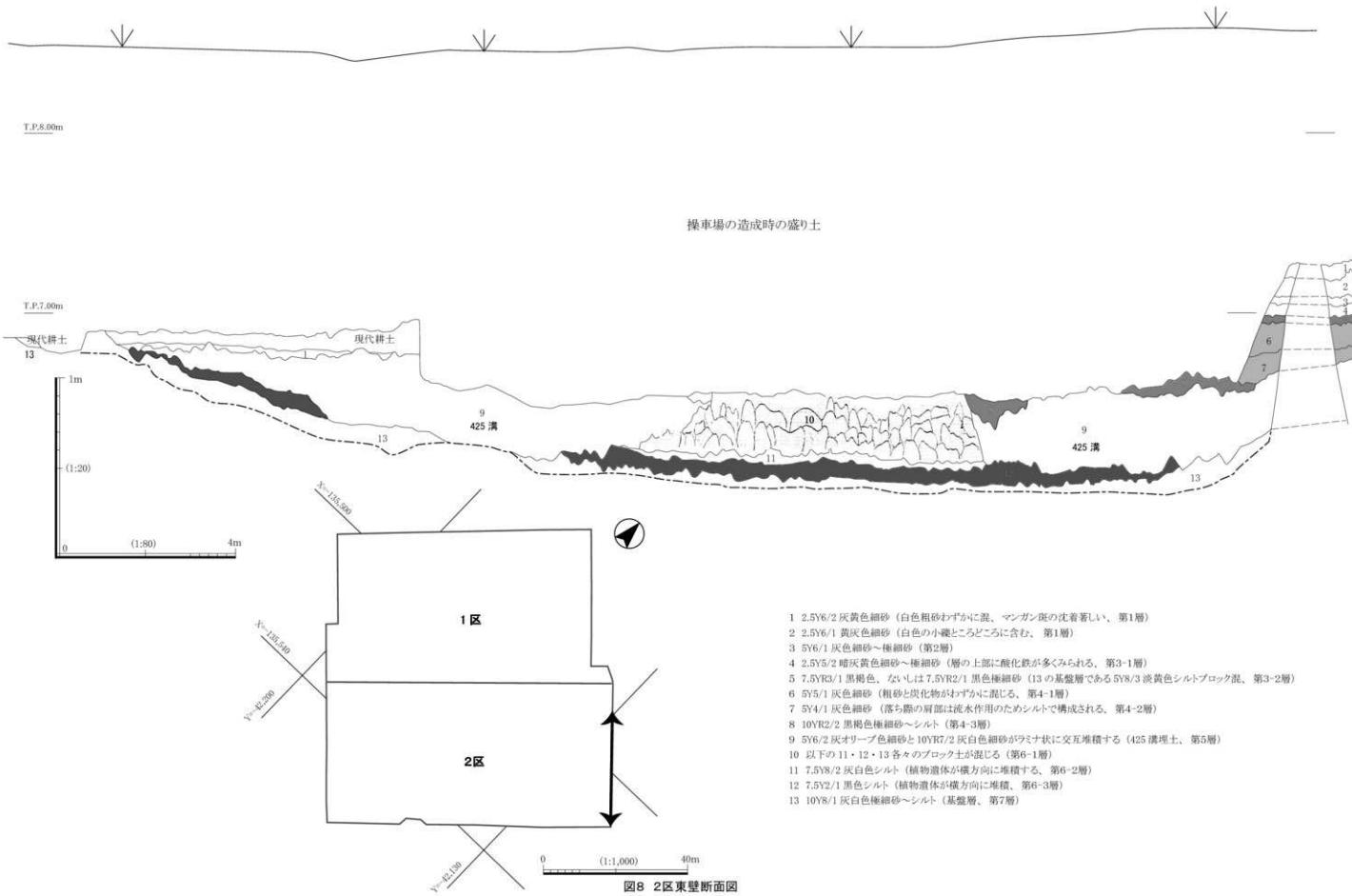
〒590-0105

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 近畿印刷センター

大阪府柏原市本郷5丁目6番25号





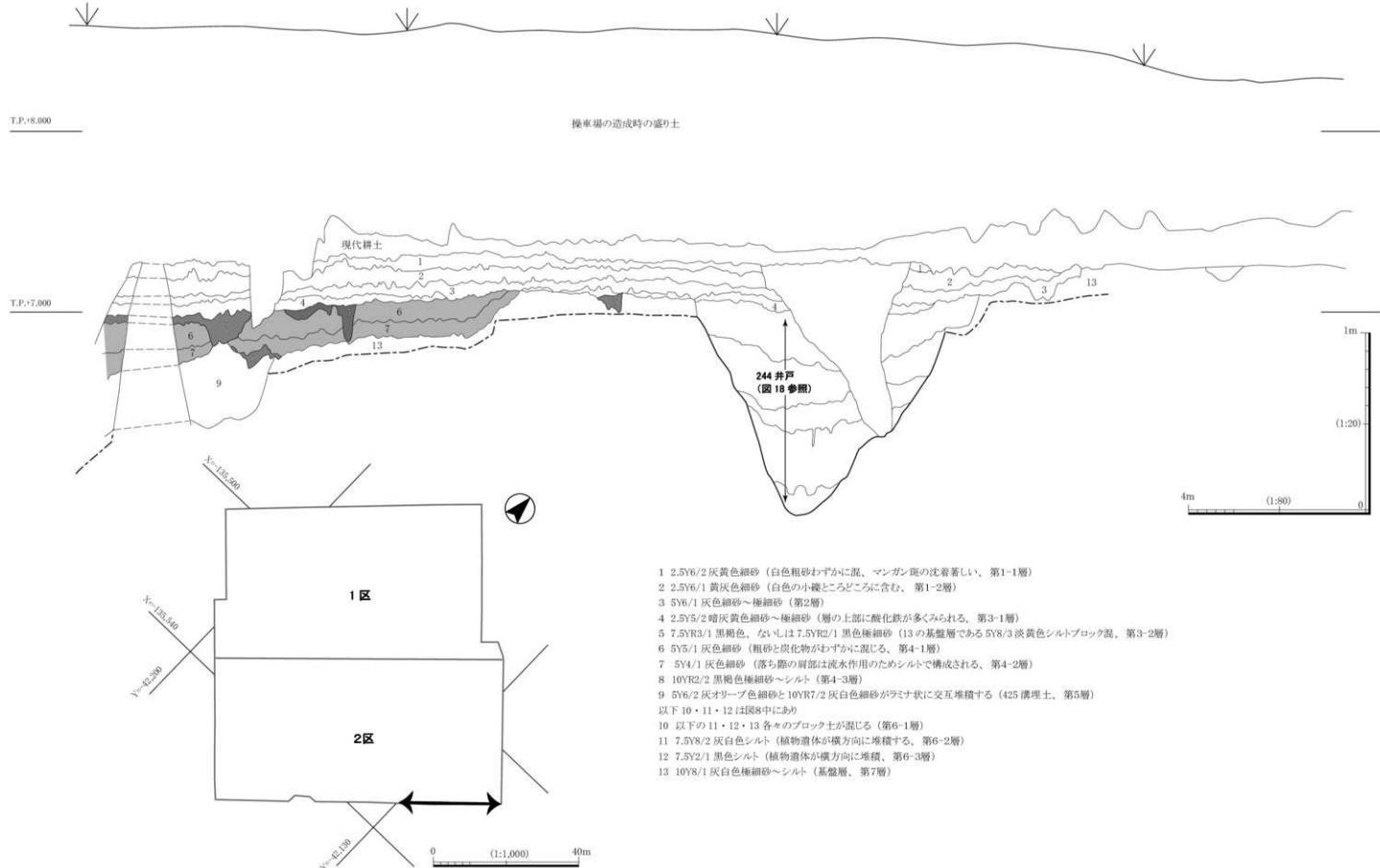
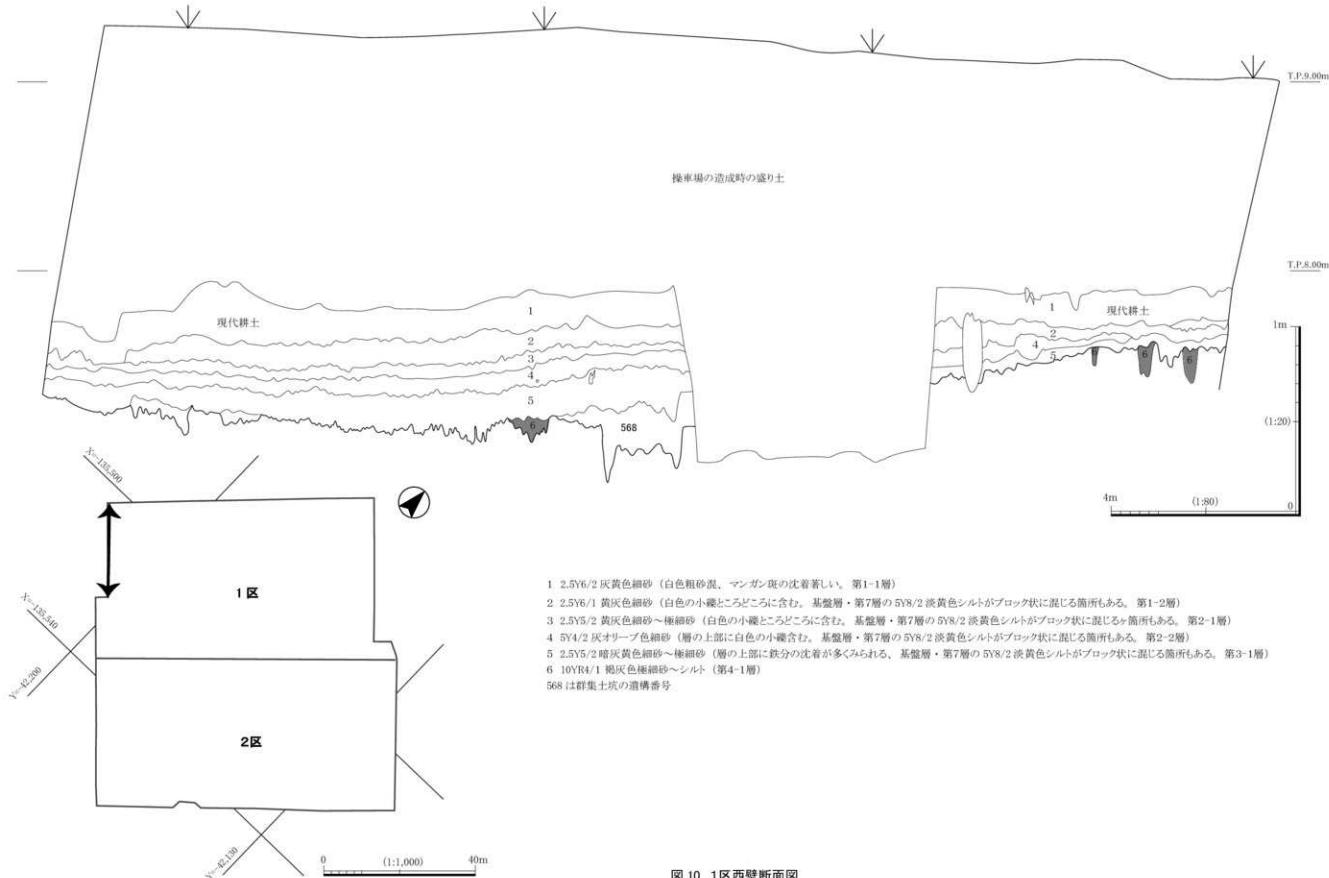


図9 2区南壁断面図



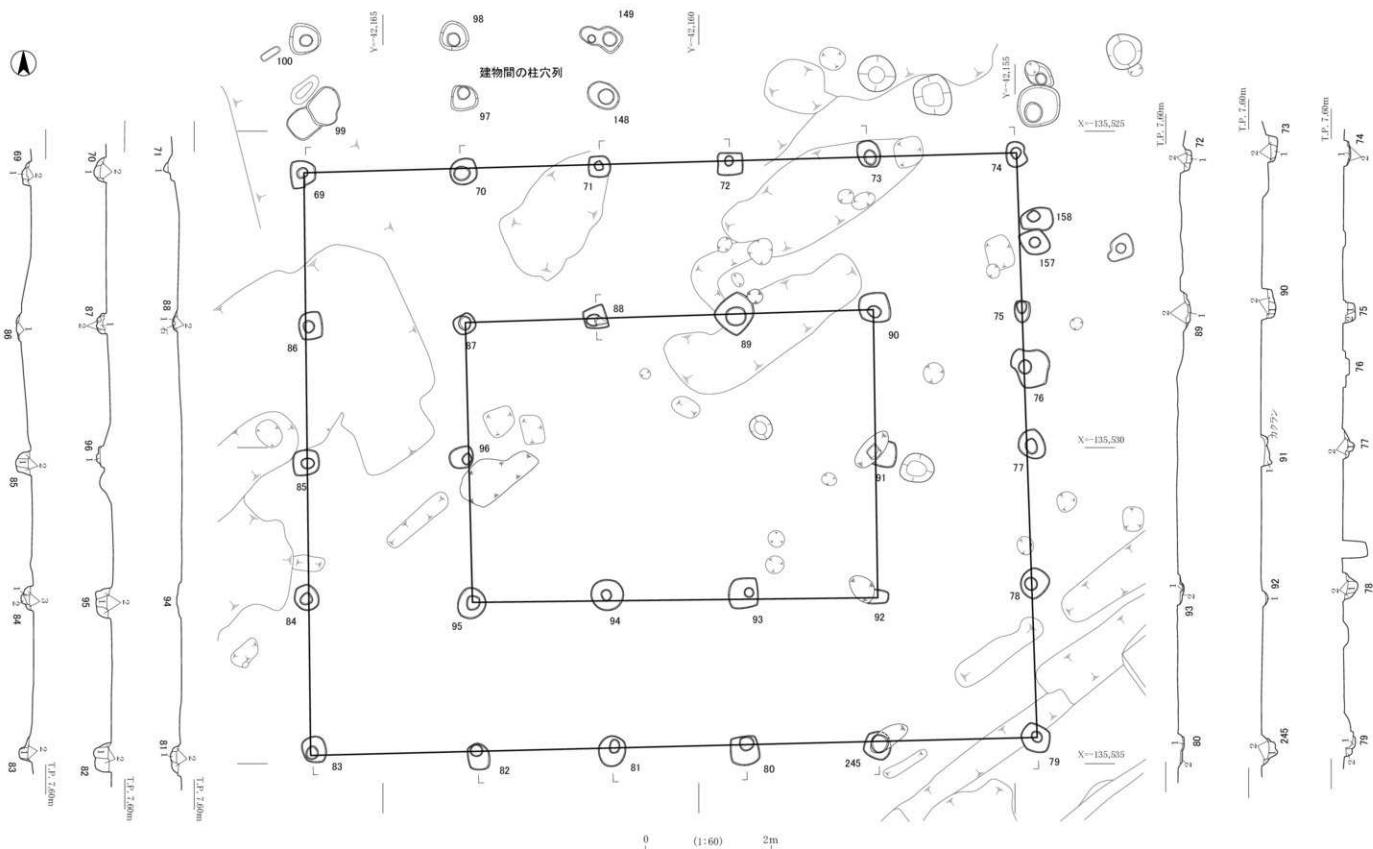


図 27 挖立柱建物2平面・断面図

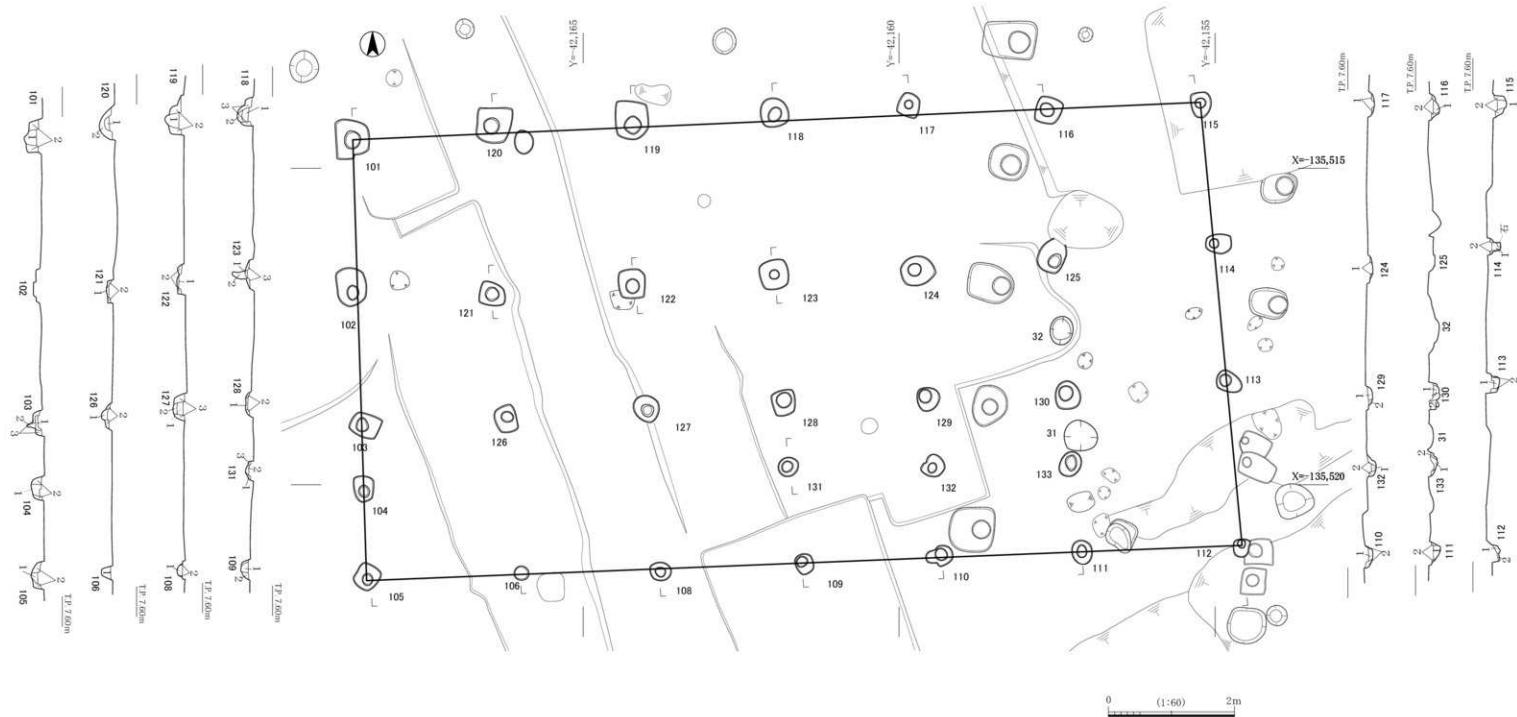


圖28 挖立柱建物3平面·断面図

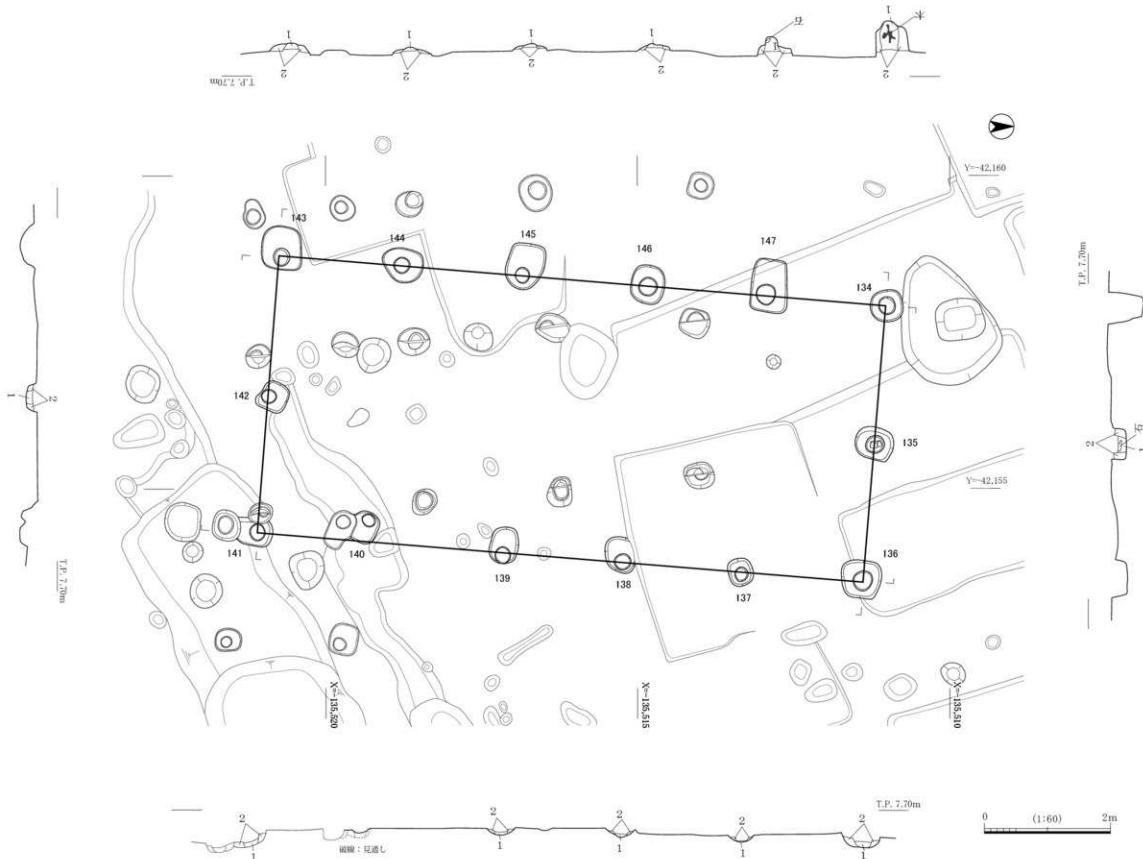


図35 振立柱建物8平面・断面図